

超次元ヒーロー ネプ テューヌ×ネクサス

ハードモード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交通事故に遭いそうになった子供を助けて死んでしまった大学生、緋剣 光矢（ひつるぎ こうや）

天国か地獄か何処に向かうか呑気に考えていると「超次元ゲームネプテューヌの平行世界を管理する神」と名乗る謎の女性に「ウルトラマンネクサスとしてあるゲームギョウ界に訪れた災厄と戦ってほしい」という頼みに光矢は即決で快諾する！

この物語は光矢Ⅱウルトラマンネクサスが守護女神たちゲームギョウ界のキャラたちと絆を繋ぎ強大な闇と戦う物語

光は心と心を繋ぐ・・・絆―ネクサス―

目次

introduction	光矢	—
ウルトラマンネクサス	—	1
Episode. 0	転生—リンカー	—
ネイション	—	9
序章 誕生するネクサス	—	—
Episode. 1	任務—クエスト	—
—	—	19
Episode. 2	襲来—スペース	—
ビースト	—	32
Episode. 3	巨人—ウルトラ	—
マン	—	45
—	—	—
Episode. 4	予言—プレディ	—
クシオン	—	59
第1章 紫の女神候補生とのコンタクト	—	—
Episode. 5	救出—レス	—
キュー	—	75
Episode. 6	帰還—プラネ	—
テューヌ	—	92
Episode. 7	悩み—ネプギア	—
—	—	104
Episode. 8	女神化—パープ	—
ルシスター	—	114
Episode. 9	出発—デイパー	—
チャ	—	128

第2章	黒の女神候補生とのクラツシユ	
Episode	10	黒の大地—ラ
ステイション—		142
Episode	11	教祖—神宮寺
ケイ—		156
Episode	12	遭遇—エンカ
ウント—		169
Episode	13	決闘—デュエ
ル—		180
Episode	14	激励—ステイ
ミュラス—		193
Episode	15	乱戦—コン
フューズ—		208
Episode	16	衝突—リグレッツ
ト—		234
第3章	白の女神候補生たちとのデイ	
フエンス		
Episode	17	白の大地—ル
ウイ—		249
Episode	18	伝承—ロア—
		261

i n t r o d u c t i o n . 光矢―ウルトラマンネク

サス―

緋剣 光矢（ひつるぎ こうや）／ウルトラマンネクサス

身長 166cm

体重 50kg

趣味 ゲーム（主にネプテューヌシリーズでRe・Birth3までプレイしている）
と特撮（特にウルトラシリーズだが他の特撮も視聴済）とアニメ鑑賞（当然アニメ版も
視聴済）

好きなゲームキャラ 秘密（一応転生前に推していたキャラは2人いる）

少し長めの黒髪で神曰く守護女神たちと釣り合う程の容姿であるが本人は過去に（特撮キモオタの親なしっこ）と呼ばれていた為自分の容姿に自信が持ててない（だがこのあだ名は周りの男子が光矢を嫉妬して呼んでいただけだと神は言っている）一人称は「僕」。

過去のあだ名からも中々のオタクなのであり転生して1つだけ落ち込んだ事はもうネプテューヌシリーズのゲーム（転生前にVⅡの発売日は発表されていた）とウルトラシ

リーズ（エックスの予告もされていた）が見れない事。

転生前から人一倍正義感が強く躊躇なくいじめの現場を目撃すれば庇ったり不良が悪戯をしていたら止めに入っていた、しかし相手を傷付けたくない思いから全く手を出さずいつも自分がいじめを受けたり暴力を受けていた（アイエフ曰く見た目からでも絶対に人を傷つけるような性格ではないらしい）、そんな自分に無力さすら感じており自信を責めていた節すらもあるが神を始め一部の者は彼を支持しており気付かない内に彼を助ける者も少なくなかった。

物心つく前に両親に捨てられ施設で暮らしていたがそんな風に見えないぐらいのお気楽で何処か間の抜けた部分があり上記から無鉄砲な部分もあるがちゃんと考察するべき時には考察し自己分析や人の機微には鋭く決して鈍くはない。

転生前の身体能力についてもただ喧嘩や武術をやっていないだけでそれなりにはある方で大抵のスポーツはそつなく熟す、勉強も中の上ぐらいで決して低いわけではない。

神から「ウルトラマンの力を授ける」と言いながら「ウルトラマンその者になる」と結構な詐欺を受けててもある程度覚悟していて神との「ゲームギョウ界を仲間と共に守る」という事にも決して安請け合いはしていない。

特撮好きでウルトラマンネクサスが特に好きだったのは「どんな追い込まれても決し

て諦めず何度も立ち向かい最後には自分自身で答えを出した孤門や適応者みたいになりたい」という憧れから。

ネプテューヌシリーズが好きなのは施設を出て一人暮らしを初めて最初に買ったゲームであり買った理由は「パッケージを見てピーンと来た!」らしい、あとパロディータも好きだったらしい。

自分の授けられた力に喜びはするも不用意に見せつけるような行動は取らず咄嗟には自分の正体を隠そうとしている、これはウルトラマンが「決してすべての人が理解されるわけがなく、危険視する者をいけば快く思わない者もいる」というウルトラシリーズ作品を見てそういう考えも持っていた為（必ずしも人の為に戦う姿が理解されるとは思っていない）

アイエフやコンパの声だけですぐに気付いたりモンスターの配置すら覚えている事からネプテューヌシリーズは人並み以上にやり込んでいる様子。

ガルベロスの特徴も良く知ってことからウルトラ関連の知識もネプテューヌシリーズと恐らく引けを取らない。

転生してからは自分の身体能力・感覚などが常人離れた事に多少は戸惑いモンスターを倒す事に罪悪感も覚えるなど苦労も絶えないがアイエフやコンパとの出会いで新たな友を作り正体を知りながらも光矢に理解を示したイストワールの願いと共にゲ

イムギョウ界を守る為に犯罪組織マジエコノヌとスペースビーストと戦う事を決意する。

エボルトラスター&ブラストショットは光矢の力で作り出している為に他の者には一切扱えず例え奪ったとしてもいつでも手元に戻せるので変身アイテムを奪われて変身不能になる事はない。

神に与えられた特典

強制 ウルトラマン（ネクサス）の力を授ける（だがこれは授けるといふよりウルトラマンネクサスという形を持った力その者にし人間ではなくなっている）。

1つ 平成ウルトラマンの技をすべて使える（範囲はティガからギンガまで、というのも光矢が視聴していないウルトラ作品の技は使えない）。

2つ どこまでも強くなる力と身体。

3つ 自分の強さをレベルとしていつでも見える（これは各章の初めに載せます、LvとHP（変身している分）・SKL（覚えている技の数）・NXS（光矢と絆を繋いだ人数））

4つ オリジナルモードの実装。

5つ ストーンフリーユージェルを思い描いたライドメカに変化する。

ウルトラマンネクサス

光矢が変身したウルトラマンであり姿は原作に非常に似ているがウルトラマンノアと同一ではないことから背中のイージスを思わすクリスタルはない。

ウルトラマンネクサスは光矢その者であり光矢が力を開放した姿と言って良い、体制であるが光矢の体力が人間状態で技を発動すら出来ずエポルトラスターを引き抜けなかったが（ある種の警告サイン）強い意志によって変身出来た為にある程度気合で補正出来る。

原作では光を「受け継ぐ」という意味合いが強かった事に対し近作品では光を「繋ぐ」という意味合いを強くしている、光矢のレベルアップと同等に光矢が絆を繋いでいく毎に強くなり力を引き出していく、そして時には「繋いだ絆」が光矢に力を与える（ガル

ベロス戦でもコアファイナルに似た現象が絆を繋いだ事で起きた。

初戦ではそれなりに動いていたがこれは視聴したウルトラシリーズの戦い方を真似ただけで実際はかなり戸惑いながらも戦っていた。

アンファンス（変身直後はこの形態）

ネクサスの基本形態で別名「銀色の巨人」、基本形態らしく一番体力の減りが少ない、原作との一番の違いはこの形態でもメタフィールドを展開出来る事。

使用必殺技

クロスレイ・シウトローム

ジュネツス???

ジュネツス???

ジュネツス???
(完全オリジナルは多分これだけ)

神様(自称)

容姿 大人ネプテューヌに非常にそっくり(まだ光矢が転生する前の時間でははまだV IIは発売されていなかったたので変な言い回しになっていた)

光矢にウルトラマンネクサスにし転生させた張本人。

前々から光矢には注目しており数ある候補者の中で光矢しか選択する気がなかった程。

その理由はどんな時でも自分を曲げない強い意志と優しさを持っていた為と語って

いるがそれ以外にもかなり褒めていた事からもかなりのお気に入りだと伺える。

読心能力がある他に先述の特典を与えたり正に神の如き能力を発揮している。

だが「神は嘘をつかない」と言っておきながら光矢に「ウルトラマンネクサスの力を授ける」という特典に対し「ウルトラマンネクサスその者にする」という結構な詐欺まがいな事もしている（だが3つめの特典を考えるとどうしても人間のままだと限界があり特にネクサスは肉体が酷使される事を考えると妥当とも思われる。）

Episode. 0 転生—リンカーネーション—

僕は緋劍ひつるぎ 光矢こうや、突然だけど僕は今さっき死にました！

言いたい事は分かる！、だっていきなり死んだって言われても何も分かるわけないし
まずは僕が死ぬ直前に起きた出来事を教えます。

確か・・・バイト終わりで自分の部屋に帰っている最中に子供が車に轢かれそうな現場を目撃して慌てて突き飛ばして助けたまでは良かったけど僕の方が轢かれて死んじゃったんだよね・・・

ちなみに僕は大学に入学したばかりの1年、入学当初から「子供っぽい」ってみんなにからかわれています。

今僕がいる場所だけど、なんか一面真っ白でまるで天使でも降りてきそうな所でなんか僕自身はあんまり死んだ感覚がないんだけど死んだ後ってどうなるのかなって実は少し気になっている所だよね我ながら呑気だと思う。

「確かに呑気だね・・・それだけ肝が据わっているのかもしれないけど」

そうかな〜、褒めても何も出ないよ・・・っ!?

「今更気付いたんだ・・・」

ええー!!、いきなり紫髪の某駄女神のそっくりさん? でもなんか何処か大人びている女性が神話でよくある白い服装で現れたよ!?

「その駄女神がいる世界を管理している神だよ、緋剣光矢」

神様?、天使じゃなくて神様キター!!、さつきから僕の心の声分かるのは神様だからか!・・・うん?、なんかさつき気になる事を言ったような?

「私が「超次元ゲームネプテューヌ」と君たちが呼んでいる平行世界を管理している事だね」

「それってあのゲームの・・・嘘!?!」

「本当、神は嘘をつかない」

スゲー!!、あのゲームすごく好きだったんだよな!

もう死んで出来なくなっちゃったけど・・・あれ?、いきなりすごく自分が死んだ感覚が?

「ふふっ・・・面白いね、普通死んだら思い残した事があった後悔したり落ち込んだりするものと聞いたけどね」

「それは・・・僕は毎日心残りだけはないようにって生きてきたから」

「その為にいじめに遭っているクラスメイトを庇って自分がいじめられても?」

そう僕自身そうやって生きてきた手前によくいじめに遭ったり不良の人たちにタコ

殴りにされたっけ？

でも「あれに」比べたらそんな事なんていくらでも耐えられた。

「物心がつく前に親に捨てられた事かな？」

「うん・・・今はもう全然だけど幼稚園ぐらいの時は正直辛かった・・・」

僕は両親の顔すら知らず捨てられてつい最近まで施設暮らし、でも僕には同じ施設に友達がいたおかげで別にグレたりはしなかったけど。

「だからこそ、ヒーローに憧れたのだろう？」

「かも・・・しれない」

僕が「子供っぽい」って言われる理由が特撮ヒーロー・・・特にウルトラマンが大好きだったから。

「その中でも「ウルトラマンネクサス」が特に好きだね」

「なんでもお見通しだね、流石は神様」

なんか感傷に浸っているような気がするけど、この神様は俺をどうするんだろう？、やっぱり天国か地獄かどっちに行くか決められる？

「君はどちらにも送らないよ、実は私が管理する世界に転生してもらおう事になっている」

「えっそれって「ゲームギョウ界」に転生するって事!？」

「そういう事だね、そしてこれまでの君の行いを考慮して転生の際の特典をあげるよ、で

も1つは強制的に授けるけどね」

ゲームギョウ界で暮らせるだけで叫びそうになっていくのに特典までくれるなんてなんて太っ腹な神様なんだ!?

「煽っても何もしないよ、強制するのは君にはウルトラマンの力を授かってもらう、君の一番好きなネクサスで良いね?」

「それって僕にとつてはむしろ褒美って言いたいけど・・・もしかしウルトラマンネクサスとしてゲームギョウ界で戦えって事?」

「1人という訳じゃないよ、その世界の守護女神や仲間たちと協力して戦ってほしい、実は・・・」

別に戦う事には良いけど何か神様には深刻な事があるみたい。

「本来ゲームギョウ界にいない災厄が世界を超えて現れてしまったけど、今そのゲームギョウ界に行けるウルトラマンがいなくてね、最後の手段として君をウルトラマンとして転生させる事にしたんだ」

なるほど・・・ウルトラマンで対抗するって事は怪獣たちの知識を知っていて且つネプテューヌの世界の知識も把握している最も相応しい人材が僕なんだ、でもあの時僕が死んでいなかったらどうなっていたんだろう?」

「君はあの場で死ぬ事が確定したしウルトラマンにするのは君って決めていたから」

「どうしてこんなに弱い僕を？」

結局庇おうとして一緒にタコ殴りされるような僕を選んだだろう？、何も守れていない証拠なのに……

「君は確かにこれまで力はなかったかもしれないがその君には意思の強さと優しさがあ
る、そんな君だからこそになってほしい」

「そこまで神様に言われたら照れるなあ……そこまで言われたら断るなんて言う選
択肢はとつくに消えた！」

「僕で良ければウルトラマン……出来ればネクサスになります！」

「その返事を待っていたよ、では他の特典はこのボードに書いてね、個数は……5個ま
でにしよう」

神様に白いボードとペンを渡されるけどどうしようかな……3つは決まっているん
だけどあと2つは……よしっ！これに決めた！

ボードに特典を書いて神様に渡すけど神様が凄い唸っている。

別に「女神ハーレムフラグが必ず建つ」とか「一生遊んで暮らせるお金が貰える」と
か邪な特典は書いていなかったと思うけど……

「何個か私が最初から与える物と被っているね……「ブラストショット」と「ストーン
フリーユージェル」は元々ウルトラマンネクサスになる特典の付属品だし「容姿を守護女神

「たちと釣り合うぐらいに良くする」って言うのも今でも充分釣り合っているから却下、後は良いけど何か2つない？」

後の3つは「平成ウルトラマンの技を全部使えるようになる」と「どこまでも強くなる肉体と力」と「自分の強さをレベル(LV)としていつでも見えるようにする事」だったけど、そんなに僕って容姿って良かったかな？

小中学校の時なんて(特撮キモオタの親なしっこ)なんて呼ばれていたけど。

「それは周りの男子たちが嫉妬してそう呼んでいただけだよ、実際に君は女子からそう呼ばれていなかっただろう？」

神様は当然のように言うけど、そう言えばそうだったような？・・・ってまずは2つの特典を考えないと！

「ないのであれば、1つは君が考えていたネクサスの「オリジナルモード」と「君が頭に思い描いたライドメカにストーンフリーユージェルが変化する」というのはどうかかな？」

神様からの提案に僕は驚愕していた、ネクサスのオリジナルモードっても僕の黒歴史ノートまでバレてる!?!、でも好きなライドメカに変化するの嬉しいなあ、「ファイターEX」や「アスペリオル」なんて好きなんだよなく勿論ネクサスの「クロムチェスター」も好きだけど。

「どうやら決定みたいだね、では早速転生してもらおうよ」

神様はにこやかな表情で右手から大きな杖を取り出し真上に掲げたら俺の身体が光り出した!?

「詳細は君の家に置いておくから、ちゃんと読んでねそれと・・・」

「ゲームギョウ界を仲間と一緒に守って・・・」「ウルトラマンネクサス」

「・・・ラジャー!!」

僕は某ネオフロンティアな防衛隊の決めポーズで言うと神様は笑顔で僕を見送り僕は眩い光の中で謎の空間から消えてしまった。

『チユンチユン・・・』

鳥の朝チユンで目覚める僕は見慣れないベットで寝ていて辺りを見渡す、そういえばゲームギョウ界に転生したんだっけ？

なんかすぐくデカい使命を託された気がしたけど、今度はウルトラマンネクサスの力を授かったから頑張らないと！

僕はベットから起き上がると置いてあった机の結構分厚い本が置いてあるけど神様の言っていた詳細ってこれ？

僕はその本を読み進め断片的には内容を把握した。

1、僕がいるゲームギョウ界はmk2ベースで今の時代は守護女神たちがマジック・ザ・ハードに敗北してから1ヶ月後。

2、僕は守護女神と同じく年を取らずある1つを除いての毒や麻痺などにはならない。

3、僕がレベルアップするごとにウルトラマンネクサスで使える技を増えて技を使用する際の身体への反動も抑えられ人間状態でも技を使えるようになる。

4、ウルトラマンネクサスⅡ緋剣光矢その者でありウルトラマンノアと同一ではな

い、どこまで強くなってもウルトラマンネクサスⅡ緋剣光矢のまま。

5、ウルトラマンネクサスは体力制、メタフィールド展開時も制限時間はないがジュネツスはアンファンスよりも2倍以上の負荷が掛かりメタフィールド展開時も同様、同時に行うと4倍の負荷が掛かる、だがメタフィールドはアンファンス時でも展開可能。

6、3年間みっちり鍛え（レベルアップ）、パープルシスター救出後は共に行動する、既にお膳立ては済んでいる。

つて結構ツツコミどころがあるなあ・・・特に怪獣との闘いに巻き込みたくないからなるべく原作キャラには関わりたくなかったけど・・・ああまだ書いてあった。

7、守護女神や仲間たちとの絆でもレベルアップする、積極的にコミユニケーションを取ってね♪

・・・間違いなくこれで釣ろうとしているね、1本釣りされる前に・・・

僕は自分の家中を探し回り自分の家がそれなりに広い事に驚くが肝心な物が全く見当たらなかった

「エボルトラスター」・・・ウルトラマンネクサスに変身する為に必要なアイテムだが何故か全然見つからない。

僕は無駄だと思いつながら左手を突き出し「出てこい！」と願うと・・・

僕の左手が光始め収束していくとなんと鞘のついた短剣のようなアイテム「エボルト

ラスター」が現れる！

「えっ？うそっ！、じゃあもしかして・・・」

僕は家の端っこにエボルトラスターを置き離れた寝室に戻りまた「出てこい！」と願うと。

光と共に目の前にエボルトラスターが現れる、どうやら願うだけで目の前に現れる便利機能つきみたい。

という事はブラストショットも・・・と思い両手をバツと広げると両手に光が溢れ出し収束していくと小型銃「ブラストショット」が両手に現れた。

「本物のエボルトラスターにブラストショット・・・よしっ！、まずはレベル上げだー!!」僕はずっと憧れていた本物のエボルトラスターとブラストショットを手にして意気揚々と外に出掛けた。

いずれ守護女神たちを救い出し仲良くなつてこの世界を災厄から守る為に!!

序章 誕生するネクサス

Episode 1 任務―クエスト―

僕は今ギルドと呼ばれる仕事斡旋組織がある施設に向かった。

勿論仕事を請け負う為に来たのだけど・・・はつきり言つて目の前のコンソールの使い方が分からなかった。

言い訳をすると僕は機械が苦手な上に明らかに僕が転生する前の現代より遥かに進んで見た事もない機械だらけだった。

「もしかしてお困りですか？」

もの凄いわんわかしめた聞き覚えのある僕は顔を向けるとそこにはメーカーキャラであるコンパが困っていた僕を助けようとしていた。

「あのお・・・恥ずかしながらこれの使い方が良く分からないんです・・・」

「どうしたのコンパ？、また誰かにナンパでもされているの？」

「あつアイちゃん、大変です！、この人タッチカウンターの使い方が分からないみたいですよ！」

また何処かで聞いた声が聞こえると次は腰に9つの携帯電話を持つメーカーキャラ

アイエフと出会いアイエフはうんざりしていたように頭を抱えていた。

「その年でタッチカウンターの操作を知らないなんて・・・もしかして別の世界の人とか言わないでしょうね？」

「いや、あのお・・・実は山奥で暮らしているんですか父が倒れて急にお金が必要になってクエストを受けようと思つて来たのですが・・・」

アイエフのズバリな推理に僕は咄嗟に嘘をついてしまふ、アイエフは疑つていたがコンパは涙目になつていた。

「そうだったんですか!?!、大変ですわ・・・任せるです!、私とアイちゃんでしたかり教えるです!」

「ちよつとコンパ!?!、またそんな安請け合ひして!?!」

「困つた人を見捨てたら看護師の名折れです!」

アイエフは根負けしてコンパと一緒に僕にタッチカウンターとやらの使い方を教えてもらった、まさか初日からこの2人に会うとは思わなかつたけど、まさか機械の触り方まで教えてもらうとは・・・機械だけは苦手だけどいきなり迷惑を掛けちゃつたな・・・

僕は2人に教わりながらクエストを何個か受注する事が出来た。

「すいません・・・見ず知らずの僕なんかの為に時間を割いてもらつて・・・」

「気にしないでくださいです、「困つた時はお互い様」です!」

「まあ大した事なかったから別に良いわよ．．．それよりも」

コンパは天使の笑顔で答えてくれるがアイエフは僕を怪しむように見る

「あなた．．．本当に人間なの？」

僕は思わず顔を引きつってしまおう！、まさか1回も変身していないのにバレるとは思わなかったから。

「アイちゃん！、なんて失礼な事を聞くのですか!？」

「だってコンパも感じない？、何か分からないけどこの人を見てみると何処かネプ子やネプギアたちと近いものを感じるの」

「確かに私たちもそう思っていたのですが、それはこの人が優しい人だからです」

ウルトラマン．．．っていかもう僕と守護女神たちって近い存在なのかな？って考えているとコンパが勘違いしてくれてアイエフも納得したような素振りを見せていた。

「確かにとてもじゃないけど誰かを傷つけるような事を全くしそうにないのは確かだね」

確かにこの方人を殴った事なんて一度もない．．．自慢できるような大層な事じゃないけど。

「そう言えばあなたのお名前は？、私はコンパって言うです」

「私はアイエフ．．．まあよろしく」

「僕は緋剣光矢って言います、憶えにくいと思いますので光矢で良いです」

実は2人はゲームをやっているから良く知っているんだけどね・・・取り敢えず自己紹介したけど2人はちよつと困惑していた。

「コウヤさんですね？、改めてよろしくお願ひしますです♪」

コンパに握手を求められ応じてアイエフにもするよう促されアイエフとも握手する
(アイエフは嫌々そうだったけど)

「・・・暖かい」

アイエフはそう呟き僕とコンパがアイエフを凝視するとアイエフは慌てて僕の手を払い除ける。

神様、やっぱり俺ってキモオタみたいですよ、思いつきり手を払い除けられました・・・

O r z

「で・・・ではコウヤさん、また会う時を楽しみしています」

「はい、こちらこそ楽しみにしています・・・」

コンパとアイエフはそう言って去っていき一度振り返ると申し訳なさそうにコンパがお辞儀をしてくれた。

コンパが優しいだけなんだよな多分アイエフの反応が正しいと思う。

ちよつと気持ちは沈んだけど僕はクエストを達成する為にバーチャフォレストという森に向かう事にしたが距離もあるしどうせならストーンフリーゲルで行こう。

流石に市街地の真っ只中では呼べないので僕は路地裏まで移動しブラストショットを取り出し銃のような形をなるガンモードに変形させて真上に向かって撃ちまらで信号弾のような光弾が発射される。

すると程なくして上空から石柩のような原作では適応者デユナミストの移動アイテム「ストーンフリューゲル」が現れる。

そういうえばストーンフリューゲルって念じるだけで好きなライドメカに変化するんだっけ？、なら物は試しに原作ネクサスで登場した戦闘機クロムチェスターαをイメージする。

するとストーンフリューゲルが光り輝くと一瞬で本物のクロムチェスターαに変化した！

僕は目を輝かせて見ていたが戦闘機なんて動かした事ないし、どうやって乗ったら良いか悩むと今度は僕が光になりクロムチェスターの搭乗席まで移動してしまう。

僕は驚きの連続だが取り敢えず「オプチカモフラージュ（俗に言う光学迷彩）を展開してバーチャフォレストまで向かって」って念じると本当に展開してバーチャフォレストまで向かっていた。

ウルトラマンの力ってスゲーって思ったりしたけど、もう多分僕は「緋剣光矢という人間がウルトラマンの力を手にした」ワケじゃなく「緋剣光矢という人間の姿と名前を

持っているウルトラマンその者」になっただけで事だよ。未だに実感は沸かないけど詳細とアイエフの態度を見る限りもう僕は人間ではなくなっただよな。

別段人間でいたいとは思わなかったしウルトラマンの力を手にするんだからそれなりに覚悟は最初から出来ていた。

それよりも僕はもう目の前で誰かが苦しんだり悲しんだりするのは見たくない！、だからこそ僕は今度はウルトラマンとしてみんなを守って見せる！．．．なんて意気込みながら僕が住むことになった守護女神パープルハートが治めているプラネテューヌを見て決意を固めた。

そういえばアイエフもコンパも街の外に向かっていたような．．．？

クロムチエスターαの乗ってからわずか5分でバーチャフォレストの入り口に到着した。

僕はまた光になって外に出るとクロムチエスターも光となって霧散し消滅してしまふ。恐らく異次元にでも保管されているんだろう。

僕はブラストショットを構えて森の中に入っていきまずはクエストの1つ薬草を摘み始める

この感じだと薬草のクエストは余裕だな、出来れば少し多めに取っておこうと摘んでいた時

「ヌラー」

特徴的な鳴き声と共にバーチャフォレストだけでなくこのダンジョンでも出没する雑魚モンスター「スライヌ」が現れる。

「やっとおでましか・・・お前には恨みはないがこれも生活の為だから」

僕はブラストショットをグリップとバレルを真っ直ぐに変形させたエアバーストモードに変形させバレル下部をポンプアクションしスライヌに向けてトリガーを引く。

すると球状の波動弾が発射されスライヌに直撃すると瞬く間に消滅した。

「ヌラー！」

断末魔を挙げながら消滅するスライヌを見て言いようのない罪悪感に襲われる。

僕は今さつき命を奪った、モンスターとは言えそこに生きてる命を僕は自分勝手な理由で奪ったんだ、綺麗事つてのは重々承知している、これから怪獣と戦つてもつと多くの命を奪う事になるんだから早く慣れなきやいけない．．．でも本当に慣れなきやいけないのか？

「「「又ラ〜」」」

そんな事を考えていると十体以上のスライヌの他にダイコンダーや馬鳥に加えスライヌの集合体ビツクスライヌまで控えていた。

「どうしよう．．．ポンプアクションのプラストショットだけじゃ数が多すぎる．．．そういえば詳細には」

と呟くと家に置いてあったはずの詳細本が光と共に現れ僕が見たいページが自動的に開かれる、これももう僕の力の一部つてわけね。

「え〜と何々．．．エアバーストモードでポンプアクションしてトリガーを引かず軽く振ると．．．」

僕は詳細通り行くとプラストショットの銃口から光の刀身が伸びてきた。

「これが「ソードモード」か．．．っ!？」

僕が感心している間にモンスターたちが僕の目の前まで迫るが僕はある事に気付く。モンスターの動きが．．．一度も武術も喧嘩もした事もない僕でも簡単に見切れるほ

ど遅い？

余裕のない僕はソードモードでモンスターを切り裂いていきどんどんと消滅していった。

さっきの戦闘から数分後、僕はバーチャフォレスト奥の地下洞窟にいた。

さっきのモンスターだけで3分もしないうちに倒してしまった、多分武器が強すぎるだけだと思う。

それにさっきの戦闘で分かったけどモンスターの動きは遅くなっていない、多分ウルトラマンその者になった僕の動体視力なり感覚が常人よりも遥かに強化されたんだと思う。というかそれしか説明が出来ない。

未だに人間の感覚の僕からしたらなんだか自分の身体じゃなくなったようでもちよつと気持ち悪いがすぐに慣れるだろうと深刻には考えていなかった。

「それにしてもいいなあゝゝゝ。もしかしても誰かが倒したのかな？」

何故僕が地下洞窟にいるかっていうと最後のクエストである「地下洞窟に潜むエンシエントドラゴンの討伐」を達成する為だけ……確かバーチャフォレストはLvl1らへんで攻略する一番最初のダンジョンなのにもうドラゴンタイプのもンスターっていったっけ?……もしかしてRe;Birth2のモンスターの配置なのか?

「ア……イチャ……逃げ……です!!」

「い……わよー、コン……だけ……なさい!!」

すると僕は洞窟の奥から聞こえる微かな声を捉えた!、間違いなくピンチと分かる状況に僕は声のする方向に走っていく!

およそ4kmぐらいか……間に合ってくれ!つてなんで距離が分かるんだって無粋なツツコミは今はないだ!

僕は1分弱で洞窟奥の広い空洞の中に出る……もう脚力については何も言わない。するとそこにはエンシエントドラゴンじゃない!?、エレメントドラゴンに互いに底いながら追い詰められるアイエフとコンパの姿があった。どうやら2人も僕と同じくエンシエントドラゴンの討伐クエストを請けていたみたいだ。

今まさに火球を放とうとドラゴンは溜めてアイエフとコンパは諦めたように互いに寄り添う!

僕は一心不乱に走る!

「間に合つてくれー!!」

僕はそう叫ぶと身体が光り出しまるで高速移動しているようで一瞬で2人の目の前に到着し僕は2人を庇う。

ドラゴンは何回か火球を放ちものすごい爆破音がしたけど・・・僕たちは丸焦げにはなっていない?

僕は不思議そうに辺りを見ると僕たちの目の前には水面に生まれる波紋のような青色に輝く円形状のシールド「サークルシールド」が僕たちを守ってくれていた。

「あ・・・あなたは!？」

「コウヤ・・・さん!？」

2人はいきなりの僕の登場に驚いていたけど僕は2人も庇うように立ちブラストショットガンモードをドラゴンに向ける。

「早く逃げてください!、こいつは僕1人で戦います!」

「そんな無茶よ!、こいつは普通はここにいるのがおかしいぐらいの危険種なのよ!!、あなた1人で戦えるワケが!？」

「そうです!!、一緒に逃げるです!!」

2人の申し出は嬉しいが僕も一緒に逃げたらこいつは必ず追いかけて来る、それだけは避けないと!

「ありがとうございます、でも大丈夫です、ここは僕に任せてください」

僕は2人にそう言い領くと2人は見合い・・・そして。

「分かりましたです、でも私たちが逃げたらコウヤさんもすぐに逃げるです!」

「はい、僕はかなり臆病者ですから」

僕はそう言うのと2人は出口に向かって走りドラゴンはそのを狙い撃ちしようとする
が僕はポンプアクションをし信号弾ではなく攻撃用の光弾を発射し火球と相殺させド
ラゴンの目の前にそびえ立つ。

アイエフは不安げな表情で振り返りすぐに戻りコンパと共に逃げた。

確かに僕は頼りないし臆病者だけど・・・今度は逃げるわけにはいかない!

「よしっ!、いくぞ!!、うおおおおお!!」

僕は雄たけびを挙げながらドラゴンに向かいドラゴンはその腕を振り上げ僕をその
爪で切り裂こうと振り下ろす!

だが僕はその動きを見切り振り下ろした直後、跳躍して回避し優に10mはあるドラ
ゴンよりも高くジャンプしていた。

僕は咄嗟にソードモードに切り替えバク宙を決めて遠心力を加え。

「アエヤアアアア!!」

僕はドラゴンを一刀両断にしドラゴンも大きく仰け反る!

だがまだ倒しきれずドラゴンは一矢報いようと火球を放とうとする。

「ごめん……」

僕は火球を放つ前にエアーストモードに切り替え波動弾を放つ！

「ギャオオオオオオ!!」

波動弾はドラゴンに命中し虫の息だったドラゴンは断末魔を挙げながら消滅した。

僕はこの上ない嫌な感覚にプラスチックショットを握り締めるが洞窟の出口に向かって歩いていく。

だが僕の身体はまるで何てクラスの鋼がのしかかったように重くなりそのまま倒れてしまう！

恐らくこれまでの戦闘による疲労と生身でウルトラマンの技を使ったのもあると思う。

サークルシールドもそうだけど僕は咄嗟に使った高速移動「マツハムーブ」もウルトラマンに変身しないと使えない技だからね。でもサークルシールドは原作でも人間の時に使っていたっけ？

僕はそんな事を考えているとどんどんと意識も遠のいていきそのまま洞窟の中で倒れてしまった。

アイエフとコンパは無事に逃げてくれたと願いながら……。

Episode. 2 襲来—スペースビースト—

「うーん．．．いけない！、早く報告に．．．あれ？」

確か僕はエレメントドラゴンと戦ってそのまま洞窟の中で倒れたはずだけど、また見知らぬベットで寝ていた。

すると僕が寝ていた部屋に1人の訪問者が現れる。

「気が付いたですか？、良かったです〜！」

コンパが自分の事のように嬉しそうに言い僕も何処となく嬉しくなった、どうやら無事に逃げてくれていたみたい。

「ここはプラネテューヌの教会です、コウヤさんの家が分からなかったからここに連れてきました」

そうかプラネテューヌの教会なのか．．．という事は？

「コンパさんが俺を連れて来てくれたんですか？」

「違います、最初にコウヤさんを見つけて教会で休ませようと言ったのはアイちゃんです」

まさかアイエフが？、なんとなく嫌われているような気がしたからないと思ったけ

ど。

「アイちゃんはイストワールさんの所にいます、私もコウヤさんが起きたら連れてくるように言われていたです、もう起き上がれますか?」

「はい、もう大丈夫です」

本当はまだちよつと身体が重いけど少し動くぐらいは逆に良いかもしれない、そう思った僕はコンパに連れられイストワールとアイエフが待つ部屋に向かう。

確かイストワールはプラネテューヌの教祖でアイエフの上司だったつけ?、それに本に乗れるほど小さいって設定だったね。

僕はコンパに連れられアイエフとイストワールが待つ部屋の前まで到着する、なんかすごく緊張するなあ・・・

コンパが先に入り僕も後を付いて入るとアイエフと宙に浮く僕が持っている詳細本と良い勝負の分厚い本に乗っているプラネテューヌの教祖イストワールが話していた。

「アイちゃん、イストワールさん、コウヤさんを連れてきました」

「つ!?、コウヤ!?!、もう起きて大丈夫なの!?!」

「はい、お陰様でもう全然大丈夫です」

なんかアイエフはすごい嬉しそうにしているちよつと僕は困惑していた、アイエフは僕を嫌っていたわけじゃなかったのか?

「あなたがコウヤさんですね？、私はこのプラネテューヌの教祖イストワールです」

「あつすいません、どうやら休ませてもらって」

「いえ気にしないでください、コンパさんもアイエフさんもネプテューヌさんとネプギアさんの友達ですからね、断る道理はありません」

そう言うといストワールは僕のつま先から頭のとつぺんまで見ていく、僕もイストワールを見て本当に頭に乗りそうなくらい小さいと思う。

「・・・アイエフさんやコンパさんが言っていたように本当にネプテューヌさんたちと近いものを感じます、それに何処か・・・いえなんでもありません」

イストワールはアイエフやコンパと同じような事を言つて更に何か意味深な事まで言う、そんな事を言うと余計に気になるがアイエフが僕に歩み寄る。

「あ・・・あの時はありがとう・・・」

「いえ、困った時はお互い様です」

僕はそう言うといストワールは嬉しそうに微笑みかけてくれてアイエフは何故か僕から背けていた何処か顔を赤くしていたような気がしたけど・・・あつしまった!?

「クエストの報告をしないと!？」

すつかりギルドに報告を忘れ僕は慌てて行こうとするが。

「待つて!、もうコウヤの請けたクエストの報告は私たちでやっておいたわ!、これクエ

ストの報酬よ！」

アイエフが僕を呼び止めてある袋を渡す、その中にはクエストの報酬であるゲームギョウ界のお金（クレジット）が入っていた。

「ありがとうございます……」

「これで助けられたのはチャラにしてもらうからね」

「ええ勿論です、本当にありがとうございます！」

「本当にアイちゃんは素直じゃないです♪」

「うっうるさい!!」

コンパに茶化されてムキになるアイエフに僕は不意に笑みが零れる。

『ドツクン……』

すると懐に納めていたエボルトラスターが反応したように鼓動音が聞こえ僕は咄嗟に胸を抑える。

「どうしたんですか？」

「あ……いえ」

イストワールに尋ねられて僕は平静を装う、どうやら鼓動音は僕にしか聞こえず特に何か出そうな反応ではなくとても心が暖かくなるような反応だった。

「コウヤさん、あなたに1つ聞きたいことがあります、良いですか？」

「はい・・・何ですか?」

僕は真剣な表情で尋ねるイストワールに息を呑んでしまう。

「あなたはウル・・・」

『ドクン!ドクン!!』

イストワールが言おうとした時、またエボルトラスターが反応し鼓動音が聞こえるが今度はとてつもなく嫌な反応だった!

「イストワール様、緊急事態です!」

「つ!!、何かあったんですか!」

突如としてプラネテューヌ教会の職員が慌てて入ってくる、僕はその慌てぶりにとてつもなく嫌な予感しかなかった。

「突然プラネテューヌ上空に黒い雲が!、とにかく来てください!!」

職員に促されて僕たちは教会の外に出て行く、黒い雲つてまさか!?

僕たちは教会の外に出るともうすっかり夜を迎えているはずなのにはつきりと分かる程の禍々しい黒い雲が紫色の雷を纏ってどんどん肥大化していく。

やはりあれは原作のネクサスで何度も登場した!?

「コ……コウヤさん、そんなに恐い顔をしてどうしたんですか?」

「いや……なんでも……」

コンパはすごいオドオドして僕に尋ねる、余程恐い顔をしていたんだろう僕は答えようとする。

しかし黒い雲の中央から謎の光が放たれる!

そして光が収束していくと遂に「災厄を招く真の怪物」がゲームギョウ界に襲来してしまおう!

「あいつは……ガルベロス!!」

フィンディッシュタイプピーストガルベロス……こいつは原作のネクサスに登場し何度もネクサスやナイトレイダーと激戦を繰り広げたスペーススピーストと呼ばれる

Xかいじゅう!!(Xが怪じやないのはビーストが共通して特殊な振動波を出す為で確かネクサスも良く似た振動波を出すらしい)

「コウヤさん、まさかあの怪物の事を知っているんですか!？」

「あいつは僕がてんs・・・!？」

イストワールやみんなに危うく正体をバラしそうなり慌てて口を紡ぐ。

「・・・防衛隊を出動させてください!、アイエフさんお願いします!」

「任せてください!」

イストワールは僕を怪しむ事もなく察してくれたように職員やアイエフに指示を出してアイエフは走り去っていく。

「住民の皆さんにも避難勧告を!、コンパさんもコウヤさんも早くシエルターに!!・・・コウヤさん!？」

イストワールは僕やコンパに逃げるよう促すが僕は逃げるわけにはいかない!!

僕はいつと戦う為にウルトラマンの力を授かったんだから!!、そう思っていたら僕は思わず市街地の中央に向かうガルベロスに向かって走っていた!

「住民の皆さん!、すぐにお近くのシェルターに避難してください!!、繰り返します!・・・!」

街に警報が鳴り響きガルベロスが火球を吐きながら街を蹂躪していた。

僕は必死に逃げる人込みを逆走し人がいなくなった所で止まる。

建物はガルベロスの吐く火球でポロポロになり倒壊している物まであった、そして逃げる人の悲鳴も飛び交いまるでプラネテューヌは地獄に変わりつつあった。

これ以上の横暴を許すわけにはいかない!、僕は懐からエボルトラスターを取り出し右手に鞆を持ち右肩に構えネクサスに変身しようと引き抜こうとする。

だが引き抜く事が出来ず何度も試すが一向に引き抜けない!

「どうして・・・変身できないんだ!」

僕は混乱してしまい如何したら良いのか分からなくなってしまう。

「大丈夫ですか!、お母さんやお父さんとはぐれちゃったですか?」

すると僕は聞き覚えのある声に振り向くとコンパが逃げ遅れた子供を介抱していた。しかしガルベロスはコンパたちに気付き火球を放とうとする!

「つ!!、コンパ逃げろおー!!」

僕は必死にコンパたちに駆け寄り火球よりも早く到着するとエボルトラスターを突き出しサークルシールドを作り出し火球を防いだ！

「コツコウヤさん!？」

「コンパその子連れて早く逃げろ!!」

「でっでもコウヤさんは!？」

「良いから早く逃げてくれ!!・・・僕もすぐに後を追いかけるから」

僕は荒い口調で言ってしまうコンパは戸惑っていたが子供を連れて逃げていく。

するとまた僕の身体が一段と重くなり膝を着いてしまい僕は変身できない理由が分かった、僕の体力が底を尽きかけているせいだ。

ネクサスは体力制でありまだウルトラマンになったばかりの僕の体力は一般人と変わらないぐらいなのに今日一日だけでマツハムーブやサークルシールドを使ってしまう一時は寝ていたとは限界に近かった。

ガルベロスはもう一度火球を吐こうとし僕に狙いを定める、はっきり言ってもう僕にはまたサークルシールドを張る体力も残っていない。

万事休すか!?!と思った時!

「ガオオオオオオ!?!」

ガルベロスの背中にミサイルを命中し悲鳴を上げる。

僕は上空を見ると何機かの戦闘機が飛び交いガルベロスを攻撃していた。恐らくイストワールが言っていたプラネテニューナの防衛隊の人たちだろう。

「全機、回避行動を優先しつつターゲットを牽制、住民をシエルターに逃がす時間を稼ぐのよ！」

「「「了解！」」」」

僕は飛び交う戦闘機を見ていくとその一機に搭乗しているアイエフを視界に捉えた、戦闘機は回避を優先しながら着実にミサイルを命中させる。

それに怒ったガルベロスは戦闘機に向かって火球を吐く、戦闘機は紙一重で火球を避けるが……

実はガルベロスの吐く火球にはホーミング機能が備わっていて避けたはずの戦闘機に再び迫り今度は直撃してしまう！

「早く脱出して!!」

「りよ……了解」

アイエフの指示で墜落寸前の戦闘機のパイロットは緊急脱出装置で脱出する、僕はホツと胸を撫で下ろすがその間にも次々と戦闘機が墜落していき残るはアイエフの乗る戦闘機だけだった。

「こいつがこれ以上進んだら教会が！」

アイエフは決死の覚悟でミサイルを発射するがガルベロスの吐く火球に阻まれてしまいきらにもう一つ降り注ぎアイエフはなんとか避けようとするがカスってしまう。

「機体の制御が!？」

戦闘機の制御が効かなくなりどんどん下降していき僕は必死でアイエフの乗る戦闘機に向かって走る。

「頼む!、僕を変身させてくれ!!」

『ドクン!』

「確かに今の僕は体力もなければ戦う覚悟なんていう大層な物もまだ持ち合わせていない!それでも!!」

『ドクン!ドクン!!』

「たった1日でもこのゲームギョウ界で会った人たちを!!、友達になれるかもしれない大切な人の思いを!絆を!守りたいんだー!!」

『ドクン!ドクン!!ドクン!!』

僕はそう叫びながら何度もエボルトラスターを引き抜こうとし何度も鼓動音が聞こえると・・・遂に!!

光を放ちながらエボルトラスターを引き抜き僕は眩い光に包まれた!

アイエフ side

全く機体の制御が出来ない！、このままじゃ間違はなく10秒も経たずに墜落する！
何とか立て直そうと操縦桿を動かすけど全く言う事を聞かない！

もう目の前にビルが見えて私はもう諦めてしまい目を瞑る。

コンパにイストワール様も無事に逃げてくれたかしら？、それに・・・コウヤも。

最初はコウヤに酷い事をしたけどそれでも私たちを助けてくれたりどうでもいい事なのにお礼も言ってくれて結構嬉しかった。

なんだかコウヤがネプテューヌたちを救ってくれるとそんな感じがして・・・後は頼んだよコンパ・イストワール様・・・コウヤ・・・

「諦めるな!!」

えっ誰かの声？、それに何処かで聞いた覚えがあるような？

すると急に機体の落下が停まり私は目を開けると辺りが暖かい光に包まれていた。

私は見上げるとどんどんと光が収まっていき私の機体を捕まえた正体を目の当たり

にする。

さっきの怪物と同じぐらいに巨大で銀色に輝き胸にはYに似た形をしたゲージが特徴な巨人だった。

銀色の巨人はそつと私の機体を地上に降ろすとゆっくりと頷く。

私はその頷きにこれまでにない安心感に包まれていた。

Episode. 3 巨人―ウルトラマン―

僕は体力を使い切りそうだったにも関わらずウルトラマンネクサスに変身しなんとかアイエフを助ける事が出来た。

「アイちゃんー!!、大丈夫ですか!？」

「ええ……」

戦闘機を降りるアイエフにコンパが駆け寄りアイエフの無事な姿に涙ながらに喜んで、コンパも中々の無鉄砲というか何というか……

「この巨人さんは一体誰ですか？」

「分からない……でも私を助けてくれた……」

やっぱり気になるよね僕の事……ここで名乗るわけにいかないって考えていた時、背後から危険を察知し僕は思いつきり右手で薙ぎ払う。

するとガルベロスの吐いた火球を弾き返す事に成功し僕はファイティングポーズを取るが今の自分の姿をまじまじと見てしまう。

銀と黒の組み合わせをした身体に両腕にネクサスの特徴であるエルボーカッター「アームドネクサス」そして一番特徴的な胸のY字状のコア「エナジーコア」、本当に僕

はウルトラマンネクサスに変身していた。

するとガルベロスはそんな僕をお構いなしに突進し気を取られていた僕はその突進をまともに受けてしまう！

「ウワアアア!!」

僕は吹き飛ばされしましても空中で態勢を立て直しおぼつかない足取りだけどなんとか着地する。

自分に見とれている場合じゃない！、今は僕がウルトラマンでガルベロスを倒さなきゃいけないんだ！

僕は全力疾走しガルベロスも何回も火球を吐き続ける。

僕はまた弾き返そうとするがそこで街の建物を見る。

まだ建物内に逃げ遅れた人が取り残されておりもし僕は火球を弾いた際に建物に直撃したら・・・

そう考えた僕は両手をクロスして火球を受け止めながら走り火球が一瞬取まった所でジャンプしガルベロスの真ん中の頭に目掛けてパンチを浴びせ着地した同時に回し蹴りを叩き込む！

「ガオオオオ!!」

ガルベロスは悲鳴を挙げながら大きく後退し僕を睨む、僕ももう一度構えを取るが

さっきの火球を受け止めすぎたのか両手が火傷をしたように熱い。

「なんであの巨人さんは火球を弾かったのですか？、弾いた方が自分のダメージが少な
いはずですよ」

「まさか・・・街の被害を抑える為にワザと・・・」

それはそうだよアイエフ・コンパ、僕はこいつを倒す事以上にプラネテューヌを守る
為に戦っているんだから！

僕は再びガルベロスに駆け寄り3つの頭に噛みつかれないように気を付けて組み付
きガルベロスのパワーに負けそうになるが何とかガルベロスのプラネテューヌの玄関
口まで投げ飛ばし僕もそれを追ってジャンプする。

僕はガルベロスの目の前で着地しガルベロスが立ち上がっている隙に僕は右手を顔
の近くまで上げて左手を右手に持つてきてアームドネクサスをくつつける。

すると左手のアームドネクサスが光ると僕は左手を大きく身体の左側に持つてきて
一回引くと左手を空に向かって突き出し光線「フェイズソフトウェーブ」が発射される。
すると光線が花火のように散りまるで黄金のシャワーのように広がり僕とガルベロス
の周りを包んでいく。

「キレイ・・・です・・・」

「確かに・・・神秘的とも言えるわね・・・」

そして黄金のシャワーは一層輝きを増しアイエフとコンパを包み込んだ！

イストワールside

この巨人は・・・やはり来てくれたんですね。

避難した人たちは最初は「ゲームギョウ界の終わりだ・・・」「きつと女神様がやっつけてくれるさ！」と恐怖や不安の声が挙がっていた。

守護女神は・・・ネプテューヌさんもネプギアさんも犯罪組織に捕まってしまっている事を知っている数少ない私ですが何故か不安も恐怖もなかった。

何故ならもう私たちの傍にこの怪物から私たちを救ってくれる「希望」がいたのです。

その「希望」を咄嗟に住民の皆さんにお見せすると「この巨人は・・・俺たちの味方なのか!?」「きつとそうよ!」「もしかしたら女神様の新しい姿かも!?」「でも銀色だよ?」
とたちまち恐怖も不安も消し去ってしまい人々に活力が戻ってきました。

「ゲイムギョウ界に災厄が訪れる時、希望の光となってこの世界を守る者たちと共に戦う勇者あり、その名は・・・」

「ウルトラマンネクサス、そしてそれに変身する者はあなたなんですわ・・・」

「緋剣・・・光矢さん」

アイエフ・コンパside

「アイちゃん・・・ここって?」

「私にも分からない・・・でも」

私たちはプラネテユージュから謎の異空間とも言える場所にいたけど不思議と不安はなかった。

「なんだかどうとも気持ちが良いです♪」

「ええ・・・なんだかコウヤの手の温もりと同じなような気がする」

「えっ?、コウヤさんがどうかしたんですか?」

「あっ!?!いや別に!?!」

なんでコウヤの名前が出たんだろう?、言っておくけど別に私はコウヤが好きとかそんなんじゃないんだから!?!・・・もうこれじゃあ何処かのツンデレ女神様じゃない!!

「ガオオオオオ!」

「ハッ!、デエヤア!!」

するとさっきの怪獣と巨人の声が聞こえ少し歩いていくと・・・

私たちから少し離れた所で巨人と怪物が戦っていた!

ネクサス side

僕はメタフィールドにガルベロスを引き込む事に成功し、パンチやキックを浴びせ途中ガルベロスの尻尾を鞭のように食らいながらもなんとか僕の優勢で進めていく。

このメタフィールドでは簡単に言うところのビーストの力が削がれネクサスの力が上がるだけじゃなく街や人の被害を避けて戦う事が出来る異空間だ！

だけどメタフィールドを展開すると僕に身体には2倍の負荷が掛かる、早い話が2倍の速度で僕の体力が削られていく、だからこそ早くガルベロスに倒す必要がある。

だが相手はビーストの中でも格上の存在、そう簡単に必殺技を撃たせてくれるチャンスを見せてはくれない。

すると僕は妙な視線に気付き振り向くとそこにはアイエフとコンパがいた！

確かメタフィールドには普通の人間は入ってこれないのに何故取り込まれているんだ?!、僕は2人が巻き込まれないように玄関口で展開したはずなのに!?

隙と見たガルベロスは僕に突進し両腕の鋭い爪で切り裂こうとする。

僕はなんとか弾くが噛みつきこうとするガルベロスを僕は受け止め腹部を疎かにしてしまふ。

その間にガルベロスの鋭い爪の連撃を腹部に血のような火花を散らす！

「グワアアア!?!、ハアアア・・・デイヤアアア!!」

僕は激しい痛みとダメージに態勢を崩しそうになるが膝蹴りを浴びせガルベロスを投げつける。

僕は倒れたガルベロスを追撃しようとするが腹部の痛みと押し掛かっているような異様な身体の重さに僕は膝を着いてしまふ。

「グルウウウ・・・」

するとガルベロスは獲物を見つけたように僕ではなくアイエフとコンパを見つめ・・・2人に向かって火球を吐く！

「ハッ!・セイヤアアア!!」

僕は何回か側転し2人の前に立つとサークルシールドを張るが一瞬で消滅する。

(しまった!!、もう体力が!?)

本当はもう変身できる体力も残っていない上で変身しているにも関わらずに技が使えるはずがなく、というよりメタフィールドを張れたこと自体奇跡に近かったのかも知れない。

「ウワアアアア!!」

僕は火球を何度も受けてしまい身体を大きく吹き飛ばされてしまい思いつきり地面に叩き付けられる!

「巨人さん!?!」

『ピコンピコンピコン...』

コンパが心配そうに叫ぶのと同時に遂にエナジーコアが点滅し僕にもう残り体力が尽きる事を教える。

「まさかもうボロボロの状態で私たちを守ったの!?!、なんて無茶な!?!」

そんな無茶をやるのがウルトラマンなんだよアイエフ、僕はボロボロの身体を何とか起き上がらせようとする。

「巨人さん...ファイトです!!」

(お願い...立ち上がって!)

2人の声援と期待に僕は身体から力が湧きそれを表すかのようにエナジーコアが点

滅ではなく軽く2回輝く。

ガルベロスはトドメと言わんばかりに口に炎を溜めて火球を吐こうとするが僕は咄嗟に左手の手の平を右手のアームドネクサスに添えて左手をガルベロスに向かつて突き出すと光刃「パーティクルフェザー」を放つ！

パーティクルフェザーはガルベロスの左頭の目に命中しガルベロスは悶え苦しむ！
「ハアアアアアア・・・デエヤアアアアアア!!」

僕はこの機を逃すわけにはいかない！、僕は撃てるかどうか分からないけど抜刀のようなポーズを取り両手にエネルギーを溜めると十字に組み必殺光線「クロスレイ・シユトローム」をガルベロスを腹部に浴びせる！

「ガオオオオオオ!!」

僕は30秒ぐらいか浴びせ続けるとガルベロスは断末魔と共に勢いよく倒れ爆発しガルベロスを撃破した！

「やったですく!!」

「ええ!!やったわ!!」

2人はガルベロスの撃破に手を取り合って喜び僕も安堵の笑みを浮かべる。

「巨人さん、ありがとうございますございました!!」

「ありがとうございます・・・銀色の巨人」

2人は深々と頭を下げてくれるがお礼を言いたいののはこっちの方だ。

2人の声援が僕に力をくれたから光線を撃つことが出来た、理屈じやなく僕はそう確信していた。

僕は片腕だけのガッツポーズを決めると2人も同じポーズを取ってくれた。

僕はとてつもなく嬉しかったがいつまでもメタフィールドを展開するわけにはいかない、僕は両腕の突き出しクロスさせてメタフィールドを解除する。

すると元いたプラネテューヌに戻るがガルベロスが残した被害は甚大だった。

「これから忙しくなりそうね・・・」

「巨人さんのように頑張るです！」

そう言う2人だが瓦礫に埋もれている人や怪我をしている人はたくさんいる、僕は少しでも助けになれるように上空に飛びプラネテューヌ全体が見える高度で浮遊する。

僕は両腕をクロスさせアームドネクサスが光ると手の平をプラネテューヌにかざし光を照射していく。

「一体何を？」

「っ?!、建物を見るです!!」

「うそっ?!」

僕は元々はウルトラマンコスモスの技「ミラクル・リアライズ」改め「ネクサス・リ

アライズ」という壊れた物質を元に戻す光線で壊れた建物を直してしていく。

「巨人さん……」

「なんでそこまで……」

それはアイエフやコンパと同じだよ、1分も照射すると街は元通りとなりシエルターや建物から次々と人たちが出て来る。

僕はその様子を見ると変身を解除しネクサスとしての僕は薄れるように消えた。

アイエフ・コンパ side

「巨人さんのおかげで逃げ遅れた人や瓦礫に埋もれていた人も全員無事です！」

「そう……良かった……でもなんで銀色の巨人はそこまで……」

確かに銀色の巨人のゲージは点滅しもう本当に倒れそうな程辛そうだったのに街の復興まで・・・

巨人はネプ子やネプギアが変身したって言う人がいたけど、間違いなく2人でもなければ他の女神様でもない。

女神様とネプギアはマジック・ザ・ハードに敗れギョウカイ墓場に捕らえられている。それに女神様たちの力と銀色の巨人の力はかなり似ているけど何処か違う、あの異空間にいた時にそう確信できた。

「アイちゃん？、具合でも悪いんですか？」

「いえ・・・逆に良いぐらいよ」

あの異空間にいたおかげかあの怪物と戦った時に軽い擦り傷も出来たけど既に跡が分からないぐらいに完治していた。

「あっ!?!、コウヤさん!?!」

「えっ!?!」

「お・・・お2人とも・・・怪我がなくて良かった・・・です」

見るからにコウヤは半分死にかけようで頑張つて平静を装っているようだけど額から流れる尋常じゃない汗やおぼつかい足取りですぐに分かった!

するとコウヤは笑顔を見せるがそのまま倒れてしまう!

「コウヤさん!!」

「コウヤ!!・・・アチツ!？」

私たちはコウヤに駆け寄り肩を支えるが全身が灼けるように熱くコンパがコウヤの上着を脱がし服も脱がすと上半身だけでも火傷をしたように赤くなっていた。

「コウヤさん、私とはぐれていた男の子の為にあの時のドラゴンのように庇ってくれたです!、もしかしたらその時の火傷かもしれないです!!」

「そんな・・・コウヤ!!、しっかりとコウヤ!!、コウヤ!!」

「コウヤさん!!、しっかりとです!!、コウヤさん!!」

私たちは必死に自然と涙を流しながら呼び続けるもコウヤは全く起きてくれず、すると救急隊員が駆け付ける。

「重傷者ですか!、車に乗せますので離れてください!」

救急隊員がコウヤを救急車に乗せて私たちも乗り込みコンパは右手を私は左手を握り締める。

すると微かに私の手を握り返してくれて最初に握手した時の暖かさも感じる。

コンパも感じたのか私を見て今度は嬉し泣きをすると私も嬉し泣きをしていた。

Episode. 4 予言―プレデイクション―

「うん．．．ここは．．．病院か．．．っ!?!、痛てえ!!」

僕は目が覚めるとまだ見知らないベットで寝ていて辺りを見渡すと外から聞こえる騒々しさから病院だと気付く、すると身体に激痛に走る。

ガルベロスの戦闘の後なのだから無理もない、それにエナジーコアが鳴る程の体たらくぶりだ、ギリギリの体力で変身した事を言い訳にはしたくなかった。

「うん．．．っ!?!、コウヤ!?!、もう起きたの!?!」

「はい．．．ご迷惑をお掛けしました」

すると僕が寝ていたベットの傍らで寝ていたアイエフが起きた、ずっと看病してくれていたのか?

「怪我は大丈夫!?!、もう痛くない?」

「まだ．．．少しだけ痛みます」

やけに僕の事を心配してくれるアイエフに僕は少し戸惑ってしまう、まあアイエフも何だかんだ言って優しいって言うのは知っているけどなんかこう．．．背中がこしょばい。

「アイちゃん、コウヤさんは・・・コウヤさん!?、もう起きてたのですか!」

「ええ・・・ついさつきです」

「少し待っていてください!、すぐにご飯を持ってきます!」

「あつお構いなく・・・」

僕は遠慮するがお腹の虫が鳴りコンパは入ったと思ったらずぐに僕の病室から出て行く。

「コンパの料理は美味しいからコウヤもすぐに元気になるわよ!」

「はっ・・・はあ・・・」

なんだか凄く上機嫌で言うアイエフに僕は曖昧な返事しか出来なかつた、するとコンパが言葉通りすぐにコップや食器を乗せたお盆を持って入ってきた。

「いきなり重いものはダメだと思ったのでお粥にしました!」

僕の目の前のテーブルに置かれ戸惑いながらもスプーンを取ろうとするが激痛が走ってしまう。

「その身体じゃ無理です、私が・・・」

「ほらっ、私が食べさせてあげるから口を開けて」

するとアイエフがスプーンを取り僕に食べさせようとしてくれる。

「あついや!?!、僕は・・・」

「もしかして猫舌？、フウ〜フウ〜・・・」

なんとアイエフがお粥を冷ましてくれて僕は驚きのあまり口を開けてしまいアイエフはその隙に僕の口にスプーンを入れる。

「ゴクツ・・・本当だ美味しい」

「でしよう♪、私も小さい頃に風邪を引いた時もコンパに食べさせてもらったからね」

そう言いアイエフに食べさせてもらい何故かコンパは微笑みながら見ていた。

「ズ」馳走様でした」

「お粗末様です♪、今日はこれで帰るですが何かあったら連絡してください、すぐに駆け付けるです！」

「でも僕は連絡手段が・・・」

僕はゲームギョウ界に転生したばかりで通信手段がなかった。まあ転生する前もスマホが扱い切れなくてずっと携帯電話だったけど・・・あれ？確かアイエフって携帯電話をたくさん持っていたような？

「これ持っておいて・・・」

「えっ？、でも・・・」

「私は何個も持っているから良いの、コンパと私の連絡先は登録しているから絶対に無くさないでね」

「はい・・・ありがとうございます」

アイエフはなんと紫の携帯電話をくれて僕がお礼を言うとそっぽを向く、コンパはアイエフの顔を見るとクスツと笑っていた。

「じゃあコウヤさん、また明日です」

「またね・・・コウヤ・・・」

そう言つて2人は出て行くとまじまじとアイエフから貰つた携帯電話を見る。

アイエフつてもしかして・・・なんて予感も一瞬過つたけどそんな事あるわけがないよな、アイエフはコンパLOVEだし。

僕は携帯電話を枕元に置いて再び寝ようとするが着信が入る。

えっ?、いきなり!?!、僕は慌てて電話を取り通話ボタンを押す、前の世界と同じタイプで良かった。

「はい、もしもし?」

「コウヤさんですね、イストワールです」

なんで僕がこの携帯電話を持っている事を知っているんだと気になるがイストワールはお構いなしに続ける。

「「戦闘」での傷が癒えたら一度私の所に来てもらつて良いですか?」

「はい、構いませんよ」

「ありがとうございます、ゆつくりと休養を取ってください」

イストワールはそう言って電話を切る、僕は少し気になる事があった。

さつき「戦闘」って言ったような？、まるで僕がガルベロスと戦っていたように……
こっちはもしかしたら当たっているかもしれないね。

僕は少し不安に感じながらも横になり眠りに着いた。

アイエフ・コンパ side

良かった……コウヤあれだけの怪我を負っていたのに結構元気そうだった。

「きつとアイちゃんが徹夜で看病したからです♪」

「えっそうかな・・・ってなんで分かったの!？」

「乙女の勘です♪」

乙女の勘って・・・コンパはコウヤの事をどう思っているんだろう？

「ねえコンパ？、コンパはコウヤの事をどう思ってる?。」

「私はコウヤさんの事が大好きです♪」

「えっ!?!、好き!?!」

「勿論友達としてです」

「そっそうよね・・・」

コンパが変な事を言うから驚いたじゃない・・・でもこんなに取り乱してたのかしら？

「アイちゃんはどう思っているですか?」

「私?、私は・・・コウヤは間の抜けた所があるし無鉄砲で考えもなし人を助けようとするバカだけど・・・」

「ネプ子やネプギアみたいに優しくして良い奴だとは思うそれに・・・」

「あの銀色の巨人と同じように芯が強いわ・・・必ず」

「私も・・・そう思うです」

私はあの巨人を見て確かに感じた、力だけじゃない人を守りたいという思いと優しさが何処かコウヤと似ているって・・・

光矢 side

入院して1日で僕のダメージも完治し今はイストワールの所に向かっていた。

お医者さんは奇跡の回復って言うだけ大袈裟だね、だって僕が起きた時には殆ど治りかけていたのに、まあこれもウルトラマンになった所以なのかな？

「イストワールさん、光矢です」

「入って構いませんよ」

僕はイストワールの部屋に入ると突如クラッカーが鳴り響く。

「「コウヤ（さん）！、退院おめでとう!!」」

「はっ?」

僕は状況が理解できず間拔けな声を挙げる、テーブルにケーキや料理が並べていて完全パーティーな雰囲気だけ?」

「イストワールさん、これって?」

「ええ退院パーティーですよ?、さあ食べてください」

コンパに皿を渡され僕は言われた通り食べ進める、うん美味しい!!

食べ始めてから数十分後、イストワールは皿を置き僕たちを見る。

「皆さん、お聞きしたい事があります」

そう言うモニターにある映像を映し出す、それはウルトラマンネクサスである僕の姿だった。

「お近くで見て、そして異空間にも入った3人に聞きたいのですが・・・あの巨人をどう思っていますか?」

「コウヤさんもあそこにいたのですか!?!」

「ええ・・・」

嘘ではない、何故なら僕がメタフィールドを展開したんだから。

「私は少なくともあの巨人は私たちの味方だと思います」

「私も同じです！、私たちを怪物から庇ってくれたです！」

「・・・コウヤさんはどう思いますか？」

アイエフとコンパの意見にイストワールは頷くと僕にも話を振る。

「僕は・・・まだそう判断するのは早いと思います」

「それは何故ですか？」

「あのメタ・・・異空間では怪物の動きは鈍っているような気がしました、もしかしたら巨人は自分が有利な空間で戦ったただけかもしれません」

「じゃあ何故巨人は街の被害を抑えようとして街の修復までしたの？」

「それは・・・単なる気まぐれとか？」

はつきり言ってみんなが僕を味方と考えると到底思えない、僕が言ったような考えを持つている人が必ずいる、もしかしたらイストワールはそんな考えかもしれない。

「確かにそうかもしれませんが」

「イストワール様！」

「だからこそ、コウヤさんにもこれを見てもらいたいです」

するとイストワールは何やら壁画のような写真を見せていくと何枚かの壁画に僕た

ちは驚く。

「これって巨人さん!？」

「はい、非常に酷似しています、あの巨人と考えていいでしょう」

「そんな・・・!」

このゲームギョウ界には僕が現れるまでウルトラマンのウの字もなかったはずなのになんでそつくりな壁画が!、単なる偶然なのか？

「これは何処の？」

「ネクスト山脈に発見された遺跡の壁画です」

ネクスト山脈?、そんなダンジョンなんてあたっけ?、それにネクストって・・・

「その他にも碑文が残されていました」

「なんて言う内容ですか？」

コンパの問いにイストワールは碑文の映像を見せて答え始めるが一瞬僕を見たような気がした。

「ゲームギョウ界に災厄が訪れる時、希望の光となってこの世界を守る者たちと共に戦う勇者あり、その名は・・・ウルトラマン」

「へえくあの巨人ってウルトラマンって言うんだあ〜」

「でも少し物足りない気がするです」

コンパはアイエフがそう言っていたが僕は動揺してしまい目が泳いでいた。

「コウヤは何か良い名前は思い付かない？」

「えっ？、ウルトラマンの？」

「はいです」

僕は言おうかどうか迷う、イストワールの視線が気になるが名前ぐらいなら分らないよね。

「ウルトラマン・・・ネクサスでどう？」

「中々良い名前じゃない♪」

「私ものです♪」

アイエフとコンパには好評価だがイストワールだけは何故か納得したような表情をしていた。

「ではこれにてお開きにしましょう、コウヤさんだけは残ってもらって良いですか？」

「はい・・・」

アイエフとコンパは不思議そうにしながらも部屋を出て行くと僕は緊張してしまう。

「ウルトラマンネクサス・・・やはりあなただったんですね」

「えっ何を言っているんですか？」

「あの壁画に描かれていた巨人の名前もウルトラマンネクサスなんです」

「それは……偶然が重なっただけで」

「あの怪物の事をコウヤさんは知っていた、それにあの異空間の事について妙に詳しいと思っただけですか？」

もう言い逃れが出来なかった、イストワールは既に僕がウルトラマンネクサスだって気付いていたんだ。

「コウヤさんを責めたい訳ではありません、私は礼を言いたかったです、プラネテューヌをいえゲームギョウ界を守ってもらってありがとうございます」

「僕は……当然の事をしただけですよ」

ウルトラマンとして誰かを守る為に戦うのは当然、それにあの時アイエフとコンパをメタフィールド内に取り込んでしまつて危ない目に遭わせてしまつた僕は礼を言われる資格はない。

「あの異空間……メタフィールドと言うのでしょうか？、何故アイエフさんとコンパさんを取り込まないように十分な距離を開けてから展開したにも関わらず取り込まれてしまつたのでしょうか？」

「それは……分かりませんが、僕も直接2人も取り込むなんて聞いていなかったですから」
確か原作ではクロムチェスターが取り込まれた事があつたけど、あれは展開したエリアにいたからであり今回のケースのようにまるで「引き込む」事はなかったはず。

「そうですか・・・でも私はきつと2人を取り込んだのは悪い意味ではないと思います」
イストワールは笑顔でそう言ってくれるが僕はどうしてもそう思えなかった、わざわざ戦闘の真つ只中に2人を巻き込んだことには変わりない。

「・・・1つ私の頼みを聞いてもらっていいですか？」

「はい、何ですか？」

イストワールが意を決した表情をし僕も真剣な表情でイストワールを見る。

「恐らく知っているとありますが、プラネテューヌ他各国の守護女神たちが犯罪組織マジエコンヌに捕らえられ、今はどの国も組織の猛威を止める事が出来ない状態です」

「それに加えてあの怪物の登場です、私はあの怪物ももしかしたらマジエコンヌの尖兵と思っっています」

確かにその可能性はある、神様が言っていた「災厄」が知的生命体ならマジエコンヌと協力するのは間違いない。

「そこでコウヤさんにお願ひします、プラネテューヌだけでなくこのゲームギョウ界の為にあなたの力を貸してもらえないでしょうか？」

「勿論そのつもりです、その為に僕はここにいるんですから！」

神様とも約束したしな！、ここで断るなんて有り得ない！

「ありがとうございます！、ではここで1つ提案なのですが・・・」

犯罪組織マジエコンヌ side

「なにつつ？、ガルベロスがやられただと？」

「はい、そのようです」

「プラネテューヌの街はすっかり平穏を取り戻していたツチュ」

リンダとワレチュューの報告を聞き他の他の四天王は騒いでいたが、そうか・・・やはり「奴」が来たか。

「報告ご苦労、もう下がっていいぞ」

「はい」

「ツチユ」

「だが一体誰が倒したのだ？、プラネテニューヌには女神たちはいないはず」

リンダとワレチューが下がり四天王のブレイブ・ザ・ハードが我に尋ねる、もうあの話を忘れたのか？

「所詮今の女神たちでは例え健在でもガルベロスに叶いはしない、恐らく「奴」がようやく姿を現したみたいだ」

「奴つてもしかして幼女か?!」

「勿体ぶつてねえで答えろ!」

相変わらずせつかちな奴だ、気に食わないが教えてやろう。

「ゲームギョウ界に災厄が訪れる時、希望の光となってこの世界を守る者たちと共に戦う勇者あり、その名は・・・ウルトラマンネクサス」

「なにっ?!、本当にウルトラマンネクサスだというのか?!」

「今の現状で我ら以外にガルベロスを倒せるのは奴しかない、残っている女神候補生が束になった所で勝てるわけがない」

「なんだく幼女じゃないのか」

「あいつが出たって事は俺の出番だな!、さっさと行って血祭りにして!」

「待て！、まだ我らが出る時ではない、我らの真の力を発揮する時でもない、奴には充分に力を付けさせてやろう」

本当に戦いの事しか頭がない戦闘狂だ、少しはその頭で考えたらどうだ？

「一気に倒した方が楽じゃねえか？」

「奴には力を付けさせて本当の勇者に仕立てれば良い、そうして我がウルトラマンネクサスを倒せばもう誰も我らには逆らう事はしなくだろう」

「確かに・・・弱い敵を倒しても面白くもないからな」

「ツチー、だがその時になったら俺が1番先にあいつと戦うからな！」

「ああ・・・覚えておこう」

そう言つて他の四天王、ジャツジ・トリック・ブレイブは解散し、我も持ち場に戻る。ウルトラマンネクサス・・・お前も精々生贄になつてもらおう、犯罪神様復活の生贄にな・・・

第1章 紫の女神候補生とのコンタクト

Episode 5 救出—レスキュー—

—ゲームギョウ界に災厄が訪れる時、希望の光となつてこの世界を守る者たちと共に戦う勇者あり—

—その名は・・・ウルトラマンネクサス—

—ウルトラマンネクサスは希望の光であつて「神」ではない—

—真に災厄に立ち向かうべき者はその世界に生きる者たちであり決して「希望の光」を頼つてはいけない—

—希望の光が光り輝くのは災厄に立ち向かい「決して諦めない心と光を信じる絆」を持つ者のみ—

—光とこの世界の者たちが深い絆で繋がりにし時、災厄は滅び光は永遠に輝き続ける—

これが僕の事を表した碑文の内容、はつきり言って肥大化しすぎて笑いすら起きなかった。

僕は現在ネクスト山脈の中腹で見つかった遺跡にいた、僕がどんな表情で壁画や碑文を見ているか・・・恐らく容易に想像できると思う。

こんな碌でもない事をする人なんてあの人・・・いや神様しかないけど。

「失礼だな、少しでも事が上手く運べるようにお膳立てをしてあげたのに」

「僕はここまでの事をして欲しいと頼んでいない！、あなたは僕を本当に勇者か何かに祭り上げるつもりか!？」

すると僕の背後に急に神様が現れる、実は詳細本に挟まれていたメモにこの時間とこの場所に会う事になっていた。

「ウルトラマンはヒーローって君の前の世界では呼んでいたはず、この世界でも遠くない未来そう呼ばれるのは間違いない」

「俺はウルトラマンネクサスであつてヒーローなんかじゃない！、僕はそんな名誉が欲しくて戦っているんじゃない!!」

「そう、だからこそ君にウルトラマンネクサスにしたんだ」

神様がニンマリと笑顔で言うが僕には意味が理解が出来なかつた。

「君よりも遥かに素質のある候補者は沢山いた、だがどれも力を手に入れば驕り高ぶり傲慢になる自己中な奴らばかり」

「だが君は相手を思いやり敵にすら情けを掛ける程に甘くそして・・・真に絆の大切さを知っている」

「平行世界を管理する神としてはただ強いだけの存在はこのゲームギョウ界には必要ない、君のような心を持った者に光を手にして欲しがつた、知識は二の次で良かった」

僕は少し混乱していたが神様が気まぐれでなくちゃんとした理由があつて僕を選んでくれていたみたいだ。

「どうやらこの世界の友がお迎えに来たみたいだね、私は帰るとする」

神様がそう言った直後、上空にクロムチェスターδが見えると遺跡に着陸しようとする。

「一つ君に謝る事がある、君はもう・・・人間ではない」

「僕は最初から覚悟は出来ていた、これからはウルトラマンとしてこの世界の友たちと

戦っていく」

僕がそう言うのと神様は微笑みながら消えた。

「コウヤく迎えに来たわよ」

「ああ、ありがとうアイエフ」

僕を迎えに来たアイエフに僕は手を振って答えアイエフが乗ってきたクロムチエスターδに乗り込む。

「でもコウヤってなんでこんな変な戦闘機を持っているの？、確か知り合いに作ってもらったって言っているけど」

「ああ・・・有事の際に必要になると思っている・・・」

流石に神様から貰った能力とは言えずにいたが何故かアイエフはクロムチエスターδを操縦する事が出来た、元はストーンフリユージェルで僕以外は乗れないはずなのにいつの間にかプラネテューヌの格納庫に停まっていたクロムチエスターδに変化したストーンフリユージェルに乗ることが出来ていた。

「ピーストと・・・ウルトラマンネクサスを倒す為に？」

「ああ・・・僕はネクサスも敵だと考えて動くべきだと考えている」

アイエフは悲しそうに言うのと僕ははつきりそう答えた。

最初に僕がウルトラマンネクサスに変身して3年が経ち僕もレベル上げをしながら

アイエフと共に諜報部員を勤めゲームギョウ界の暮らしにも慣れた。

アイエフやコンパとも友達になり休日是一緒に遊んだりもした、だがネクサスを巡つての意見は僕はアイエフとコンパと意見が分かれていた。

僕がネクサスに変身して以来、また2つの派閥が出来てしまった。

ネクサス推奨派・・ウルトラマンネクサスを認め守護女神と共にこの世界を守る全く新しい守護神として守護女神と同等な権利を与えるべきと主張する派閥。

ネクサス否定派・・ウルトラマンネクサスをビーストと同じく極めて有害な怪物として即刻処理するべきだと主張する派閥。

僕は否定派、アイエフやコンパは推奨派と呼ばれ3カ国では意見が真つ二つでマジエコンヌの影響もあつて8割以上が否定派だがプラネテューヌでは実際に僕が戦つた影響か全体の9割が推奨派どころかイストワールまで国内放送で推奨派である事を発表し一時期は他の国と揉めたり揉めなかつたり。

つまりプラネテューヌでは僕みたいな否定派が珍しかったりする、そして推奨派が増える事にマジエコンの普及率は反比例してプラネテューヌでは1割を切つたという報告があつた。

「・・・もうそろそろプラネテューヌよ、今回の作戦でネプ子たちを必ず助けないとね」
「ああ・・・必ず！」

僕とアイエフは頷くと発着場に到着しそこではコンパが待つていた。

「あれコンパ？、今日は仕事じゃなかった？」

「仕事なんてお休みです！、私も一緒にギョウカイ墓場に行くです！」

「今から私たちは一番の危険地帯に行くのよ！、そんな場所に行かせれる訳が・・・」

「分かった一緒に行こう、でも僕たちから離れないでね」

「はいです♪、やっぱりコウちゃんの話が分かる人です♪」

アイエフは止めようとするけど結局一緒に行くんだから止めても仕方ない。

「ネクサスの事以外ではね」

アイエフにムツとした表情で返され僕は一瞬振り向こうとするがイストワールの所に急ぐ。

2人の気持ちは嬉しいが僕は否定派の人がいる限りその姿勢を貫かなければいけない、僕は決してヒーローや守護神になりたいわけでもなければ自分を理解して欲しいが為に戦っているわけじゃない。

僕はこの世界で希望を信じて懸命に生きる人たちを守る為に戦っているんだから。

そして数分後、イストワールが待つ大部屋の前に到着しアイエフとコンパと見合って頷き合い僕が扉を開く。

「来てくれましたね、準備は良いですか？」

僕が代表して領くとイストワールは僕たちをギョウカイ墓場に転送する準備をする。「準備が整いました、皆さんお気を付けて・・・」

その言葉で僕たちはギョウカイ墓場に向かって転送された。

僕たちはギョウカイ墓場に転送され守護女神たちを探す為に歩き始める。

「ここがギョウカイ墓場か・・・」

「何が出そうな気がするです・・・」

「ゲームギョウ界で死んだ人が集まる場所だからね、何かがいても不思議じゃないけど」
「そう言いながら歩く僕たちだがコンパは余程怖いのか僕の上着の端っこを掴んでいた。」

「コンパ、大丈夫？」

「はっはいです・・・アイちゃんとコウちゃんがいるから大丈夫です」

「・・・私だって怖くないわけじゃないんだから」

アイエフもそう言っただけなら照れながら僕の上着の端っこを掴む、アイエフだって女の子だから怖いに決まっているよな。

「・・・けて」

『ドツクン・・・』

すると僕は何者かの声を捉えエボルトラスターも反応を示す、今回はビーストが出る時とは全く真逆の感覚・・・間違いない。

「女神様の声だ！」

「えっ？、何も聞こえなかったわよ？」

「私もです」

いや確かに聞こえた！、およそ東に2kmか！

時間を無駄にする訳にはいかない！、僕は2人の手を繋ぎ声が出た方向に走った。

「やっぱりいた・・・」

数分で到着するとそこには捕らえられているパープルハートやパープルシスターを始めとした守護女神たちがいた。

「コウヤは確か一度もネプ子たちと会った事ないのに良く分かったわね」

「ギョウカイ墓場で人の声が聞こえるって事は女神様しか有り得ないって思ってたね」

「流星はコウちゃんです！」

「コンパー、シエアクリスタルを！」

「はいです！バックの一番奥に締まったはずですよ」

シエアクリスタル・・・守護女神の力の源であるシエア（信仰心）が結晶化した物質、原作でも3年、でも僕の力を使えば半年でできるはずだったがイストワールに断れてしまった。

僕はイストワールとの提案で僕の力はいくまでピーストとの戦闘や本当の緊急時以外にしか使用せず極力人間状態でしか干渉しないと決められ僕はサポートに徹するようにと言われていた、その代わりにプラネテューヌ内での衣・食・住には困らないようにサポートしてくれ諜報部員として勤めているがレベル上げの為の長期休暇まで貰っ

た。

「そうは・・・させるかよおおお!!!」

すると突如として僕たちの目の前に漆黒の斧が振り下ろされ僕たちは慌てて避ける。

「こいつは—」

「こんな所に来るとは酔狂がいたとはな!!!・・・うん?、貴様は・・・」

僕たちよりも数倍はある黒い巨体に巨大な漆黒のハルバートを携えいくつものガイコツを飾るこいつはギョウカイ墓場の墓守にして犯罪組織マジエコンヌの四天王の一人ジャッジ・ザ・ハード!

「僕はこのコイツを食い止める・・・2人は女神たちを!!」

「そんな無茶な!?!」

「コウちゃん!!」

「その黒いの!!、僕と勝負しろ!」

僕は2人の制止を聞かずブラストショットガンモードを構えアタックモードにチェンジしジャッジに向かって放つ。

「こいつは驚いた!!、最高の獲物がノコノコと現れるとはなああああ!!」

かなりうるさいが僕は誘導に成功し2人から離れた位置に誘導に成功した。

「さあ見せてみる!、お前の力をおおおお!!」

「くっ！、本当に戦いの事しか頭にならないのか!」

こいつは話し合いで解決するような相手ではない！、僕はソードモードに切り替えハルバードの一撃を避けマツハムーブを使い一気に間合いを詰めてジャツジの装甲を切り裂く！

「うお?!、中々やるなあ・・・だがまだぬるい!!」

ジャツジは一瞬怯むがつかさず僕を掴もうとする、僕はジャツジの身体を壁蹴りのように一気に距離を開けて回避する。

「なら・・・ウルトラファイアボール!!」

僕はブラストショットを大きく体の左側に持つてくるとブラストショットの刀身が赤く輝き僕の周りに無数の隕石状の火炎弾が現れブラストショットをジャツジに向け火炎弾がジャツジに降り注ぐ元々はウルトラマンギンガの技「ギンガファイアボール」改め「ウルトラファイアボール」、僕が3年間のレベル上げで習得した1つの成果だ。

「ぐううう?!、ふっふはははは!!、やはりお前がウルトラマンネクサスか!!、なら纏え!!お前の光を!!」

こいつ気付いていたのか!、なら隠す必要はない、僕はエボルトラスタターを取り出し変身しようとする。

「コウヤ!?、コウヤ大丈夫!?!」

「っ!?!、アイエフ!?!」

「人間如きが邪魔をするなああああ!!!」

だがいきなりのアイエフの登場に僕は咄嗟にエボルトラスターを隠し怒り狂ったジャツジがアイエフ目掛けてハルバートを振り下ろす!

僕はまたもマツハムーブでアイエフの元まで移動し掴むとジャンプしてハルバードの一撃を避ける。

「コツコウヤ、ごめん・・・」

「もう大丈夫・・・でも」

アイエフの前じや変身出来ない・・・一度変身して早く守護女神たちを助けないと! 「わっ私も戦います!」

「君は?」

一応知らないフリをしたが実は良く知っている、白いレオタード風なプロセツサクニツトに背中にも蝶のようなバックバックと片手にビームソード「M^{マルチプル}・P^{ビーム}・B^{ランチャー}・L」を携えた女神候補生。パープルシスターだった。

「あなたも早く逃げてください!、「普通の人間」が叶う相手ではありません!」

僕は普通の人間じゃないけどね

「死に損ないの女神があああ!!、くたばれええええ!!」

「一気に決めます!!、はああああ!!」

怒り狂うジャッジはパープルシスターに狙いを定めるもパープルシスターが一瞬早く間合いに入り渾身の必殺技「プラネティックディーバ」が炸裂する!

「これで・・・決まってください!!」

最後にM・P・B・Lから最大出力の極太ビームがジャッジに命中する!

「やった!?!」

「やったです!」

2人は見事にフラグを建築しこの展開は変わらないと確信する僕。

「なんだその程度かあ!?!、こいつの攻撃の方が遥かに効いていたぜえ!!」

「そっそんな・・・」

まるで効いていないジャッジの姿にパープルシスターは絶望の表情を浮かべていた。

「コンパー!、シエアクリスタルを!」

「はっはいです!!」

僕はコンパーからシエアクリスタルを受け取り力を込めてからジャッジに向けてから投げ付ける。

シエアクリスタルはジャッジとパープルシスターの間で光輝く。

「なっなんだこの光はあああ!!」

「よしっ!、今の内に君も逃げるぞ!!」

ジャツジが光で目が眩んでいる隙に僕はパールシスターの手を引いて逃げようとするがパールシスターは一瞬驚きの表情を浮かべていた。

「逃がすかあああ!!」

だがお構いなしにジャツジはハルバードで雑払い僕たち4人に当たる直前僕以外の3人以外は目を瞑る。

今だ!、僕はエポルトラスターを取り出し引き抜き天に掲げると眩い光とともに僕はネクサスへと変身した!

パールシスター side

もう駄目だと私は目を瞑ったがハルバードは私に向かってこない。

「この暖かい光・・・まさか!」

「来てくれたです〜!!」

アイエフさんとコンパさんがまるで待ち侘びたように言い私も目を開ける。

そこにはハルバードを受け止める赤いオーラを纏った銀色の巨人が悠然と立ち私たちに向かって頷く。

神秘すら感じる銀色の巨人けど少し漏れてきた赤いオーラの暖かさに私は既視感を覚える。

さっきの男の人の手の温もりと同じ……だけど私は力尽きたように倒れてしまった。

ネクサス side

僕はネクサスに変身した直後に全身から発する光で敵の動きを止める技「オーラミラーージュ」でハルバードで受け止めパールシスターが倒れるもアイエフがパールシスターが担いで逃げていく。

「この光!!、遂に来たかアアアアア!!」

ジャツジは叫んでいるがお前と戦うつもりはない！、僕は渾身のパンチをジャツジに浴びせる！

「ヘアツ!？」

ジャツジはそこら辺の岩場にめり込み僕はすぐにまだ捕らわれている女神たちに向かう。

向かった僕は天を仰ぐ構えを取り流れるように掌底を突き出し元々はウルトラマンコスモスの技「コスモフォース」改め「アンファンスフォース」を繰り出し女神たちにエネルギーを与える。

僕と守護女神の力が似ているのなら僕から力を与えると踏みこの技を試したが：：成功し女神たちに力が戻っていく！

あともう少し・・・と思った時！

突如僕に紫の落雷が落とされ僕は咄嗟に避けるもエネルギーの照射が途切れてしま
う！

もう1度をしようと構えを取るが。

「あなたも・・・早く行って・・・」

「で・・・でも!」

微かに意識が戻ったパープルハートが帰るように促し僕は戸惑う。

「私の妹を・・・ネプギアを・・・お願い・・・」

「くっ！、必ず助けに来る!!」

そう言つてガクツと項垂れるパープルハートに僕は仕方なく光球となつてプラネテューヌに撤退した。

「頼んだわよ・・・光の・・・勇者・・・」

Episode. 6 帰還—プラネテューヌ—

僕は光球となってプラネテューヌの教会に帰り急いでイストワールの元に向かう。

「コウヤ！、無事だったんだ!?、良かった・・・」

「怪我はないですか？」

「ああ全くないよ、それよりも女神様の容態は？」

「大丈夫です、少し寝れば回復するでしょう」

身体の問題なしか・・・後は心の問題だね。

「皆さんもネプギアさんが回復するまで休んでいてください」

「僕はイストワールに報告にするから先に休んでいて」

「ごめんコウヤ・・・もうクタクタで」

「後はお願いです、コウちゃん」

アイエフとコンパの表情を見る限り疲れているのは目に見えていたからね、それに僕はイストワールに言わなきゃいけない事がある。

「・・・お2人は行きましましたね」

「ああ・・・すまない、守護女神たちまでは救う事は出来なかった」

「そうですか・・・あなたの力をもってしても駄目でしたか・・・」

今回守護女神救出に使ったは精々一人を助けるのが限界だった、だから残りの守護女神は僕が助ける算段だった、あの時落雷がなければ！

「コウヤさん、自分を責めないでください、時間は掛かりますがまだ方法はあります、あなたも休んでください」

「分かっている、ありがとう」

僕を気遣ってくれるイストワールを背に僕も部屋を出ようとする。

「そういえば・・・本の乗り心地はどう？」

「はい、貸してもらって以来快調そのものです、お陰で仕事も捗っていますよ」

今イストワールが乗っているのは僕が神様に貰った詳細本でイストワールが興味を持って読んでいたから今は貸してこの本に乗っていると何故か調子が良いらしい、一応僕の力の一部らしい守護女神の力に似ているからかな？

僕は笑顔を見せ教会の休憩室で休む事にした。

僕はネプビタンCを飲みテーブルに置いてから少し救出の事を思い出す。

まずジャッジが僕の正体に気づいた事、いくらゲームギョウ界で見られない技でも僕

の正体に気付くとは到底思えない、恐らく僕の力を感知したような言い方からしていたがなぜあの戦闘狂がそんな力を持っているんだ？

それにあの落雷は間違いなく守護女神の救出を妨害しようとする意思を感じた。

「間違いなく神様の行っていた災厄・・・「アンノウンハンド」って言えばいいか」

確かにあの落雷と3年前のガルベロスを召喚した黒い雲は僕の力の正反対・・・闇の力を感じた。

『ドツクン・・・』

「ネプギアが目覚めたか・・・イストワールの所だろう」

エボルトラスターで感じた守護女神の反応で僕はネプギアが目覚めた事に気が付きイストワールの所に向かった。

「失礼します」

「良いタイミングですねコウヤさん」

「あなたは・・・」

「僕は諜報部員の緋剣光矢です、先程は女神様救出の為に同行していました」

「そんな堅苦しくなくても良いでしょうか？」

「そうです、ギアちゃんは私たちの友達ですからコウちゃんの友達でもあるです」

一応僕の職場のトップだから敬語で話すがアイエフとコンパに言われ僕は小さく頷くがネプギアは困惑している様だった。

「あつあのお・・・私はプラネテューヌの女神候補生のネプギアです、あの時はありがとうございます」

「気にしないでください、仕事ですから」

「コウヤ、別に敬語じゃなくても良いでしょう?」

「ギアちゃんも良いですよね?」

「はい・・・構いません」

「そう?、じゃあこれから宜しくね」

僕はネプギアに握手を求めろがネプギアは応じず俯く、もしかしてネプギアって男性が苦手だったりしたのか?

「ああそういうえばギョウカイ墓場で手繋いだっけ〜一方的だったけど〜」

「確かに一方的だつてわね／＼／」

「でもいつもの暖かい優しいコウちゃんの手でした／＼／」

なんか2人が照れていたけどネプギアも僕が握った右手を抑えていた、もしかしてそんなに嫌だったのかな?

「ネプギアさん、よければ皆さんでリハビリにクエストでも請けてみないですか？」
「えっ……はっはい……」

—瞬僕を見たけどやっぱり嫌なんだろうな。

「クエストの内容は「バーチャフォレストのスライヌ討伐」です、詳しい内容は先程渡したNギアに転送しています」

「じゃあ僕は他の仕事があるからこれで……」

「待つてください！……一緒に付いて来てもらって良いですか？」

僕は部屋を出ようとした時、アイエフやコンパよりも先にネプギアが呼び止める、えっ良いの？

「でも……」

「お願いします！」

「コウヤさん、今日の業務は別に今日やる必要はありませんのでネプギアさんに同行してあげてください」

「……分かった、でも本当に良いの？」

「良いに決まっているでしょう？、変に気を使う必要もないでしょう？」

「みんなで行けば楽しいです♪」

僕も同行する事になるが相変わらずネプギアは不安そうな表情をしていた。

「コウヤさん・・・で良いですか？」

「別にさん付けじゃなくて良いよ」

「僕たちはバーチャファオレストに向かう道中で他愛のない会話をしながら向かっていったがネプギアの表情は固かった。

「コウヤさんとアイエフさんとコンパさんって何時からお知り合いなんですか？」

「3年前にばったりギルドで会ったんだよ」

「その時のコウヤってタッチパネルの使い方すら知らなかったのよ？」

「えっ!?!、そうだったんですか!?!」

「恥ずかしながら・・・」

「でもあのおかげでコウちゃんもと友達になれた気がするです」

懐かしいなあ〜もうあれから3年も経ったんだよな、年も取らなくなってきたからそんな

実感が沸かなかったけど。

「そうなんですか・・・あのもう一つ良いですか？」

「ああ僕で答えられるのなら」

「ギョウカイ墓場で見た銀色の巨人・・・ウルトラマンネクサスって呼ばれているみたいですけど、あれは・・・」

「私たちの味方よ、3年前にもビーストの確か・・・ガルベロスからプラネテューヌを守ってくれたヒーローよ」

「身を挺して守ってくれたんですよ！、3年間現れなかったんですけどまた私たちのピンチを救ってくれたです！」

2人が熱弁するが僕はそっぽを向く。

「コウヤさん？」

「コウヤは否定派だからね、あまりネクサスの話を聞きたくないのよ」

「否定派ってなんですか？」

「ネクサスを悪さをするモンスターやビーストと同じように退治しなきゃいけないって言っている人たちの事です」

「えっ？、あの巨人を!？」

「そう可笑しな話でしょう？、ネクサスは私たちの仲間なのに」

「なら3年間もの間姿を見せなかつたんだ？、それにあのタイミングでギョウカイ墓場にネクススが現れた事自体何か裏があるとは思わないの？」

「なんでそんなに巨人・・・ネクススについて疑うんですか？」

ネプギアは信じられない様子で尋ね僕は思わず目線を逸らす。

「良いのよ、コウヤはネクススの事だけはこんな事しか言わないから」

「普段はいつも私たちを気遣ってくれて優しいのに・・・ウルトラマンネクススって言う名前を付けたのは実はコウちゃんなんです」

「えっ?！」

「・・・早く行こう、じゃないと日が暮れる」

僕はみんなを急かしバーチャフォレストに向かった。

僕たちはバーチャフォレストに到着しそれぞれの武器を取り出し僕もブラストシヨットを取り出す。

「コウヤさんの武器つて銃にも剣にもなるんですね」

「うん、結構使い勝手も良いよ」

「それにこのマークつて・・・ネクサスの胸のゲージの形に似ていますね」

そのネプギアの一言でアイエフもコンパもまじまじとブラストシヨットを見る。

「確かに似ているわね・・・」

「本当です！、気付かなかったです」

「そんな事ないよ・・・」

僕は茶を濁して先に入っていき3人も後を付いてくる。

「あっ・・・いた・・・」

「じゃあさっさと片付けましょう、ネプギア行ける？」

「はい・・・」

複数のスライヌを見つけ戦闘態勢を取るが不安げに答えるネプギアはやっぱりあまり戦える状態じゃない、何かあった時にはフォローしないと。

「ヌラ〜」

「よしっ行くわよー！」

「行くです〜！」

「トドメはネプギアが刺すんだ！」

「はっはい！」

僕たちは一気にスライヌたちに詰め寄りアイエフはカタールで切り裂きコンパは巨大注射器で突き刺し僕はソードモードで薙払い最後の一体をネプギアがビームソードで切り裂いた。

「まあざつとこんな物ね」

「いや・・・まだいるぞ」

僕はモンスターの気配を感じるとさっきの戦闘で呼び寄せてしまったのか森に居るモンスターたちが集まりつつあった。

「どうするです・・・」

「僕が活路を開く、3人は左右を抑えてくれ」

「分かったわ、2人とも行くわよ！」

「はいです！」

「わっ分かりました！」

僕は一番集まっていた正面に切り込み次々とモンスターを倒していく。

3年間のレベル上げのお陰でこちら辺のモンスターには余裕で戦えるぐらいになっ

ていた。

「きやあ!？」

「っ!、ネプギア!!」

だがその時ネプギアは尻餅をついてしまい僕は咄嗟にブラストショットをエア―バーストモードに切り替え波動弾を放つ。

「ヌラー!」

波動弾はネプギアを襲うとしたビックスライヌに命中しネプギアに駆け寄る。

「大丈夫!?!、怪我はない!？」

「はっはい・・・大丈夫です」

「コウヤ!!、粗方片付いたわよ!」

「分かった!、ネプギア立てる?」

「はい・・・すいません」

僕はネプギアを支えながら立たせ僕たちは出口へと向かった。

「ここまで来れば大丈夫だね」

「ちよつと危なかつたわね」

「ヒヤヒヤしたです」

僕たちは出口まで走るともうモンスターも追つてこなくなり胸を撫で下ろす。

「コウヤさん……ありがとうございます」

「気にしなくて良いよ、まだ目覚めて間もないんだからね」

僕はそう答えるがネプギアの表情は晴れなかつた。

「強いんですね、まるで……お姉ちゃんみたい」

「ネプギア……」

「ギアちゃん……」

引き摺らない方がおかしいか、自分だけが助けられた事・自分の姉がまだ捕らわれている事、色んな不安がネプギアに押し掛つていているんだな、ゲームでは全く分からない気持ちに僕には伝わっていた。

「とにかく今はプラネテューヌに帰ろう、クエストの報告もしないとね」

僕はそう言いプラネテューヌに帰る事にした、ゲームではアイエフのおかげで抜け出すのが早く不安から抜け出して欲しいと僕は心から思った。

Episode. 7 悩み—ネプギア—

僕たちはプラネテューヌの教会に帰った後、解散し僕も自分の家に帰っていた。

「大変だよね．．．これからがもつと．．．」

僕は椅子に座りエボルトラスターを取り出してそう言う。

明日からは恐らくゲームキャラを巡る旅の始まりになる、手始めにプラネテューヌのゲームキャラだが障害はないわけがなくゲームだと下っ端．．．リンダと戦うことになりそこでネプギアはアイエフのおかげで立ち直る。

しかしアンノウハンドにビーストに極めつけの僕の存在がもうこれでもかこのゲームギョウ界に干渉している、ゲーム通りにいかないと思っていいたいだろう。

『ピンポーン』

「は〜い、今行きます〜」

誰かな？、僕を尋ねて来るってあの2人しか．．．

『ドクン．．．』

「ネプギアなのか？」

エボルトラスターが女神の反応を示し少なくともネプギアがいると考え扉を開ける。

「コウヤ？、上がったも良い？」

「ああ全然良いよ」

「なら今日は私がご飯を作るです〜♪、早くギアちゃんも入るです〜」

「おっお邪魔します・・・」

案の定アイエフとコンパそれにオドオドしながらネプギアの僕の家にかかる。

「ねえコウヤ、あのゲームやってみた？」

「ああ結構楽しめたよ、そうだ！みんなでそれをやろうよ！、コントローラーも人数分あるしー」

まだ夕飯には早かったのでゲームをやろうと提案するがネプギアは慣れないのかソワソワとしていた。

「ネプギアもやらない？、結構面白いよ」

「良いんですか？」

「勿論遠慮することないよ、狭いけど自分の家だと思って寛いで」

普通に寛いでいるアイエフやお茶を入れているコンパを見てネプギアは頷きアイエフと一緒にゲームをやり始める。

「ギアちゃん、やっと笑顔になったです」

「うん・・・ずっとあの笑顔のままできてほしい・・・コンパにもアイエフにも」

「コウちゃん・・・」

笑顔でゲームをやっているネプギアを見て僕はそう答える、本当は戦って欲しくないけど僕一人だけで出来る事なんて少なすぎる。

「ちよつと食事の前に運動してくるよ、腹を空かしておかなきゃいけないからね」

「ならコウちゃん、これ買い忘れたので買ってきてもらって良いですか?」

「了解」

僕はコンパからメモを貰って外に出るがその姿をネプギアがしつかりと確認していた。

「よしっ、これで全部買ったな」

僕はコンパからのメモに書かれていた品を一通り買い家路に着くと。

「あれっ?、ネプギア?」

「コウヤさん・・・あつあのお・・・」

何故かネプギアが僕を待っていて何か言いたそうにしていた。

「ここだとあれだから公園でも行つて話そうか？」

「はい……」

僕の提案で近くの公園のベンチに座りネプギアも隣に座る。

「良かったら飲む？」

「ありがとうございます」

僕は買い物袋からヒーロードリンクを取り出し一本をネプギアに渡しもう一本は僕が飲む。

「何か僕に用があるんじゃないの？」

「はい……あのギョウカイ墓場にいた大きい黒いのを知っていますよね？」

「ああでもそれがどうしたの？」

「ジャツジ・ザ・ハードの事か、でもあいつがどうかしたのか？」

「私の攻撃が全く効かなくて……私より前に戦っていたコウヤさんの攻撃の方が効いていたんですよね」

「どうかな〜マグレじゃないかな？、ネプギアは起きたばかりで本調子じゃなかったらダメだったただだよ」

「そういえばあいつそんな事を言っていたような……でも別段気にすることもないと

思うけどな。

「本調子でもダメだったかも・・・」

「えっ?」

「私、3年前にもお姉ちゃん達に付いて行ってマジック・ザ・ハードと戦ったんです、でもお姉ちゃん達が手も足も出なくて私は何も出来なくて・・・今回も結局何も出来ずにコウヤさんたちやネクサスが助けてくれたからどうにかなりましたけど・・・」

今回の事と3年前の出来事が重なってしまったのか、無理もないか。

「こんな私がお姉ちゃん達を助ける事なんて出来るのでしょうか?」

「さあねえ・・・」「1人」じゃ無理だね」

「そうですね・・・」

「僕でも無理だよ、きつとウルトラマンネクサスでも無理だと思う」

「えっ?」

「1人」では無理でも「みんな」で協力すれば出来ると思わない?」

そう僕だけじゃ無理でもみんなで頑張ればきつと出来る。

「みんな・・・」

「ああ決して君は1人じゃない、今はアイエフにコンパにそれと僕、それに君の心の中にはお姉さんの思いもあるはずだよ」

ネプギアは胸を抑え何かに気付いたようなハツとした表情になる。

「ごめんね知ったような事を言つて」

「いえありがとうございます！、なんだか吹っ切れたような気がします！」

晴れやかな表情で言うネプギアに僕は微笑みながら頷きベンチから立つ。

「じゃあ帰ろうか、もう夕飯には良いぐらいだし」

「はい・・・最後に一つ聞いても良いですか？」

「良いよ、何？」

「どうしても分からないんです、こんなに助言をしてくれるコウヤさんがネクサスを認めていない事に、今回の事ではつきりと分かったんです、コウヤさんといるとお姉ちゃんに似ているけど何処か違う安心感があつて、最初にネクサスを見た時と全く同じだつて」

やっぱりネクサスの事か・・・アイエフとコンパに感化されたようだね。

「じゃあ何故ネプギアはネクサスを信じられるんだ？」

「ネクサスを見て感じたんです、ネクサスも私たちと同じゲームギョウ界を守る者、守護神じゃないかつて」

「違う！、ネクサスは守護神なんかじゃない!!」

僕は思わず声を荒らげてしまいネプギアは驚いていた。

「……一つ教えてあげるよ、ネクサスもビーストも同じビーストサーチャーで捉える事が出来る」

「えっ？、それじゃあ……」

「ネクサスとビーストは似たような存在って事、姿や行動に惑わされてはいけない、ネクサスはただ邪魔な仲間を倒しているだけかもしれない」

結構な嘘をついたがこうまで言わないと本気で信じかねないからね、でもネクサスとビーストが同じビーストサーチャーで捉える事が出来るって言うのは原作ではそうだったしこの世界でも変わらないだろう。

「それでも私は信じます、ネクサスは私たちの味方です」

真っ直ぐな目で答えるネプギアに僕は目を背けてしまう、僕たちは僕の家に戻りコンパの手料理を食べた後、解散し僕は後片付けをしてベットに寝転がりながらエボルトラストスターを取り出しネプギアが言っていた事を思い出す。

僕には理解できなかった、ネクサスとビーストが同じかもしれないって聞いてもネプテューヌや僕に似ているってだけで僕を……ネクサスを信じれる事が。

次の日、僕は職場である教会に向かうがアイエフと一緒にイストワールに呼び出されイストワールの待つ部屋に向かうと既にコンパとネプギアがいた。

「アイエフさん、コウヤさんおはようございます！」

「おはよう、なんか今日は調子良さそうじゃない」

昨日と違って活力のある挨拶にアイエフはそう尋ね僕は頷いていた。

「皆さんお揃いですね、では本題に入ります」

イストワールの言葉で僕たちはイストワールに注目する。

「現在私たちだけでは守護女神の救出は不可能です、そこで各国にいる女神候補生とゲームキャラの協力を得ましょう」

「女神候補生は分かれますけど、ゲームキャラは何ですか？」

「ゲームキャラは各国の土地に宿り繁栄をもたらすと同時に有事の際にはその時の女神を助け悪を滅ぼすだけの力を秘めています」

「簡単に言うとその国の守護者だね」

イストワールと僕がゲームキャラについて説明しネプギア・アイエフ・コンパは決心したように頷き合い僕とイストワールも互いに見合つて笑みを浮かべる。

「プラネテューヌのゲームキャラはバーチャフォレストの最深部で眠りに着いています」

「じゃあみんなで向かいましょう!」

「ええ!」

「はいです!」

アイエフやコンパが返事をするとなぷギアは僕を見つめる。

「コウヤさんも・・・お願いしてもいいですか?」

「G・I・G!」

「なんですか・・・それ?」

「ある防衛チームの合言葉で「分かりました」って意味だよ」

僕は某無限の友情を秘めたウルトラマンがいそうな防衛チームの言い方で言い僕を含めて4人でバーチャフォレスト最深部を向かう事になった、一応僕は神様からネプギ

アと行動を共にするように言われていたけど。

その後僕たちは準備を整え、プラネテューヌの玄関口に集合した。

その時に見たネプギアの表情は不安や恐れは消え、真っ直ぐに前だけを見つめた輝いた目だった。

Episode. 8 女神化—パープルシスター—

僕たちはバーチャフォレスト最深部に向かい現在最深部の入口まで来ていた。

「ここにゲームキャラが・・・」

「ああ眠っているはず」

「なら急ぎましょう！」

「善は急げです！」

急がば回れとも言うけど、でも時間に余裕のない僕たちは最深部に進んでいく。

「グワアアア！」

「このモンスター急に黒く!？」

「汚染されたのね、モンスターは犯罪組織と特にビーストの影響を受けやすいからね」

「パワーも段違いに上がっているから気を付けるです！」

「待つて、ここは僕に任せて」

ネプギア・アイエフ・コンパは戦闘態勢に入るが僕はバツと右手を広げて止める。

「どうするつもりなの？」

「まあ見てて」

僕はブラストショットを取り出しソードモードに切り替え撫でるように右手にスライドさせると刀身が緑色に輝く。

「ウルトラコンフォート……」

僕は汚染されたモンスターに向かって緑色の光を放射し元々はウルトラマンギンガの技「ギンガコンフォート」改め「ウルトラコンフォート」というモンスターや怪獣を静める鎮静光線を浴びせる。

「ガルウウウ……グワア？」

「帰るんだ、お前たちの住処に」

すると汚染モンスターは元に戻り僕の問いかけで住処に戻って行った。

「もしかして……浄化したんですか？」

「ああ元々のモンスターはそこまで凶暴な種じゃないからね、汚染されて凶暴化しただけなんだ」

「モンスターにまで気を配るなんて……本当にお人好しね」

「でもそこがコウちゃんの良い所です♪」

僕が笑顔で頷くとネプギアも嬉しそうに頷いていた。

「さあ先を急ごう」

僕はそう言い最深部を進んで行く。

探索してから数分後・・・

「あれって・・・」

「多分あれだな・・・ちよつと待って！」

「誰かいるです！」

「ゲームキャラを壊そうとしています!!」

僕たちはゲームキャラらしき紫色のディスクを見つけるがどうやらこのイベントも回避不能みたい。

「待ちなさい!、一体何をしてるの!?!」

「ああ?、何をしているかって見れば分かるだろう?」

「ゲームキャラさんを壊そうとしているです!」

既にゲームキャラの目の前には犯罪組織マジエコンの構成員リンダ（通称下っ端）が鉄パイプのような得物でゲームキャラを壊そうとする。

「お前・・・犯罪組織の者だな」

「へえく鼻が効く奴がいるんだなあ、お前に免じてよく教えてやるから耳の穴かっぼじって聞いとけよお」

僕は一応お前の事を知っているけどね、お前の上司も。

「犯罪組織マジエコンヌが誇るマジパネエ構成員リンダ様たあ・・・」

「構成員？、じゃあ下っ端って事じゃない？」

「なっ!？」

「下っ端さんです」

「お前ら！」

「下っ端ですね」

「誰が下っ端だ!?!誰が!」

そう言えばネプギアたちには一度も名前で呼んでもらえなかつたっけ?、せめて僕だけでも名前で呼ぶか・・・

「そんな事よりもリンダ、お前がゲームキャラを壊すのならお前と倒さなきゃいけない、そこをどいてもらえないか？」

「ふんっ、どけと言われてどくわけないだろう!」

「下っ端のくせに生意気よ!、すぐにどきなさい!」

遂に戦闘になりリンダの鉄パイプとアイエフのカタールがぶつかり合うが。

「オラア!」

「きやあああ!!」

軽くリンダに押し負けアイエフは吹き飛び近くの壁に叩きつけられる。

「アイちゃん!」

「ぐっ・・・」

「そこをどいてください!!」

「しやらくせえ!」

次はネプギアが挑むが全く歯が立たずリンダから一撃を浴びせしまい大きく後退してしまう。

「これもマジエコンヌのシエアが強まっているせいなの?」

「恐らくね・・・アイエフ立てるか?、コンパ治療を!」

「はいです!」

「させる訳無いだろう!!」

僕はアイエフを支えコンパに治療を頼んだ直後、リンダが襲い掛かり咄嗟に僕はコンパに向かってアイエフを突き飛ばしブラストショットソードモードで鉄パイプを受け止め回し蹴りを浴びせようとするが間一髪でリンダは避ける。

「へえくお前はそれなりに見込みがあるなあ、マジエコンヌに入る気はないか?」

「すまないがそんな物には興味もないね」

「コウヤさん・・・」

僕とリンダが話しているとネプギアが少し恐れを抱いた表情で見ていた、僕はそれに気付くと。

「ネプギア、ここからは君が戦うんだ！」

「えっ!？」

「コウヤ何を言っているの!？、ネプギアはまだ・・・」

「君の中にはリンダを倒せる力がある!、それに昨日僕が言ったはずだ君は決して1人じゃない!、1人で戦っているわけじゃない!!」

僕はネプギアに伝えネプギアはハツとした表情になり僕やアイエフやコンパを見る。

「何をごちゃごちゃ言ってるやがる!!」

「グッ!!」

「コウヤさん!？」

僕はリンダの攻撃を会えて受け地に伏す。

「へっ!、結構呆気ないなお前から先に始末してやる!!」

リンダは僕に向かって鉄パイプを振り下ろそうとするが・・・

「ダメ・・・こんなんじやダメ!!」

ネプギアの身体が光だし僕たちも注目する、ようやくだね。

「守ってもらっただけじゃダメ!!、今度は・・・私が守っていきます!!」

ネプギアは決意と共に眩い光に包まれる。

「貴様・・・女神だったのか!？」

「覚悟してください！、あなたは私が倒します！」

光が収束するとプロセツサユニットを纏ったネプギア又の名をパールシスターが降臨した。

パールシスター side

プラネテユースから帰って来てから変身出来なかつたけどようやく変身出来た！

「変身出来たからってなんだったっていうんだあ!!、蹴散らしてやらあ!!」

「全力で行きます！」

下っ端さんの鉄パイプと私のM・P・B・Lが鍔迫り合いになります、ですが！

「はあああ!!」

「なにつ!？」

私がお押し返し1振り浴びせようと思いますが下つ端さんは紙一重で避けます。

「ばかな!?!、ガキンちよにこんな力が!?!」

「これで決めます!?!、M^{マル}・P^チ・B^{フル}・L^{ビームランチャー}!?!」

私は下つ端さんが怯んでいる隙にM^{マル}・P^チ・B^{フル}・L^{ビームランチャー}の銃口を下つ端さんに向け高出力のビームを下つ端に浴びせます!

「くっ!、クソツ!!、こうなつたら!!」

ビームは下つ端さんの左肩を掠めると下つ端さんは私ではなくゲームキャラが宿っているディスクに向かいます・・・まさか!?!

「やめなさい!?!」

「やめるわけ無いだろうが!?!」

下つ端さんがゲームキャラに向かって鉄パイプを振り下ろそうとしますが、ここからじゃ間に合わない!!

すると何処からの波動弾が下つ端さんの鉄パイプに命中し手から弾き飛ばされるとコウヤさんがいつの間にか下つ端さんの懐に潜り込み掌底を浴びせて下つ端さんを大きく後退させました。

「コウヤさん!?!」

「これ以上にやるならもう容赦はしない」

「くっ!・・・覚えてろおー!!」

下っ端さんは良くありそうな捨て台詞を残して去って行きました。

「逃げ足だけは早いわね・・・」

「それよりもゲームキャラさんが無事で良かったです」

「コウヤさん・・・すいません、危うくゲームキャラを・・・」

「いや上出来だったよ、流石はプラネテューヌの女神候補生だね」

コウヤさんはそう言って私の頭を撫でました、お姉ちゃんとは違う安心感と温もりがとても・・・気持ちが良いです。

「いつの間にか2人が仲良くなっているです・・・」

「それにネプギアの顔も緩んでいるし・・・」

「えっ!?!、そうですか!?!」

「別に悪い事じゃないしたまには良いじゃない、ねえ?」

いつの間にか顔が緩んでいたようですがコウヤさんが笑顔でそう言ってくれると本当にそう思えます。

「そんな事より、早くゲームキャラを起こさないとね」

「でもどうやって起こすですか?」

「流石にさっきの戦闘で目を醒ましているでしょう……」

「醒ましていますよ?」

すると突如ディスクから声が聞こえました、本当に目を醒ましてようです。

「女神……いえまだ女神候補生ですか、それと……この方は?」

ゲームキャラはコウヤさんをまじまじと見つめます、1人だけ男性だからでしょうか? ?

「ゲームキャラさん、いきなりですいませんあなたの力を貸してもらえないでしょうか?」

私はそう懇願すると。

「分かりました、あなたなら私の力を正しく使ってくださいでしょう、それに……」希望の光「もどうやらあなたたちを見届けている事ですし」

ゲームキャラはそう言って私の手元に光を放ち光はゲームキャラの力が籠った一枚の紫色のディスク「パープルディスク」になりました。

「では私はまた場所を変えて眠りに着きましょう、女神候補生そして……希望の光……」

最後にコウヤさんを見て言うとゲームキャラは消えてしまいました、その時のコウヤさんの表情は少し動揺しているようでした。

「これでなんとか1つは手に入れたわね」

「先ずは一度プラネテューヌに帰ってからイストワールに報告だね」

「はい、そうですね」

私はコウヤさんが動揺していた理由を聞こうと思っただけど何故か聞けなかった、まだ聞いてはいけない・・・そんな感じがしたから。

するとコウヤさんは何かを察知したように後ろを振り向く。

「みんな早く逃げるんだ！」

「えっ?、どうしたのいきなり?」

「っ!!、何かこっちに向かってくるです!!」

「あれは!」

私たちも釣られて後ろを振り向くと空を飛ぶ明らかにモンスターとは違う異形の物体が私たちに襲いかかってきます!

「あいつは・・・」

「プログタイプビーストペドレオンのフリーゲンね、という事は近くに親が!!」

「という事はあれがスペースビーストなんですか!」

「はいです!、3年間ビーストも全く姿を見せていなかったんです!」

「それなら何故名前が分かったんですか?」

「コウヤが犯罪組織から奪ったデータの中にビーストの情報があつてね、私たちも本物

を見るのは初めてよ！」

そういうえばコウヤさんつてアイエフさんと同じ諜報部員でしたね、するとコウヤさんが私の前に出ます。

「ここは俺が食い止める、みんなは早く逃げろ！」

「あんた一人残して逃げれる訳じゃない！」

「コウちゃんも一緒に逃げるです!!」

「コウヤさん、ここは私に任せてください!、これぐらいなら私でも倒せます!」

私は空を飛びペドレオンフリーゲンというビーストを前にM・P・B・Lを構えます、あなたたちに恐怖は感じません!、あるのはみんなを守りたいと思う思いのみです!

「はあああ!!」

「ギユオオオオン!!」

私は一体のペドレオンを切り裂き消滅しますが続々と向かってくるペドレオンたちにはビームを放ち接近したペドレオンは切り裂きます。

「空中だけじゃない、地上にもいる」

「これじゃキリがない!!」

「倒しても倒しても沸いて出てくるですく・・・」

地上でもペドレオンの別個体クラインとコウヤさんが戦っていてアイエフさんやコンパさんには徐々に疲れが見えていました、でもコウヤさんだけはそんな様子は見せず逃げ道を作ろうと一点突破をしようとしていました。

その時コンパさんの足がペドレオンの触手に絡め取られます！

「きやあああああ!!」

「コンパ!!」

アイエフさんが気づき助けようと思しますが他のペドレオンに邪魔をして向かえません、なら私が！

「ギユオオオオン!!」

「しまった!?!、きやあああ!!」

一瞬の隙を突かれてペドレオンの突進を受けてしまい地面に叩き付けられてしまいます、このままじゃコンパさんが!?

コンパさんの足を絡め取ったペドレオンは自分の目の前までコンパさんを引き摺り大きな口を開き捕食しようとしています！

「もう・・・ダメです!」

私やアイエフさんもそう思った時！

「諦めるな!!」

「コウヤさんのその激励と共に波動弾が打ち込まれペドレオンは瞬く間に消滅しました！」

「コウちゃん……」

「さっきの言葉……まさかそんな事……」

コウヤさん涙目で見るコンパさんにコウヤさんは頷きます、アイエフさんも何か思い当たるような素振りを見せます。

「っ!?、ネプギア後ろだ!!」

「っ!!」

気を取られていた私は背後から私を捕食しようとするペドレオンに気付かず硬直してしまい目を瞑ってしまいます！

『ドゴオオオオオン!!』

その時、巨大な地響きが鳴り響き私は恐る恐る目を開けると眼前には巨大な銀色の拳がペドレオンを叩き潰していました。

「ウ……ウルトラマンネクサス?」

突如として現れた銀色の巨人ウルトラマンネクサスは私の問い掛けに無言で頷きました、まるで「良く頑張った、後は任せろ!」と言わんばかりで私はとてつもない安心感と優しさに包まれていましたが既に何処か覚えのある感じでした。

Episode. 9 出発—ディパーチャー—

僕はピンチに陥ったネプギアにアイエフとコンパの視線が釘付けの際にエボルトラストスターを取り出し引き抜き天に掲げウルトラマンネクサスに変身しネプギアを襲おうとするペドレオンフリーゲンを拳で叩き潰した。

恐る恐る目を開け僕の姿を見て驚くネプギアに僕は後を任せるように頷く、ネプギアは理解してくれたかは分からないけど目を輝かせて僕を見つめていた。

「ウルトラマンネクサス！、近くにペドレオンの親がいるはずよ！、気を付けて！」

アイエフの忠告に僕は頷き両手を突き出しクロスさせアームドネクサスが光ると僕はガッツポーズを取り全身から赤いオーラを周囲に溢れ出させる。

「「「ギユオオオオン!!」」」

辺りにいたペドレオンは赤いオーラで浴びた途端消滅していくが・・・

「この光は・・・ピーストだけを倒すみたいね・・・」

「私たちには・・・とっても暖かい心地良いです」

「この光の温もりは・・・」

逆にネプギアたちには何の問題もなくただの暖かい光になる以前のオーラミラー

ジユを發展させた技「オーラバースト」というビーストだけを狙い撃ちに出来る技なんだ。

これで小型ビーストは片付けた、後はこいつらを生み出した親だ！

「ギユオオオオン！」

「ツ!?、セヤア！」

突如背後から聞こえ振り向くと小型のペドレオンを生み出した親ペドレオングロースがまさに火球を放ち僕は火球を弾く。

「デヤツ！」

僕はジャンプしペドレオンに飛び蹴りを浴びせ着地したと同時にアツパーを浴びせミドルキックを叩き込む。

「ギユオ!?」

ペドレオンも触手で応戦しようとするが僕はそれを掴みジャイアントスイングのようになペドレオンを振り回しそして大きく投げた。

「ギユオオオオン・・・」

「ハッ!、デヤアアア！」

僕は追い打ちをかけようと地面に叩き付けられたペドレオンにパンチを浴びせようと駆け寄る。

「ギユオオオオン！」

「ッ!？」

だがペドレオンは口から衝撃波を放ち僕は回避しきれず吹き飛ばされてしまう、けどその能力は既に知っていた!

「フッ!、セヤアッ!!」

僕は足元にサークルシールドを作り足場にしてジャンプをしペドレオンの頭部に踵落としを決める。

ペドレオンも僕の右手を触手で絡めとり電撃を浴びせる。

「ウワッ!?!、ハアアア・・・」

流石に右手に激痛が走るけど右手のアームドネクサスに力を集中させエルボーカッターが光りそして・・・

「デヤアアアア!!」

「ギユオオオオン!？」

僕はエルボーカッターで切り裂きペドレオンは悲鳴を上げると僕は回し蹴りを浴びせペドレオンを吹き飛ばす。

完全に弱りきっているペドレオンに止めを刺そうとクロスレイ・シュトロームを放とうと構えを取り十字を組みそうになった時

「ハアアアアア．．．ツ!？」

「あれは!？」

「ガルベロスを呼び出した時の黒い雲です!」

突然ペドレオンの真上にどす黒い雲が現れ僕は思わず中断してしまう、間違いなくアンノウンハンドだ!

「ギユオオオオン!」

その隙にペドレオンは火球を放つがその標的は僕じゃなくネプギアたちだった!

「セヤアアア!」

僕は火球とネプギアたちの間に立ち火球を受け止める。

その時黒い雲はペドレオンを粒子に変えて吸い込んでいき全て吸い終わると瞬く間に消えてしまった!

僕は辺りを見渡すがペドレオンは影も形もなくなりこのままいても仕方ないので変身を解こうとする。

「ネ．．．ネクスス!」

するとネプギアが僕に話し掛け僕は首を傾ける。

「ありがとう．．．」

別に礼を言う必要もないと思うけど、本当に律儀だな．．．取り敢えず僕は頷き変身

を解きネクサスとしての僕は霧のように消えた。

ネプギア side

ネクサスとペドレオンの戦いは終始ネクサスが圧倒し黒い雲が現れペドレオンを吸い込んでしまい決着はつかなかった、あの黒い雲はネクサスとは真逆なとても禍々しい邪悪な力を感じた。

「あの黒い雲は3年前にも現れたんですか？」

「ええ、しかもあの雲はガルベロスを召喚して今回もまたペドレオンを撤退させたように見えたわ」

「でもあの雲は一体何ですか？」

「それは私たちも分からないです、でも間違いなくビーストの味方です！」

「それはどうだろうね？」

私もコンパさんの意見に賛成するけどさつきまで姿が見えなかったコウヤさんが現れる。

「コウちゃん！、何処に行っていたのですか!?!、心配したです〜！」

「別の場所でビーストと戦っていたんだ、僕もさつきの戦闘を見ていたけどこれでますますネクサスは怪しくなったね」

「コウヤ・・・それはどういう意味？」

涙目になって言うコンパさんにコウヤさんは優しく言うもネクサスに関してはきつく言い放ちそれにアイエフさんが少し怒った様子で尋ねる。

「2人にもネプギアにも言ったよねネクサスはビーストと同じかもしれない、あの黒い雲なんて僕は全くネクサスと同質だと感じた、つまりあれはネクサスが作り出したかもしれない」

「流石に冗談が過ぎるわよ・・・なら3年前と今日となんでビーストを召喚したり逃げたのよ？」

「簡単に言えばテストじゃないかな?、ビーストの召喚と能力を試し自身の力を試したのが3年前、今日は更に強くなった自身とビーストの能力をテストをし粒子に変換して逃がせるか試したんだよ」

「じゃあなんで私たちを助けたのよ!!、そんなの何の意味もないでしょう!!」

「意味ならあるさ、実際にメタフィールドに入った人間のサンプルとして生かし自身の実験を邪魔されないように意図的に人間から信頼を得ようとした、これなら一番辻褃が合う」

アイエフさんの怒りが込み上げるのが分かるけどコウヤさんはお構いなしに質問に答えると遂にアイエフさんはコウヤさんに掴み掛る！

「アイちゃん!?!」

「あんたはなんでそんな弄れた見方しか出来ないの!?!、いつもあんなに優しくして・・・思いやる事が出来るのに!!」

「前にも言ったよね?、姿や行動に惑わされてはいけないって」

アイエフさんは掴み掛るも怒りながらも涙目になり力もそんなに入れていないのに対しコウヤさんは溜め息をつきそう答えアイエフさんの手をどける。

「それに僕の方が理解できないよ、あんなに人間を超越し下手をすれば女神すら超えかねない力を持つネクサスを全く恐れるどころかはつきりと味方だつて言えるのが」

「何も恐れる事なんてないです、ネクサスは私の味方だつて心で感じたです」

「私もです、それに私はネクサスのあの強さの秘密を知りたい、ただ力だけじゃないもつと根源的な・・・意志の強さを感じました!」

コンパさんと私でそう答えるとコウヤさんの目は明らかに泳いでいた。

「あんたはどうなのよ？」

「僕は・・・末恐ろしいと思ったよ、あの力が少しでもゲームギョウ界に向けられると思うとゾツとする」

「そんな事は絶対にありません」

コウヤさんは背中を向けてそう言い私はそう答えアイエフさんやコンパさんも頷く。

「・・・早く帰ってイストワールに報告しよう、ラストイションに向かう準備をしないとあのリンダももう向かっていると思う」

コウヤさんはそう言ってプラネテューヌに向かい私たちも後を追いかけました。

今の私はコウヤさんが一体一人で何を背負い苦しみ敢えて自分を陥れる事ばかり言っていたのかそのほんの一部分も理解していなかった。

光矢 side

僕たちはプラネテューヌの教会に戻りイストワールに今回の事を報告した。

「無事ゲームキャラの協力を仰げたのですね、そしてやはりビーストとあの黒い雲・・・呼称としてアンノウハンドと呼びますがそれまでも動き出したようですね・・・」

「でもネクサスは現れて私たちを守ってくれました!」

「その際の記録映像を撮っています!、これを流せばよりネクサスを理解してくれるはずです!」

イストワールはネプギアとアイエフの意見を聞いて僕を見るがやはり僕は気分が良
い話ではなくそっぽを向く。

「そうですね今回の戦闘は国民の皆さんにビーストが再び現れたという意識付けとネクサスの再来を伝える為にも流しましょう」

「・・・それじゃ早くラスティションに向かおう、のんびりしている時間はないよ」
僕はみんなを急かしラスティションに向かおうとするがネプギアは立ち止まる。

「いーすんさん、今回の戦闘は察知したんですよね?」

「はい、ビーストサーチャーに反応がありましたから」

「そのビーストサーチャーにネクサスの反応もあつたんですか？」

「ネプギア、もしかして僕が嘘を言ったと思ってるの？」

「信じたくないんです、ネクサスがビーストとアンノウハンドと同じなんて・・・」

この期に及んでまだそんな事を・・・でも原作でも同じサーチャーで捉えられているんだ事実を知れば3人も考え直すかも知れない。

「実はその事ですが・・・」

だけどイストワールは言いにくそうにしその時のビーストサーチャーの波形を表示する。

「確かにビーストが発する振動波とアンノウハンドが発するマイナスの特殊振動波は検出されました・・・」

「ネクサスはどうでしたか？」

いくら推奨派でもイストワールが嘘を言うはずがない、イストワールは意を決した様子でペドレオンが現れてから消えるまでの時間の一覧を表示するが僕は驚きを隠せなかった。

「ですがビーストが現れてから消えるまでの時間と念の為に消えてから皆さんが帰ってくるまでの時間まで計測しましたが一切ネクサスと思われる振動波は確認できませんでした」

「という事はネクサスは・・・」

「このデータからもビーストとアンノウンハンドとは同質ではありません、私が保証します」

3人がその事実喜んでいる中、僕は目を皿にして一覽を見るが原作では検出されていたネクサスの反応であるプラスの特殊振動波は全く見えなかった。

「誰に吹き込まれたか知らないけどアテが外れたわね」

「コウちゃんももうネクサスを認めるです、ネクサスは私の味方です！」

アイエフとコンパに畳み掛けられるが僕は今の姿勢を崩すつもりはない！

「実はもう一つの興味深い事が分かりました」

「興味深い事？」

「ビーストサーチャー以外にもあらゆる計測装置で測った所、ある一つにネクサスと思われる反応を計測しました」

「その一つって何ですか？」

コンパの問いにイストワールはビーストサーチャーとは違う波形を表示した。

「以前ネプギアさんが仕事を放棄して逃げ出したネプテューヌさんを搜索する為に作った「メガミサーチャー」です」

「あああの時の・・・」

アイエフがうんざりしたように答える、ネプテューヌは仕事が大嫌いだつたな・・・
じやなく！、なんで女神を発見する為の計測器に僕が反応するんだ？

「それは単にネプギアの反応では？、あの時ネプギアは女神化もしていたし」

「はい、確かにネプギアさんの反応を確認していますがそれは別のとても大きな反応も計測できました」

イストワールはそう答え計測された2つの波形を重ねる、確かにネプギアとは違う波形は比べるととても大きくパターンも一見似ていたが微妙に違っていた。

「確かに違うけどこれをネクサスと言える根拠は？」

「実はこの波形ですがビーストサーチャーが捉えた時にはネプギアさんの反応しか捉えていないんです、それから少ししてこの波形が計測されてビーストが消えた後も計測されています」

「それって完璧にネクサスの反応じゃない！」

「じゃあネクサスは私やお姉ちゃんたちと近い存在という事ですね！」

「はい、そう言つて差し支えないでしょう」

僕がネプギアたち女神たちと近い存在？、僕は新たな事実で頭が混乱していた。

「多分皆さんは最初からそう思っていましたよ、私も初めてコウヤさんを見た時に感じました、あなたはネプギアさんやネプテューヌさんたちと近い存在だと・・・少しは自

分の事を認めてあげても良いと思います」

「・・・だからつてみんなが僕を認めるはずがない、1人でも僕を認めない人がいる限り僕はこの姿勢を崩すつもりはない」

イストワールが僕の耳元で語りかけるも僕ははつきりとそう答えた。

「コウヤゝ話し込んでないでラストেশョンに向かうわよゝおいて行くよゝ」

「ああすまない今行くゝ」

「お気を付けて・・・」

「・・・行つてきます」

僕はイストワールに挨拶を済ませてアイエフたちの元に向かう、その時の表情が憂いを秘めた表情だった。

「お待たせ」

「もうゝ本当に置いて行くわよゝ」

「つて言つてもあんな喧嘩をしたのにコウちゃんをちゃんと待つていたですゝ」

「コンパゝ・・・それどういう意味かしらゝ?」

「自分の心に聞いてみるですゝ」

なんだかコンパがアイエフを茶化していて3年前から結構このやり取りをしていて飽きないなあゝと思ひながら微笑ましく見ていた、だけどネプギアは何か気付いた様

な表情をしていた。

こうして僕たちは次の目的地であるラスティションに向かった。

第2章 黒の女神候補生とのクラツシユ

Episode. 10 黒の大地―ラスティション―

僕たちはプラネテューヌのゲームキャラの協力を得てイストワールに報告して現在守護女神ブラックハートが治めるラスティションを来していた。

「ここがラスティション・・・!、本当に機械だらけですね!」

「なんかプラネテューヌと違って重厚な感じが良いなあ・・・」

ラスティションはなんとなく転生する前の現代の雰囲気似ているからプラネテューヌとは違った実家のような安心感があった。

「あつ!、これなんて特に可愛いですよ!!」

僕はそう言われてネプギアが指差すパーツショップの部品を見るが僕には機械が苦手なので特に良さが分からなかった。

「これも可愛いです♪」

するとコンパもウィンドウショッピングを楽しんでいる様子でコンパらしい女性物の可愛らしいポーチに釘付けになっていた。

「みんな何やっているのよ・・・私たちにはやる事が山積みなのよ」

「そうですね、今は我慢ですね・・・」

「我慢です・・・」

明らかに2人ともしよんぼりしていたが仕方ないか・・・でも少しだけでも楽しませてやりたいな。

「あつ」

「どうしたの？」

「いやなんでもないわ・・・」

僕はアイエフが気になった物を見るとこれまたアイエフの厨二心をくすぐりそうなキャラクターのキーホルダーだった。

「所で何処に行くかアテはあるの？」

「取り敢えずギルドに向かいますし、情報収集とシエアの回復もしなきゃいけないし」

「シエアの回復ならともかく情報収集なら教会に行けば良くない？」

「この教祖・・・あまり良い評判を聞かないのよ、教会に行くのわ最後の手段にしましょう」

ラストイションの教祖はビジネスライクの神宮寺ケイだったか、別に悪い人じゃないからそこまで警戒する必要はないけどここで僕がそれを言ってしまうと正体をバラしかねないから言えないな。

その数分後、ラスティションのギルドに到着したけどプラネテューヌに比べて人の出入りや多さも少なかった。

「まあ分かっていただけと少ないね」

「それほどマジエコンヌの支配が進んでいるって事ね、まともに情報が集まれば良いんだけど」

原作の展開から考えると望み薄だな、確かここには・・・

「その間に私はお仕事もらってきますね」

「僕も一緒に行くよ」

「じゃあ私とコンパは情報収集、ネプギアとコウヤはクエストをお願いね」

「はいです」

「了解」

僕たちは手分けをして行動し僕とネプギアはクエストの受注に向かった。

「コウヤさん、ありがとうございます、本当は少し不安で・・・」

「プラネテューヌじゃないからね、僕もちよつと緊張しているんだよ」

僕はネプギアの緊張をほぐす為になんか答えてネプギアは笑顔を向けてくれる、最近になつてネプギアも表情が柔らかくなつたな。

「すみません、クエスト受けに来たんですけど」「すみません、クエスト受けに来たんですけど」

「えっ?」「ん?」「あつ」

ネプギアはギルドカウンターの受付の人に尋ねるともう一人黒髪で服装も黒いネプギアと同じぐらいの歳の少女もクエストを受けに来ていた、ここも原作通りか・・・

「あんたたちも受けに来たの?」

「そうだよ」

「へえ・・・でも大丈夫?、2人ともまだ子供なのに」

「あつあのコウヤさんは大人だよ」

「えっ本当に?」

「一応ね・・・」

良く子供と間違われていたからね、最初プラネテューヌでクエストを受けに来た時はカウンターの人に「幼すぎるからダメ」って言われたっけ。

「どう見たって……」

黒髪の少女は僕を疑うように見るがハッと何かに気付いたように僕を見つめていた。

「どうしたの？」

「あつ別に……」

「……でもあなたも子供なのに大丈夫なの？」

「あたしは超強いしもつと強くなって追いつかなきゃいけないから良いのよ」

「追いつかなきゃ？」

自分の姉であるノワール又の名をブラックハートの事だね、まだネプギアじゃ知る由もないけど。

「それよりアンタたちは何でクエストを？」

「この街の人たちを助けて、少しでも女神のシェアを回復する為だよ」

「見た目通りの優等生な真面目発言ね」

「君だつて似たような理由じゃないの？」

「そつそれはそうだけど……ごめん、同じぐらいの子と話すのが久しぶりだからつい口が軽くなって」

「別に怒つてないよ、私も同じぐらいの子と話すのは初めてかも、周りの人は大人の人ばかりだから」

「そうなんだ・・・あたしはユニって言うの、アンタたちは？」

「私はネプギア」

「僕は緋剣光矢、光矢で良いよ」

「ネプギアにコウヤね・・・せつかくだし一緒にクエストを受けてみない？」

「コウヤさん、良いですか？」

「ああ、ネプギアの好きにすると良いよ」

「ありがとうございます！、ユニちゃん一緒に行こう！」

「ええ・・・あんたたちじゃコウヤがリーダーなの？」

「いやネプギアだけどころいう所は変に律儀だから」

「変ってどういうことですか？コウヤさんく？」

「あついや別に・・・」

僕に詰め寄るネプギアに僕はたじろぐとユニがクスツと笑う。

「仲良いんだ」

「ああ！僕の大切な友達だからね！」

「あつ・・・そうですね・・・」

僕の答えにネプギアは少し落ち込んでいる様子で答えた、僕と友達って言うのが気に入らなかつたのかな？、まあ女神と一応人間のフリをしている僕じゃ立場が違いすぎる

からね、それにネプギアは男性が苦手っぽいみたいだし。
だけどユニはネプギアを見て何故かニヤニヤしていた。

僕たちはその後アイエフたちと合流しラスティション近郊のリピートリゾートを訪
れていた。

「まだ他にも仲間がいたんだ、まああんたたち2人じゃ危なかつしそれで弱そうだし」
「そんな事・・・確かに私は強くないけど」

「そんな事はないよ、ネプギアは充分強いよ、1人であいつもビーストも倒しただろう？」

「ビースト・・・本当にネプギアが倒した事があるの？」

「ええ小型のビーストだけだね」

アイエフの答えにユニは黙ってしまいが何処か焦っているように僕は感じた。

「でも5人もいればすぐにクエストなんて終わるです」

「ああさつさと終わらせて帰ろうか」

そうすれば少しぐらい自由時間もアイエフも設けてくれるだろう、僕はクエストの内容を確認しながら歩いていった。

リンダ（下つ端） side

「アイツ等、もう追いつきやがったのか、付け回されても厄介なだ・・・」

「こうなったらさっさとここで始末した方が良いなあ・・・おっと忘れる所だった」

「あいつを見つけたら画像と一緒にマジック様に報告するんだったな」

なんかあいつに関してにはマジック様はやたら警戒しているが確かに奴だけはそのパーティーの中じゃ何か異質な奴だ、戦った時も仲間を引き立たせる為にワザと攻撃を受けたような・・・まあ気にしてもしょうがねえ仲間にならないって言うならあいつも一緒に始末してやる！

光矢 side

僕たちはリピートリゾートを探索してから数分後クエストのターゲットであるビツクグラブを発見し5人もいたのですねに倒す事が出来た。

「流石に楽勝ね、あつという間に終わったわ」

「うん、でもユニちゃんって本当に強いね」

「ネプギアも中々やるじゃない、まあ私ほどじゃないけど」

「えーそんな事はないよ〜」

同年代同士で談笑しているネプギアとユニを僕やアイエフやコンパは少し離れた所から見ていた。

「ネプギアもあんなに軽口を言えるんだな」

「そうですねすつかり仲良しさんです」

「ネプギアが同じ年ぐらいの子を見るのって初めてじゃない？」

「そういえばそうです、でも楽しそうなによりです」

「ああ・・・」

僕たちは微笑ましく見守っていたが確かこの直後つてリンダが・・・

「なーにダンジョンのど真ん中で談笑してるんだよ！」

「っ！、2人ともすまない！」

いきなり僕たちの背後からリンダが襲い掛かり僕は咄嗟にアイエフとコンパを抱き抱えてジャンプして回避する。

「っちー、気付いてやがったか」

「2人とも大丈夫!？」

「ええ・・・お陰様で」

「助かったですコウちゃん・・・」

2人には怪我がなくて良かった。

「誰よあいつ?」

「犯罪組織マジエコンの下っ端だよ!」

「だから下っ端って呼ぶんじゃない?」

「マジエコンの下っ端・・・いいわネプギアたちが下がつて、あいつは私が倒してあげるわ」

「ううん私も戦う!、大切な人が傷付けられそうになったのに許すことなんて出来ない!」

「ガキがイキがつてんじゃないやねえ、たかがガキ2人に雑魚が群がった所でけちよんけちよんに・・・」

「はああああ!!」

リンダの言葉も聞かずネプギアそしてユニの身体が光だし女神化しパープルシスターとユニの変身した姿ブラックシスターへと変身した。

「ユニって子、女神候補生だったの!」

「運命のいたずらって奴かもね・・・ここは2人に任せよう」

本当に・・・類は友を呼ぶと言うかなんと言うか。

「なっ!?!なんだそりゃ!?!、聞いてねえぞ!」

「行きます!」

リンダが2人の女神候補生の登場に驚いている内にネプギアが一気に間合いを詰める。

「もらつたわ!」

そしてユニもリンダがネプギアに応戦しようとするすると自分の背丈よりも大型なライフル「X・M・B」エクスマルチプラットフォームを構え銃弾を放つ。

「ちくしょう!、女神候補生が2人がかりなんて汚ねえぞ!!、覚えてやがれー!」

リンダは銃弾を避けネプギアの攻撃を避けるが戦力差は明らかでそう吐き捨て逃げていった。

「ネプギア・・・あんた・・・」

「ユニちゃんがラストেশヨンの女神候補生だったんだ、良かった! 私たちユニちゃんを探していたの!」

「本当に丁度良かったわ、これで1つ手間が省けた」

ネプギアとアイエフがそう言うがユニは何処か面白くなさそうな表情だった。

「私たちと一緒に戦ってくれるよね?、お姉ちゃん達を助けてゲームギョウ界を救う為に・・・」

「触らないで!!」

ネプギアは握手を求めるがユニは明らかな拒絶と共にネプギアの手をはたく。

「えっどうし……?」

コンパやアイエフが詰め寄ろうとするが僕がバツと手を広げて制止させる。

「なんで……なんでアンタがここにいるのよ!?、お姉ちゃんじゃなくてなんでアンタなの!?!」

「それは……」

「3年前、アタシは連れて行ってもらえなかつた」

「アタシだったら助けられたかもしれない!、アンタじゃなくアタシだったら!」

「ごめんなさい……確かに私は何も出来なかつた……でも、だからこそ今度はみんなでお姉ちゃんたちを!」

「うるさい!、どうせアンタ達はあのウルトラマンネクサスって言うワケの分からない

巨人を信じている癖に!、もう2度と話しかけないで!!」

「待ってユニちゃん!!」

「ネプギア、今の彼女に何を言っても無駄だよ」

去ってしまうユニをネプギアは追いかけてやろうとするが僕は肩を掴んで止める。

「ユニちゃんは……ネクサス否定派なんですわね」

「他の国はネクサスについては懐疑的だからね、マジエコンヌの影響もあつて殆どが否

定派だから仕方ないけど・・・」

「ユニちゃん・・・」

悲痛な表情でユニが去っていた方向を見る、あの時女神たちを助けられなかった僕にも責任の一端がある、出来れば早く仲直りが出来るように何か良い案があれば良いんだけど・・・

Episode. 11 教祖—神宮寺ケイ—

ユニと別れてから僕たちは1度ラスティションに戻り情報収集もしたが全く収穫はなかった。

「全然見つからないです、ゲームキャラさん」

「これだけ聞いてもダメって事は街の人たちは知らないんじゃないか……」

「こうなったらラスティションの教祖に聞くしかないね」

「そうね……あまり気乗りしないけど」

僕たちは教会を向かおうとするがネプギアはユニとの一件でなんとなく落ち込んでいる様に見えた。

「教会には僕1人で行ってくるから3人は休憩してて」

「えっ？ いやそれは……」

「ネプギアに少しでも気晴らしをさせてやって」

「……うん、分かったわ、後はお願いな」

「お願いするですコウちゃん」

教会に行つてケイと話すぐらい僕1人でも出来るからアイエフとコンパにネプギア

を任せて僕は教会に向かった。

僕は教会に着きケイと話が出来るよう話をつけてもらい今は応接室に案内されケイを待っていた。

するとノツクが聞こえ僕は立ち上がる。

「お待ちせしたね、ようこそラスティションへ、僕がこの国の教祖神宮寺ケイだ」

「こちらこそ突然訪ねたのに話の場を設けてくれてありがとうございます、僕は・・・」
「緋剣光矢君だね、お仲間からはコウヤって呼ばれているプラネテューヌの諜報部員だね」

中性的な顔立ちで初見だと男性か女性か間違えそうなラスティションの教祖である

ケイはかなりの情報通でもあったね既に僕の事まで調べ上げているとは。

「プラネテューヌの教祖イストワールのお気に入りだけど経歴や君に関するデータは全て強固なプロテクトで閲覧不可能、君には前々から会ってみたいと思っていた所だったよ」

「あ・・・別に僕はお気に入りというワケじゃ・・・それに僕の経歴なんて面白いものじゃないですよ？」

僕の経歴ははつきり言つて全てイストワールに偽造してもらつた物で元々転生した僕には経歴なんてないし僕がネクサスだつてバレないようにイストワールはこれでもかと僕のデータはプロテクトしていた。

「確かに見た目だけじゃそんな器には・・・いやもしかしたら・・・すまない、まずは腰を掛けてくれ」

ケイは僕をまじまじと見て何かに気付いた素振りを見せるけど僕に座るように言い僕はその場にあつた椅子に座りケイは机を挟んで向かい合つて椅子に座る。

「それで僕に折り入つて頼み事があると聞いているけど？」

「はい、実は僕たちはゲームキャラの協力を仰ごうと探しています、教祖であるケイさんなら居場所を知っていると伺いました、無論それに見合うだけの対価は支払います」

「なるほど・・・確かに僕はゲームキャラの居場所は知つているけどお金では困つていな

いから君たちには労働力を提供してもらおうか」

「ありがとうございます、してケイさんの依頼内容は？」

「この国ではある物を開発途中でねそれに必要な材料を確保してほしいんだ」

「材料とは？」

「宝玉と結晶と呼ばれる物、諜報部員の君なら知っているね？」

やはりこれも原作通りか、なら在り処も同じだね。

「分かりました、かなり骨が折れそうですが仲間と協力して確保します」

「良い返事だね期待しているよ・・・それともう一つ」

「何ですか？」

「君はネプギアさんと行動を共にしているはずだね、最近ギョウカイ墓場で起きた事とノワールがどうなっているか教えてほしい、君は仕事のパートナーであるアイエフさんと友人であるコンパさんとギョウカイ墓場に向かったはず・・・」

「ケイさん、こちらの情報だけをもらうのはマナー違反ではないですか？、ビジネスは基本ギブ・アンド・テイクですよね？」

「む・・・確かにそうだね、これは失礼した」

「では材料を集めた際に今度は僕の仲間も一緒に伺いますのでその時に情報を交換するという事でどうでしょうか？」

「・・・分かったそうしてもらえると助かる、君とは話がスムーズに流れて非常にやり易い、その気があつたら僕の元で働かないかい？」

「ありがとうございます、旅の中でじっくり考えさせてもらいます」

ケイの珍しいジヨークも交えながら確かにスムーズに話は終わり僕たちは席を立ち握手を交わす。

「君の手、暖かい・・・」

「えっ？」

「いや別に他意はない、良い返事を待っているよ」

ケイがそう答え僕は応接室を出たけどさっきのケイの態度が気になってしまう、この世界の主要キャラってみんな男性嫌いだったりするのかな？

ネプギア side

コウヤさんの御厚意で私はアイエフさんやコンパさんとラステイションの街を散策していた。

「あつあのアイスクリームなんて美味しそうですく買って来ます！」

コンパさんはアイス屋さんを見つけて買いに行く。

「……あまり楽しくない？」

「いやあのお……コウヤさんだけ行かせて私たちがこんな事して良いのでしょうか？」

「確かにね……逆に私たちがじゃなくてコウヤとなら良かった？」

「えっ？、それは……」

もしコウヤさんとこんな風に散策していたら……何故か楽しそうでドキドキしそうな……

「やっぱりコウヤと一緒にの方が楽しそうなのね、顔に出ているわよ」

「そうですか!?!」

いつの間にか顔を出していたみたいで恥ずかしくなるけどアイエフさんは何故か微笑んでいた。

「ネプギアもそうなんだ……」

「も」って事はアイエフさん……」

「私もコウヤといるだけでなんだか楽しくて安心出来て時々口喧嘩なんかもあるけどあいつが頑張っている姿を見ると自分の悩みなんか小さく見えて「絶対に諦めるか！」って私も頑張れるのよね……」

「アイエフさん……やっぱりコウヤさんの事……」

「そうなんです！、アイちゃんはコウちゃんが大好きなんです！」

コンパさんが戻ってきて私とアイエフさんの分のアイスを渡してくれるけど明らかにアイエフさんが動揺していた。

「バツバカな事を言わないでよね!?!、わっわたしは別にあいつの事なんて!?!」

「勿論友達としてですよね?」

「そっそうに決まっているでしょう!?!、先にそれを言いなさいよ……」

アイエフさんは友達としてコウヤさんが好きだと言うけど私はなんとなく違うという事が分かった、その事が私は嬉しくもあるけど何処か落ち着かない様子だった。

『〜♪』

「あっコウヤから!、はいもしもし?」

すると何処かの管理官に似た市長が設定しそうな青い防衛隊の着メロが聞こえるとアイエフさんは一瞬でコウヤさんからと気付き応答する。

「アイエフ、コウヤだけど教祖との話しが終わったから一度落ち合わない？」

「分かったわ、じゃあラスティションの玄関口で落ち合いましょう」

「ガレット！」

コウヤさんのまとも別の防衛隊の返事で電話は終わり私たちはラスティションの玄関口に向かった。

コウヤ side

僕は教祖ケイとの会談を終えてラスティションの玄関口に向かい数分遅れでネプギアたちも到着する、ネプギアやみんなも少しリフレッシュ出来たみたいで少し元気が戻っていた様に見えた。

「教祖さんのお話はとうだったですか？」

「ああその事だけど……」

ケイからの依頼や交換条件などを話した。

「宝玉に結晶ってかなりのレアアイテムじゃない!?、まず市場には出回らない代物よ!!」
「それについてはもうこっちの方で調べはついているんだよね」

「本当ですか？」

「昔一緒に潜入活動した仲間から聞いていたんだ、これがそれぞれドロップするモンス
ターとダンジョンの名前」

「僕はそう言い訳をしてメモ紙をみんなに渡す、本当はゲームをやっているから知って
いるなんて言えるわけないし……」

「へえく仲間ねえく……もしかしてオトメちゃん・ネバランちゃん?」

「ハズレだよ、正解は偶然知り合った人で性別は男性だよ」

「そう……それなら良かった……」

「でも偶然知り合った人と一緒に仕事をしたんですか?」

「ああ別に悪い人じゃなかったしその人もマジエコンヌしか相手にしていなかったから
ね」

何故かアイエフが僕の答えにホツとしていてコンパはいつも通りアイエフを見てク

スクスと笑っていた。

「じゃあ僕は宝玉を取りに行くからネプギアとアイエフとコンパは結晶を頼むね」

「待つてくださいコウヤさん！、ここからだとテコンキャットがいるセプトトリゾー
トが近いです、宝玉はプラネテューヌまで戻らなきゃいけませんので私たちが行きま
す」

「そうです、さつきまで私たちは休ませてもらったので私たちが行くです！」

「それにコウヤ一人で行動するのは危なかつしいし・・・私たちの誰か一人コウヤに付い
た方が良くない？」

参ったなあ・・・宝玉の方だとリンダとの戦闘になつてしかもネプギアは女神化が封
じられた状態で戦わなくちゃいけない、mk2じゃ日本一がRe；Birth2ではR
EDが助けに来るけどなるべくみんなを危険な目に遭わせるわけにいかない。

結晶だとワレチューとのイベントとユニとネプギアとのタイマンだからこちらに
行ってもらわないと・・・

「いや大丈夫だよ、それに早くみんなが結晶を見つけて僕に合流した方が手っ取り早い
よ」

「逆も言えますよ、コウヤさんが先に結晶を見つけて先にラストイションで待っていて
ください」

話は平行線か・・・確かに僕がさっさと結晶を見つけてなんとかユニとネプギアをタイムマシンさせるように仕向けてからネプギアたちに向かえばいいか、いざとなればストンフリーゲルを呼ぶか僕が光になればすぐに駆けつけれる。

「分かった、僕は結晶をみんなは宝玉を頼んだ」

「じゃあ3時間後、またここで合流しましょう」

僕たちは頷き合い僕は結晶探しにみんなは宝玉探しに向かった。

ユニ side

アタシは今ケイに呼び出され教祖の部屋に向かっていた、その時もアタシはネプギアの事が気になっていた。

ネプギアに酷い事を言ってしまった・・・ネプギアだって酷い目に遭ったのに・・・

本当は分かっていたわ、アタシが3年前に連れて行ってもらえなかったのはアタシがまだまだ未熟だったから。

だからこそアタシは頑張つて強くなつた！、お姉ちゃんを助ける為にお姉ちゃんのような立派な女神になる為に！

それにあの銀色の巨人ウルトラマンネクサス!!、巷では「光の勇者」だとか「新たな守護神」とか言われているけどアタシだけはあいつを認めない！、あんな正体も分からない奴が「守護神」なんて所詮あいつはピースト同じ化け物!!

それに一番気に入らないのは「ネクサスは守護女神たちより強い」なんて言われている事!!、あいつが私よりましてお姉ちゃんより強いはずがない!!

もしラストেশョンに現れた時にはピースト共々アタシが蹴散らしてやる!!、絶対に

!!!

「鬼の形相だね、そんなに気に入らない事があつたのかい？」

「ケイ!?!、アンタいつの間にかいたのよ!?!」

「ついさつきさ、客人が帰ったから自分の部屋に戻っていた所だったんだ」

「人を呼びつけておいて・・・」

「時間を無駄には出来ないからね、君にはある事を頼みたいんだ」

「ケイがアタシに?、珍しいわね」

珍しくアタシに頼み事をする事にアタシが不思議そうにするとケイは端末を取り出してアタシの端末に何かのデータを送る。

「端末に送ったモンスターがドロップする結晶を取って来てほしんだ、場所のデータも送ったから」

セプトントリゾートのテコンキャットね、こいつを倒せば良いってことね。

「分かったわ、すぐに終わらしてくるわ」

アタシはそう答えセプトントリゾートに向かう、そんなアタシの後ろ姿をケイがニヤリと笑いながら見送る事を知らずに。

「彼が向かったって事は伏せておこうか・・・」

アタシはケイの眩きも知る由もなかった。

Episode. 12 遭遇—エンカウント—

僕はリピートリゾート近くのダンジョンセプトトリゾートを訪れテコンキヤットというモンスターを探していた。

「ゲームだとすぐに見つけられるけどやっぱりそんなに甘くないか・・・」

ボヤキながらもダンジョンを進んで行くと・・・

『バシユツバシユーン!!』

「銃声?、しかもライフル系だね」

近くから銃声が聞こえ僕は音が聞こえる方向に向かう。

『ドツクン・・・』

「女神の反応・・・まさか」

エボルトラスターが反応を示し誰がいるのか検討が着き取り敢えず向かう。

「アツアンタは!?!」

やはりいたのはユニでありかなり面を食らっている様子だった。

「銃声が聞こえてやってきたら・・・まさか君とはね」

「それはこっちのセリフよ!、アンタこそなんでここにいるのよ!?!」

「色々と野暮用があつてね」

恐らく同じ理由だけど白々しくそう答えユニが疑うように僕を見る。

「先を急ぐからまたね」

「ちよつと待つて、アンター人なの？」

「ああネプギアたちとは別行動なんだ」

ユニは少し悩む素振りを見せて考え込む、僕もどうにかしてユニとネプギアをタイムンをさせるように仕向けないと・・・あのイベントがないと2人が仲直りするキツカケがなさそうだからね。

「アンタ頼りなさそうだし特別にアタシが手伝つてあげるわ」

「良いの？、そつちも用があるんじゃない・・・」

「アタシのは良いのよ、それよりも知り合いがこの先で野垂れ死なれるよりは勘弁してほしいからね」

丁度目的も同じだし一緒に行動した方が良いか。

「分かった、じゃあ宜しくね」

それから僕たちは特に会話のないままダンジョンを歩き何か話を振つた方が良くかと思つていた矢先

「あつ見つけた」

「・・・アンタもあのモンスターを狙っているの?」

「どうやらそうみたいだね」

テコンキヤットを発見し僕はブラストショットを取り出してソードモードに切り替えユニも自前のライフルを構える。

「あのモンスター・・・汚染されてない?」

「ああ・・・間違いないね」

「ただテコンキヤットは汚染されていて凶暴化していた、それを見たユニは照準を定めてトリガーに指を掛ける。」

「待って、テコンキヤットは汚染されて凶暴化しているだけかもしれない」

「ならさっさと倒すしかないでしょう?、そこをどいて!」

「そこに生きているだけの命を奪う事は出来ない、ここは僕に任せてほしい」

「・・・ふんっ」

「なんとかユニを止めて僕はウルトラコンフォートを使いブラストショットの刀身が緑色に輝く。」

「ウルトラコンフォート・・・」

「僕は緑の浄化光線をテコンキヤットに浴びせるとテコンキヤットの体色が黒から元の体色に戻り目つきを戻った。」

「うそっ?・・・本当に元に戻った?」

「グワア?」

隣で見っていたユニが驚きテコンキャットも今まで自分が何をしていたのか分からぬ素振りを見て住処へと戻っていく、その時テコンキャットは僕たちが探していた結晶を落としていく。

「毎度あり」

「アンタもそれが目当てだったの?」

「うん、ケイさんに頼まれてね」

僕は結晶を拾うけど結晶は1つしかなくユニはどうするかと思っただが特に何も言わず顔を背けていた。

そうだ!、この結晶を使つてなんとかユニとネプギアを・・・

「これ、君に預けるよ」

「えっ?、アンタそれが目当てじゃ?」

「でも1つ条件がある、それを吞んでくれたら君に預ける」

「条件つて?」

「これを賭けてネプギアと一度戦つてほしい」

「ネプギアと?、・・・」

「言葉では伝えにくてもぶつかり合って初めて分かる事も伝えられる事もあるよ」

「アンタ・・・分かった、アンタの顔を立って引き受けてあげる」

なんとも姉譲りのツンデレな返したが僕は結晶をユニに渡し出口へと歩いていく。

「アンタ一体何者なの？」

「何者って見たまんまだよ」

「さっきの変な技もだけど最初にアンタを見た時になんとなくお姉ちゃんに似てるって思えたの・・・」

「ノワ・・・ブラックハートと？、僕はそんなツンデレキャラじゃないけど」

「雰囲気はなんとなく似ているのよ、すごく暖かくても強さを秘めているような・・・」

分かる人には分かるという事か？、女神の知り合いはある程度僕の力を察知する事が出来るのか？

「どうしたの？、難しい顔をして」

「あついや、何でもないよ」

「ふくん・・・まあいいけどあんまり似合わないわよそんな顔、アンタはニコニコしていればいいのよ」

「えっなんで？、人を脳天気みたいに言わないでよ」

「実際にそうでしょう？、ネプギアたちという時もボケっつとしてるし、でも・・・時々

「すごく優しくして辛そうな顔もする」

「……そうかな？、見間違いないじゃない？」

「……アンタが何を抱えているか知らないけど少しは骨休めでもしたらどう？」

「その時は是非付き合ってほしいな」

「気が向いたらね」

「……ありがとう、心配してくれて」

「べつ別に心配とか!?!そういう事じゃないんだから!?!、アンタ危なっかしくて見ていられなかったから仕方なく……」

「変わらないのツンデレな返しに僕はニヤけてしまうが……」

『ドクン!』

「エボルトラスターが危険を知らせ後ろを振り向くと暗黒の光弾を僕たちに向かって飛んでくる！」

「伏せろ!!」

「えっ?、きゃっ!!」

「僕は慌ててユニの頭を抱えて伏せて光弾を避ける、だが光弾が次々と襲いかかってくる！」

「走るぞ!!」

「ちよつとなんなのよ!」

僕はユニの愚痴も聞かずユニを抱えながら走って光弾を避けて壁を背に隠れる。

「どつからの攻撃なの!」

「分からない・・・でも」

エボルトラスターが告げるといふ事はビーストいやもしかしたら・・・

「そんなワケの分からない物に怯えてられないわ!」

「ちよつとユニ!!」

突然ユニが飛び出してライフルを構える、だけど姿の見えない敵をどう撃つつもりなんだ!?

「そんな弱つちい光弾なんて撃ち抜いてあげるわ!」

「止めるんだ!!、もし通用しなかったら!」

「私を甘く見ないで!!」

僕の言い方が勘に触ったのかユニは激昂するが何処か焦っているようでユニに向かって光弾が飛んでくるとユニはその光弾に照準を合わせトリガーを引く。

「うそっ!?!、なんで!」

ライフルの銃弾が光弾に命中するが光弾に触れた瞬間に銃弾が消滅してしまい光弾を進攻を阻めない!

ユニはその事実を受け入れられないのか何発も撃つが全く意を返さず光弾がユニに直撃しそうになる！

「もう・・・ダメ!!」

ユニは諦めてしまい手で顔を覆い目を瞑る、そうはさせるか!!

僕はマツハムーブを使い一気にユニの目の前に立ちエボルトラスターを突き出しサークルシールドを取り出して光弾を間一髪で防いだ。

「えっ?、アンタ・・・」

「最後まで希望を捨てるな!」

ユニ side

全くあの光弾にアタシの銃撃が効かずもうダメだと思った時、急にコウヤが私の前に立って何か水面に生まれる波紋のようなシールドでアタシを守った。

「なんでそこで諦める!?!、君にはどうしても追いつきたい人がいるだろう!!」

「なんでアンタがそれを!」

「あの光弾が僕がなんとかする!、君は早く逃げろ!!」

「何を言っているのよ!、アタシが手も足も出ないのにアンタがどうにかできる訳が・・・」

女神候補生であるアタシでも無理なのにただの人間であるコイツが出来る訳が。

「いいから早く逃げろ!!」

でもその時のコイツは鬼気迫る勢いでアタシが言葉を失ってしまい無言で頷いてダンジョンの出口を目指す。

アタシが逃げている時も光弾は降りかかって来るけどコウヤの持っていたあの銃で光弾を相殺してしまいアタシは驚いていた。

「何をしている!!、早く逃げろ!!」

思わず棒立ちになってしまったアタシにまたコウヤは叫びアタシは我に返り壁まで逃げると少し頭を出して様子を見る。

コウヤは激しさを増した光弾の雨の中を走り抜け当たりそうになった光弾をローリングを回避しじーつと空を見渡す。

すると何か気付いたように一点を凝視しそこから光弾が降ってくるとコウヤは銃をハンドガンタイプからショットガンのような形に変形させ光弾を最小限の動きで殆ど

ギリギリの所でポンプアクションをして光弾が降ってきた位置に波動弾を撃ち込む。

『パリーーン!』

すると波動弾が何か直撃しまるでガラスが割れたように破片が飛び散った、アタシは思わずガッツポーズをしコウヤの元に向かおうとするけどコウヤはまだ何かがいるのか鋭い視線で辺りを見回す。

アタシは辺りを見るけど人影どころかモンスター影すら見えず何処か不気味に感じる、コウヤはもしかして未知なる危険を察知していたの？

コウヤは何かに気付き懐から何か取り出そうとしたけどアタシを見て取り出すのを躊躇していた、その後コウヤは「取り逃がしてしまった」と言っているような表情を浮かべ銃を締めいアタシの元に歩み寄る。

「ゴメンきつい言い方しちゃって・・・ケガはない?」

「ええ・・・何の問題もないわ、それにしてもさっきの光弾はなんだったの?」

アタシの問いにコウヤはまた難しい顔をして何も答えなかった、検討はついているけど答えられないそんな風にアタシは見えた。

「それにしてもアンタって変な技を使うわよね、さっきのシールドだったりモンスターの浄化だったり何処で憶えたの?」

「僕に再び生きる力を与えてくれた人に教わったんだ」

「ふくん……」

言っている意味はサツパリだけど大切な人から教えてもらつたつて事は分かつた、アタシたちは今度こそ出口へと帰るけど。

「ちよつと良い?」

「どうしたの?」

「……いや何でもないわ」

アタシはもう一度コウヤが何者か聞きたかつたけど何故か怖くなつて聞けなかつた、でも後にアタシはその時にコウヤに聞けなかつた事を後悔する事になる、ここで聞いて真実を知っていればあんな事はしなかつたはずなのに……

その時、帰ろうとするアタシたちを後ろからフードを深く被りローブを羽織つた者がニヤリと笑みを浮かべてこう呟いていた。

「これはほんの挨拶代わりだ、ウルトラマンネクサス」

Episode. 13 決闘—デュエル—

僕と偶然に出会ったユニはラスティションに帰り僕はネプギアたちに連絡しようとしたがその矢先ネプギアたちのパーティーから連絡が入る。

「もしもし、コウヤさんですか？」

「ネプギア？、何かあったの？」

「いえ、何もなく途中喋るネズミさんに会ったんですけど無事に宝玉を手に入れました、その道中で私たちの度に加わってくれる方たちがいるのでラスティションの玄関口で待つていてくれませんか？」

「分かった、実は僕も君に会わせたい人がいる、気長に待つているよ」

そう答え僕は電話を切ると聞こえていたのかユニが何処となく緊張していて落ち着きがなかった。

「ネプギアたちあと10分ぐらいで到着すると思うよ」

「そう・・・ならアタシは少し街をぶらついてくるわ」

「分かった、いつてらっしゃい」

ユニは気を紛らす為に街に入っていき僕はネプギアたちを待ち近くのベンチに腰掛

ける。

ただ待つつていうのも結構暇だなんて考えていると不意にネプギアたちがウインドウショッピングをしていた店が目に入る。

これから色んな苦難や避けられない戦いがみんなを待っているんだ、少しぐらい良い思いをしても罰はないよな。

僕は自分の財布と相談しみんなが気に入っていた物を一通り買いネプギアに関してはパーツを組み立てて何か作る事なんて僕には無理だから少し工夫をした、そうだ！どうせならユニにも・・・

それから10数分後、僕は買った物がある場所に預け玄関口で待っているとネプギアたち3人と新たに仲間に加わってくれる2人が到着する、なるほどねだから「方たち」って言ったのか。

「コウちゃん、待たせてしまって申し訳ないです」

「いや少し寛げたから良いぐらいだよ、それでこちらの方たちは？」

実はペンギンのようなキャラのリユックを背負う正義のヒーローと世界中で嫁探しをする少女（どっちも少女だけど）は良く知っているけど。

「アタシはゲームギョウウ界の2人目の正義のヒーロー!!、日本一よ！」

「アタシはREDちゃん、女神様たちと候補生たちを嫁にする為に旅に同行させてもらうよ！」

「僕は緋剣光矢、コウヤでいいよ」

1 通り自己紹介が終わると日本一とREDは僕をまじまじと見る。

「ふくん・・・なんか3人から聞いていたより全然弱そうって言うよりかは本当にコウヤって戦ったりするの?、全然そんな風には見えないけど」

「コウヤは確かにそんな風には見えないけど腹を括ったら物凄く強いわよ」

「でもアタシは気に入ったよ!、なんかお日様みたいに暖かそうで気持ち良さそうだよ!」

「そうかな?、アタシ的には太陽のように熱くてキラキラと輝いているって感じかな」

なんか妙にREDには気に入られたみたいで日本一もそこまで悪い評価ではなかった。僕がホッとする。

「決めた!、コウヤもREDちゃんの婿にする!」

「いやコウヤは3人目の正義のヒーローにする為にアタシが鍛えるの!」

REDは僕の右手を日本一は僕の左手を引つ張りはつきり言つて痛いがビーストの攻撃を受けるよりは全然痛くなかったので耐えられるけどこの状況をどうにかしなくては・・・コンパは笑つて見ていたがアイエフは頭から蒸気を出しそうな程顔を真っ赤にして怒っている? ようでネプギアもすごく動揺していた。

「コウヤも」つて誰か他にも婿候補がいるの?、日本一も3人目が僕で2人目が自分自身だけど1人目は誰なの?」

「最初の婿候補は・・・」 「1人目の正義のヒーローは・・・」

何故か息が揃う2人で僕はその隙に2人の腕を解く。

「ウルトラマンネクサス!!、えっ?」

同時に言つた2人の答えに僕は言葉を失う。

「正義のヒーローは分かりませんが、なんでREDさんは婿候補にしたんですか?」

「だつてウルトラマンネクサスつてすごく無理しているような気がしたんだ、わざと攻撃を受けて街を守る姿がすごく痛々しくて守つてあげたくなくなっちゃうんだよな」

「だからこそウルトラマンネクサスはヒーローなのよ!、どんな強敵が相手でも愛と正義の名の元に懸命に戦い抜く!、これこそがヒーローなのよ!」

2人が持論を語っていたが僕の頭には全く入つてこなかった。

「ネットエクサスは100歩譲って良いとしても!、コウヤは婿候補になんかさせないんだからっ!!」

「えー別に良いじゃん!、コウヤもREDちゃんに言い寄られて嬉しいでしょう♪」

「あ・・・それは悪い気はしないけど・・・」

今度は僕の腕に抱きついてくるREDだけでもまあ男としては確かに悪い気はしないがアイエフが少し涙目の膨れっ面で僕とREDを睨んでいるのを見ると少し罪悪感があつた。

「そんなに睨むならアイちゃんも抱きついたらどうですか?」

「バツバカ!、そんな事出来るわけじゃないでしょう!」

確かにアイエフがそんな事をするなんて想像できないしまず僕に抱きつくなんて有り得ない、ネプギアは何も言わなかったがREDを見て何故か羨ましそうにしていた。

「RED・日本一、それにみんなももうそろそろ僕が会わせたい人が来る」

「そういえば電話でも言っていましたね、どなたですか?」

「それは・・・」

『ドクン・・・』

みんなに答えようとするとうとエボルトラスターが女神の反応を捉え僕は背後を振り返るとユニがこちらに歩いてきた。

「ユニちゃん!？」

「ネプギア……」

「ネプギア……結晶を賭けてユニと戦ってほしい」

「えっそんな!?!、ユニちゃんとですか!?!」

ネプギアが僕の提案に驚くと同時にアイエフやコンパも僕が病気にでも患った様子で見える。

「コウちゃんがそんな事を言い出すなんて……」

「コウヤ……あんた熱でもあるんじゃないの?」

「僕は普通だよ、ユニ準備は良い?」

「とつくの昔に出来ているわ!、ネプギア!アタシと戦いなさい!」

「でも……私はユニちゃんと戦うなんて……」

「そんな弱腰でこの先乗り切れると思ってるの?」

「……!」

「そんなんでマジエココンヌやビーストに勝てる程甘くはないわ!、それどころかアンタが信じているウルトラマンネクサスに裏切られてペしゅんこにされるわよ……アイツも所詮ビースト同じなんだから」

「っ!!、分かった……ユニちゃん良いよ、でも私が勝ったらさっきの言葉は取り消して

！」

「っ?、さっきの?」

「ネクサスはビーストなんかじゃない!!、私たちと同じこのゲームギョウ界を守ろうとする仲間なの!!」

「・・・いいわよ、アタシに勝てたらね」

ユニのある一言でネプギアは珍しく堪忍袋の緒がキレて怒ってしまいがみ合いながら決闘が始まろうとしていた。

ネプギア side

私たちは場所をラストレイション郊外の荒野に移し私とユニちゃんは睨み合い少し離れた位置にはコウヤさんたちが見守っていた。

「いくわよネプギア!、やるからには手加減なんてしないから!」

「うん私は絶対に負けるわけにはいかない！」

「良いね！対一の真剣勝負♪」

「でもあのユニって女神候補生、ネクススはビーストじゃなくてヒーローだから是非ネプギアに勝ってほしいわ！」

「そうね……」

「ギアちゃんもユニちゃんも応援してあげたいですけど……」

「コウヤさんが無言なのが気になるけど風が吹き晒す荒野に一瞬風が止んだと同時に！」

「アクセス！」「プロセスサユニット装着！」

私とユニちゃんは同時に変身しその直後私は低空で飛行しながら一気にユニちゃんに迫る！

「だけどユニちゃんも巨大なライフルを構えて間合いに入らせないように撃つ。」

「私は何発は躲しながら迫っていくけどある！発は避けきれないと思いき急停止した直後に一気に浮上し躲した。」

私もM・P・B・Lマルチフルヒームランチャーを構えて連射する。

「だけど流石にユニちゃんの方が銃の扱いは上手で避けながらも私に照準を合わせて撃ってくる！」

「フッー、銃でアタシが負けるわけがないわ！」

確かに・・・危険だけど近づいて接近戦に持ち込むしかない！

再び私は一気にスピードを上げてユニちゃんが放つ弾幕を掻い潜りながら距離を縮めていく。

「・・・もらった！、エクスマルチブラスター M・B!!」

「っ!？」

ユニちゃんに回避行動を読まれユニちゃんは極太のビーム砲を放ち私に命中し大きな爆発が起きた！

「!!」

その時アイエフさんたちは負けたと思いき驚いていたけどコウヤさんだけは真剣な表情を崩さず見ていた。

「楽勝ね・・・っ!？」

「はあああああ!!」

だけど私も寸前でM・P・B・Lのビーム砲を放ち相殺させ爆発の衝撃で態勢を崩すけどすぐに持ち直し勝利の余韻に浸っていたユニちゃんの間合いに入る。

私の武器で一振りしユニちゃんはライフルを鈍器のように振るって交差しあい火花を散らす。

今度はユニちゃんが回し蹴りを繰り出し私も回し蹴りをして互いに繰り出した足がぶつかり合つて小さい衝撃波を生み出す。

そして私はユニちゃんに3連撃を浴びせユニちゃんは武器を盾代わりにして防いで足払いをする。

私は簡単に避けるけどユニちゃんは即座に構えて0距離で撃とうとする!

私は咄嗟に武器で自分の身を守るけどあまりにも威力に吹っ飛ばされてしまうけどなんとか踏みとどまる!

するとX・M・Bを構え銃身にエネルギーを溜めて必殺の一撃を放とうする!、なら私もM・P・B・Lを構えて銃身にエネルギーを集中させる!

「エクスマルチ・・・」

「マルチプルビーム・・・」

互いにエネルギーを溜めてほぼ同時に最大になると・・・

「ブラスターーー!!!」「ランチャーーーー!!!」

必殺の一撃を放ち私とユニちゃんがいる間の中心ビームがぶつかり合い互いに押し返そうと競り合う!

「はあああああああ!!!」

押し負けそうになるけど私は負けるわけにはいかない!、その思いでなんとか押し返

し競り合ったまま巨大な爆発が起きる！

「なんて威力なの!？」

「吹き飛ばされそうです〜」

「嫁同士がぶつかり合うところなるのか〜」

あまりにも衝撃にアイエフさんたちがそう言い合うもやつぱりコウヤさんは不気味なぐらい何も言わずただ見守っていた。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

流石にパワー全開の必殺技を繰り出したユニちゃんは息が上がっていたけど．．．

「せえええええい!!」

「しまっ!？」

私は爆煙の中を突っ切りユニちゃんが迫りユニちゃんが咄嗟に武器を構える直前私はユニちゃんの武器を真上に弾きユニちゃんの手元から飛んでいくと私はユニちゃんの顔面に武器を突き立てる。

「はあ．．．はあ．．．私の勝ちだよ」

「．．．そのようね」

ユニちゃんは変身を解き私も変身を解いた。

正直まだユニちゃんに余力があつて私の攻撃を察知して防御されていたらもう私に

は余力はなかった。

その時コウヤさんは飛んでいき地面に突き刺さったユニちゃんのライフルを掴みとり心配そうにユニちゃんを見ていた。

「言つとくけど今回はワザと負けてあげたのよ！、次はないんだからね！」

そう言つてユニちゃんは結晶を私に投げ渡して帰つていく。

「ギアちゃん・・・あれで良かったですか？」

「分かりません、でも・・・今はこれで・・・」

アイエフさんも無言で頷き私たちもケイさんの元に向かいますが。

「ごめん、僕はユニちゃんに銃を返してくる」

「あつ・・・じゃあコウヤはさっきのベンチで待つて、今度は私たちが行つてくるから」

「ありがとう！、じゃあそっちは頼む！」

コウヤさんはそう答えユニちゃんが向かった方向に走つていった。

「いいの？、コウヤがいなくても？」

「あの子プライド高そうだから、同じ女神候補生のネプギアに負けたのは結構シヨックなんじゃないかな？」

「なるほどくそれでお日様のようなコウヤが行けばたちまち嫁の心も治るってわけね

♪」

確かに何処かユニちゃん無理しているような感じがした・・・それにコウヤさんなら私が悩んでいた時みたいにユニちゃんを励ませれるような気がした。

Episode. 14 激励—ステイミュラス—

ユニサイド

「やっぱりネプギアは強い、1人でもアタシより・・・仲間にも囲まれている・・・」

正直アタシはネプギアに勝てるつもりでいたけどネプギアは諦めず何度も立ち向かいそしてアタシは最後まで耐え切れず負けた、ネプギアは実力では拮抗していたけどその前にアタシより「心」が強かった・・・

「それに比べてアタシは・・・」

ネプギアにはコウヤを初め沢山の支えてくれる仲間がいる・・・でもアタシには・・・

「そんな事ないよ、ここにいるだろう？」「ユニの仲間」が

「えっ?・・・」

声が聞こえ私は振り向くとそこにはコウヤがアタシに歩み寄りアタシのライフルを手渡す。

「・・・さっきの独り言、聞こえていたの?」

「ああこれでも結構五感は鋭い方なんだ」

ニコニコしながら答えるコウヤにアタシは俯く。

「・・・アンタはネプギアたちの仲間でしょう・・・」

「確かにね、でもユニの仲間・・・と言うか友達かな？」

「えっ・・・友達？」

アタシは意外な単語に顔を上げて尋ねコウヤは微笑みながら頷く。

「ネプギアだつてみんなだつてそうだよ、一時でも一緒に旅をしたんだ、その時点でユニはネプギアたちの仲間であり友なんだ」

「そんなわけ・・・」

「だからユニは決して1人じゃない、1人になれるわけがない、さつき戦ったネプギアとも戦いを通して心と心は絆の光で繋がっているんだ」

「絆の光？」

「そう・・・光は心と心を繋げる絆だからね、今はギョウカイ墓場にいるユニのお姉さんとも絆で繋がっているはずだ」

「・・・絆」

アタシは胸に手を当ててそう唱えると確かにそんな感じがしてきた。

「さつきの戦いのアドバイスだけど、ユニに足りなかったのは持久力と判断能力」

「えっ・・・」

「ガンナーとしては仕方ないかもしれないけど動き回っていたネプギアより明らかに持

久力が低かった、それとすぐに倒したと過信してネプギアの不意打ちに対応しきれなかった、特に戦闘では状況判断は悪い方へと考えるべきだよ」

「うっ……」

尤もなアドバースにアタシは……悔しくて涙が出そうになる。

「あともう一つ……あまり悔しい時には悔しいって泣きたい時には泣いて発散する事、溜めていると自分を腐らせちゃうよ」

アタシは自分の心を見透かされたようでそっぽを向くけど全てを包むような優しい笑顔にアタシの心の何かが崩壊した。

「うわぁ〜ん!!」

「おっと……時には大きな声を出して泣く事も必要だよ」

アタシはコウヤを押し倒してコウヤの胸元で泣き叫んでいてそんなアタシをコウヤは優しく頭を撫でていた。

光矢 side

僕はユニを励ました後ラストেশョンに帰ってきたが僕とユニは5mぐらい空けて歩き僕の右頬は張り手を食らったように大きく腫れていて僕は右頬を摩りながら歩きユニはそつぽを向き響めつ面で歩いてた。

「じゃあ僕はここでネプギアたちを待たなきゃいけないから・・・」
「ふんっ!」

取り付く島もなくてがつくりと僕は項垂れるがユニは何か見つけ僕もその視線を先を見るとクレープの出店があった。

「あつ待つててすぐに買ってくるから」

少しは機嫌が良くなると思ひ僕は出店に向かう。

「いつらしゃい、何にします?」

「じゃあ・・・このストロベリーと・・・ブラックベリーを」

「かしこまりました、少々お持ちください」

一応無難な物を選んでもう一度ユニを見るとチラッとこちらを見てすぐにそつぽを

向いた。

「はいお待ちどうぞさまです、彼女のご機嫌取りですか？、お兄さんも苦勞してますね」

「あついえ彼女じゃなくて友達なんです、ちよつと怒らしてしまつて・・・」

「そうなんですか？、いつかはそうなると良いですね」

店員さんと他愛のない話しをしながら僕はクレジットを払いクレープを受け取る。

その時ユニは最初店員さんの言葉で赤面して俯くけど僕の一言でバツと顔を上げて何故か残念そうにしていた。

「お待たせ・・・あれ？、もしかして両方とも嫌いだった？」

「あついや別に・・・」

何故かしおらしく答えるユニの真意に僕もそしてユニ自身もまだ氣付く事ができず僕は困惑していた。

「じゃえくと・・・どつちを食べる？」

「・・・どつち」

ユニはストロベリーの方を指差し僕はユニに手渡し僕はベンチを食べ始めるけどユニもベンチに座るが僕は端に座つたのに対しユニはほんの数10cmしか離れていない距離で食べる。

「アンタ・・・コウヤは彼女とかいるの?」

「っ!?、なっなんでそんな事を聞くの?」

「だって・・・さつきさつきっぱりと否定したじゃない」

「さつきの店員さんとのやり取りを聞こえていたのか・・・でもユニがそんな事を気にするんだ?」

「・・・別にいいよ」

「そう・・・」

「転生前は彼女を作る暇もなくバイトに勉強に明け暮れていたしゲームギョウ界でも・・・ウルトラマンとしてレベル上げと諜報員として働いてそんな暇がなく我ながら花のない人生だなぁと思う、まあでも今はアイエフとコンパと知り合っただけだからにネプギアやREDや日本一それにケイやユニたち美少女たちと知り合っただけだから今はまだマシかな。」

「作ろうとは・・・思わないの?」

「今は旅をしているからそんな気になれないし・・・その人を幸せにする自信がないんだ」
「ウルトラマンとして戦いの宿命を背負っている僕には誰かを守る事は出来ても到底幸せにする事なんて出来るとは思えなかった。」

「・・・コウヤのクレープ、一口食べさせてもらっても良い?」

「えっ?、うんいいけど……」

僕は軽く驚きながらもまだ口にしていない部分をユニに向ける。

「むっ……パクッ!」

「えっ?、なんで?」

ユニはわざわざ僕が口にした部分を食べて今度はユニが自分のクレープを僕に向ける。

「コウヤも食べなさい」

「ああ……じゃあ一口……」

お返しと言わんばかりにグイッと向けて僕は食べようとし僕は渋々まだユニが口にしていない部分を食べ僕はラストイション国民の皆さんに心の中で謝罪する。

「美味しい?」

「ああ……とても……」

僕はオドオドしながら答える、こんな事実をラストイション国民の皆さんに知られたら間違いなく血祭りに上げられるだろうな……

だけどユニは気にせず食べ始め僕はやっぱり気になるけど埒が明かないので食べ進める。

「コウヤなら出来るわよ……誰かを幸せにするぐらい……アタシだってコウヤに勇気

を貰ったんだから」

「ユニ・・・ありがとう」

ユニの励ましに僕は礼を言うと言ったようにそっぽを向くけど軽く頷いた。

僕はユニと別れて数分後、ネプギアたちと合流しラスティションのゲームキャラがいるセブテントリゾートの奥へと進んでいた。

「そう・・・あの子元気になったみたいだね」

「流石は私の婿だね！」

「うんうん・・・ヒーローはただ強いだけじゃなくて誰かに勇気を与える存在じゃないからね！」

「別に普通に話してただだよ」

「でもあんな気難しい子をよく励ませれたらわね」

「コウちゃんの特技の1つです♪」

僕はさっきのユニとの出来事の一部を言いみんなが口々に答えるとネプギアは嬉しそうに微笑みながら頷き僕も微笑みながら頷く。

「そういえばラストেশヨンの教祖、なんかコウヤがいなかった事を残念そうにしていたわね」

「えっ嘘でしょう?」

「本当ですよ、アイエフさんが答えた時に落ち込んでるように見えました」

あのケイが?、う〜ん想像できないなあ・・・ヘッドハンティングが失敗したと思っただのか?

「あつもうそろそろです」

「分かった」

ネプギアがゲームキャラにいる地点に到着する。

「どこにいらつしやるんでしょうか?」

「多分見た目はプラネテューヌと変わりないはずだと思う」

「あつ見つけた!、きつとあれじゃない?」

僕たちはゲームキャラを探していると日本一が黒いディスクを発見する。

「あなたはラストেশヨンのゲームキャラですか?」

「如何にも・・・お前はプラネテューヌの女神、いや女神候補生か」

日本一が見つけたのは正解であり僕たちは一先ず安心する。

「今回は起きてるわね」

「やはりそれだけラステイションのシエアが落ちているんだろうな・・・」

「っ！、お前は!?!・・・成る程、希望の光は既に舞い降りていたか」

僕とアイエフが話しているとゲームキャラが何か気付いたようにそう言い僕は焦つてしまふけどみんなは意味が理解できずにしていた、正直ゲームキャラが僕を見て言ったように感じたからバレたかと思つた。

「お願いします！、私たちと一緒に来てください！」

「唐突だな、訳も分からず同行など出来るはずもない」

「女神たちがギョウカイ墓場に捕まっています！、助ける為にも力を貸してほしいんです！」

「・・・やはり女神は余所の地に捕らわれていたのか・・・ならば尚の事ここを離れる訳にはいかない」

「やつぱり教祖さんが言っていたように一筋縄じゃいかないですね」

「ああ・・・それだけ重要な役目を背負っているから仕方ない」

やはり交渉は難航してしまい僕たちは悩んでしまう。

「私の使命は女神の身に何かが起きた時、代わりにこの地を守護する事、この地を離れて

しまうと守れる者がいなくなってしまう」

「希望の光はあくまで希望．．．我らが使命を全うせぬ限り輝きはしない．．．私がこの地を離れるという事は希望の光に頼る事になり古の女神の約束を破る事になる．．．私はそれだけは守らなければいけない」

「それじゃ女神が捕まったままでいいの？」

「私の使命はあくまで女神の代理、女神を助ける事ではない」

「そんな．．．」

ゲームキャラの決意は固く僕たちはお手上げ寸前だった。

ワレチュー side

「むう．．．一体どこにいるっチュ．．．」

吾輩は今ゲームキャラを探してセプトリゾットにいるっチュ、だが結構な時間を探しているっチュだけど全然見つからないっチュ。

「プラネテューヌのダンジョンで会ってから愛しのコンパちゃんとも会えないっチュ、恥ずかしくなって逃げたのが大失敗」

マジ天使なコンパちゃんとの出会いを夢見ながら探していると薄らとコンパちゃんの姿が見えたっチュ！

「遂にコンパちゃんの幻影まで・・・っチュ!?!、幻影じゃないっチュ!」

現実だと気付いた吾輩はコンパちゃん（とその他）に駆け寄るっチュ！

「あれ?、この間のネズミさん?」

「覚えててくれたっチュ?、感激っチュ!」

マジ泣きそうっチュ、なんか後ろにいるダンジョンで見かけなかった男が何やら思い出したかのように不味そうな表情をしていたっチュけどお前なんかには興味ないっチュ!

「今大事な話しているからアツチに行つてよ」

「バカな事を言うなっチュ!、コンパちゃんより大事な事なんて・・・あああああ!」

なんか龍を巻きつけた生意気な小娘が言っていたっチュけど奴らの後ろにラストイシヨンのゲームキャラを見つけたっチュ!

「ネズミさんもゲームキャラさんをご存知なんですか?」

「なんとという運命の巡り合わせっチュ!、コンパちゃんとゲームキャラを同時に見つけ

るなんて・・・そうだ！コンパちゃんも一緒にあいつをやつつけるっチュー！」

「やつつけるって・・・」

「このネズミつてもしかして!?!」

「ゲームキャラを倒せばご褒美が貰えるっチュー！、コンパちゃんも特別待遇でマジエコンヌに入れるっチュー！」

何を隠そう吾輩はマジエコンヌをマスコットっチュー！、何やらまた男は深い溜め息をついたっチュウけど一々なんだっチュウか男は？

「ダメです！、この方を倒したらゲームギョウ界は・・・」

「この世界がまた一步マジエコンヌの物に近づくっチュウ！」

「女神もいない、女神を信じる者もいないゲームギョウ界なんてあつという間に我々の物っチュウ！」

「後の障害はウルトラマンネクサスだけっチュウけど、奴はどうせ奴を信用していない人間たちの手で殺されるっチュウ、人間も女神も自分より大きな力を持つウルトラマンなんて信じずに絶対に殺そうとするっチュウ、自分たちを守ってくる存在なのに本当にバカな連中っチュウ」

「そんな!?!」

「まさか？」

それにいざとなれば四天王の方々もいるっチュウからウルトラマンネクサスなんて恐るるに足りないっチュウ。

「だからコンパちゃんも今の内に・・・」

「やめてください!、私は女神さんたちを助ける為に旅をしてるです!、ネズミさん、あなたは私の敵です!」

「ガーン!・・・敵ってことは嫌いっチュウか?」

「大嫌いです!、世界をこんな風にしたマジエコンヌなんて大嫌いです!!」

「それに私には・・・これと決めた人がいます!!」

「大嫌い!、しかもコンパちゃんには好きな人がいるっチュウか!、うわああああ!!」

吾輩はあまりのシヨックに暴れ始め、その時男が隣にいたロングコートの人にニヤニヤしながら小突いてコンパちゃんがその内のどちらか1人を見ていたっチュウ・・・

「もうダメっチュウ・・・恋が破れたのなら仕事に生きるしかないっチュウ、全員まとめて死ぬっチュウ!!」

吾輩は覚悟を決め割れたディスクを取り出してバラ撒き4体のモンスターを召喚したっチュウ!

「やはりこうなるのか・・・ネプギア、説得は後回しでゲームキャラを護衛を頼む!」

「え?、うわっ!?!、いつの間に敵が来ていたんですか!?!」

「アンタは本当に集中すると周りが見えなくなるわね・・・」

「アイエフ・コンパもゲームキャラを護衛を頼む、僕と日本一とREDで迎え撃つ」

「えっ？でも・・・」

「ネプギアはユニとの決闘でかなり体力を消耗している、それにいざ守りがいないとプレネテューヌの時と同じ事になり兼ねない」

「そうね・・・分かったわ、ならお願い」

向こうの話が終わり吾輩たちと男2人？と生意気な小娘が相まみえる。

「婿との初めての共同戦闘だね♪」

「コウヤ！、足引っ張らないでよ！」

「ああ善処するよ日本一・RED」

「やれっチュ!!」

「ガオオオオオオ!!」

「いくぞ!!」

Episode. 15 乱戦—コンフューズ—

ワレチューが召喚したモンスターはフェンリル3体とワレチュー自身を含めて合計4体か・・・ゲームより多いけどその分僕が負担すれば良い話だ！

「はあああああ!!」

「いづくよお〜！」

「くらえ〜！」

日本一はプリニーガンという一応銃だけどビームサーベルっぽい物にもなる武器でフェンリルに切り掛りREDはけん玉やヨーヨーというおもちゃセットで戦い意外な程ダメージを与えていた、僕もプラスチックショットソードモードで切り裂きサマーソルトキックを浴びせる。

「っチュー！」

「っ！」

その時ワレチューが僕に襲い掛かり毒を帯びた爪で襲い掛かり僕は後方にジャンプして避ける。

「逃がさないっチュー！」

「逃げるつもりはない！」

ワレチューは尚も僕に攻撃を仕掛けソードモードで弾いたり受け止め一瞬動きが鈍った所で大きく横に切りワレチューは難なく避けるが追撃に僕はガンモードに切り替え光弾を放ちこれも避けるが僕はもう一丁空いている右手にプラスチックを呼び出し光弾を放つと対応しきれなかったワレチューに命中し気絶する。

「中々やるじゃないコウヤ！」

「そんな事は・・・っ!!、日本一後ろだ！」

気を取られていた日本一に目掛けてフェンリルが鋭い爪を振り下ろそうとし僕は咄嗟にソードモードに切り替えブーメランのように投げ付ける。

一本はフェンリルの爪を削ぎ落とすもう一本はフェンリル自身を切り裂く、そして僕は二本をウルトラマンマックスやゼロなどM78系統ウルトラマンが使うウルトラ念力で操って切り裂いていき最後は2本がフェンリルの身体を貫通して一体のフェンリルは消滅する。

「凄い・・・」

「日本一！、まだ敵はいるんだから気を付けるんだ！」

「わっ分かってるよ！」

「もうく2人だけイチャついちゃってく」

なんだかR E Dが拗ねてていたがもう一体のフェンリルの頭部にR F Dのけん玉が命中しフラフラしていると日本一がプリニーガンに切り裂きトドメを刺した。

最後の一体は僕に襲い掛かるが僕はソードモードで弾き腹の下に潜り込んで大きく上空に蹴り上げガンモードに切り替え上空を舞うフェンリルに光弾を連射しフェンリルは花火のように消滅する。

「つチュー・・・よくもやってくれたつチュね！、あれモンスターたちは？」

「全員片付けちゃったよ〜」

「まだやるって言うなら私が相手になるよ！」

「ここで逃げた方が良いと思うよ」

起き上がったワレチューに僕たちは武器を向け退散するように忠告する。

「・・・恋にも破れて仕事も失敗なんて今日はなんて日だ！つチュー！」

そう言い残しワレチューは逃げて行き僕たちは武器を納める。

「それにしてもコウヤがあんなに強いとはね・・・人は見かけによらないって事だね」

「これでも鍛えているからね、みんなのお荷物にはなりたくないし」

「そんな事ないよ、コウヤがいるだけでみんな嬉しいんだから♪」

「私は別に・・・」

「でもさつき日本一はコウヤに見蕩れていたよね〜？」

「そつそれはコウヤが見た事のない技を使っていたからで別に他意なんて!?!?!」

2人とも結構言い合うけど仲良くてホツとしゲームキャラと守っていたネプギアたちに歩み寄る。

「あれが・・・今のゲームギョウ界を脅かしている敵か」

「そうです、しかもその敵にあなたの居場所が知られてしまいました」

「そうようだな、しばらくは身を隠す必要がある」

「だったら一緒に来るです!、私たちがゲームキャラを守るです!」

「・・・1つ聞いても良いか?」

「どうしたの?、急に畏まって?」

「あの敵が言っていた事だが・・・本当に人間も女神も希望の光を・・・っ!?!」

『ドクン!ドクン!!』

ゲームキャラが何か尋ねようとした時、僕のエボルトラスターとゲームキャラはビーストの反応を感じし海側を注視していると!

『ドツカーン!!』

「っ!?!、一体何!?!」

「あれは!?!」

「ビースト!?!」

「ギヤオオオオン!!」

恐らく地中を潜って現れたビーストはインセクトタイプビーストバグバズンだった！、十中八九狙いはゲームキャラだ！

「あやつがゲームギョウ界に災厄を招く怪物か」

「そうだよ！、しかもビーストはマジエコンヌに操られているって話だよ！」

「僕が奴を引き付ける！、その間にみんなはゲームキャラを連れて逃げる！」

「何を言っているんですかコウヤさん!?!、コウヤさんも一緒に!!」

僕はネプギアの制止も聞かずにブラストショットをエアーストモードに切り替えてから構えてバグバズンに向けて波動弾を撃ちながらみんなから離れるように走っていく。

「ギヤオオオオン!!」

だがバグバズンは口から火球を放って僕をローリングでなんとか躲す、確かバグバズンは火球なんて出さなかったはず・・・もしかして原作よりも進化しているのか!?!

僕は苦々しい表情を浮かべるがバグバズンはお構いなしに火球を放ち続け僕は走って回避するけど1発の火球によって進路を阻まれ足を止められた隙に次の火球が僕の至近距離に着弾し僕は大きく吹き飛ばされた！

「うわああああ?!」

「コウヤアアア!!」「コウヤさん!!」「コウちやあああん!!」

一瞬みんなの叫び声が聞こえるけど僕はダンジョンの外へと落ちて海に叩き付けられた!

日本一 side

「つたく無茶しちゃって!」

私は海に落ちたコウヤを助けようとコウヤが落ちた地点まで走っていく。

「っ?!、日本一さん逃げて!!」

「えっ?・・・っ?!、キヤアアア!!」

私はビーストが尻尾に付いていた口から出した舌に気付かず巻き付けられてしまう!

「はっ早く助けないと!!」

「私に任せてくださいい！、プロセスサユニットそうちゃ・・・」

「ギヤオオオオン！」

ネプギアが女神化して助けようとするけどビーストは火球を放ちみんなは間一髪で避ける。

「みんな大丈夫!？」

「なんとか無事です・・・でも日本一さんを」

「これでも食らえー!!」

みんな無事みたいで起き上がったREDがけん玉やパチンコで舌を攻撃するけど全く意味がなくREDは右手を広げて金色の龍の口が開く。

「・・・ダメ！、これじゃあ日本一も！」

金色の龍も武器みたいだけど私を巻き込む事を恐れたREDは発射出来なかった。

「このー！このおお!!」

「ギヤオオオオン・・・」

私は藻掻いて脱出しようとするけどビーストはまるで「無駄だ、諦めろ」と言っているような低い鳴き声で私は徐々に近づくビーストの顔にこれまでにない恐怖を感じて絶望する。

もうダメ・・・っと思ったその時！

「セヤア！」

「えっ？」

「ギャオオオオン!?!」

背後に暖かくて眩い光を感じて私は顔をなんとか傾けると光は私を包み込みそしてまるでビーストに何かが突撃したような衝撃とビーストの悲鳴が聞こえた。

「この光・・・まさか!?!」

光に包まれていた私は真上を見上げ光は収まっていくと・・・

「ウルトラマン・・・ネクサス!!」

その正体は私の同士である一人目のゲームギョウ界のヒーローウルトラマンネクサスだった!、私はネクサスの左手のひらにいてネクサスはみんなの元まで歩きゆつくりと左手を降ろして私を地上へと降ろした。

「助かったわ!、ありがとう!」

私はネクサスに礼を言うとネクサスはゆつくりと頷く、さつきまでの恐怖も絶望も消え今の私の心は安心と希望に満たされていたけど何処かあの暖かさは何処か憶えがあつてそこだけが引つ掛かっていた。

ネクサス side

僕は海に落ちた後、すぐにエボルトラスターを引き抜きネクサスへと変身し間一髪食われそうになった日本一を助け地上へと降ろした、その時の目はまるでヒーローを見る子供のように僕は罪悪感を感じていた。

僕が下手に演技をせずみんなの前で堂々と変身していれば日本一を危険に晒す事もなかったんだ……だがみんなにはまだ正体を知られる訳にはいかない……あの時が来るまでは。

「流石は私の婿だ〜!」

「ネクサス……やっぱり来てくれたのね!」

みんなも輝いた目で僕を見ていたが僕はそれに応えずバグバズンを振り向き構えを取る。

「ギャオオオオン!!」

「ヘアッ!」

バグバズンは怒っているように鳴くが僕は気にせずバグバズンに突っ込み取っ組み

合う。

「セヤアアア!!」

「ギャオオオオン!?!」

僕とバグバズンは力比べをするが僕が押し勝ち腹部を膝蹴りを浴びせ大きく回して投げ付ける!

バグバズンは大きく海に叩きつけられ悲鳴と共に叩き付けられた衝撃で出来た波がダンジョンに隔て建てられた壁に打ち付けられる。

「凄い波です……」

「確かこの近くの沿岸付近にはリゾート地が……」

「ええ確か……っ!?!、このまま戦って大きな波でも起きたら!?!」

確かにこの先にはラスティションでも有名なリゾート地がある、僕とバグバズンが戦えばいずれ大きな波がリゾート地を襲ってしまう!

そう考えた僕はメタフィールドを展開する為にフェーズシフトウェーブを放とうと構えを取って左手を真上に上げて発射しようとした瞬間!

「ハアアアア……デエツ!?!、ウワアアア!?!」

背中に何かが命中し思わず僕は倒れてしまい不発に終わってしまった。

僕は起き上がり上空を見るとその正体が分かった。

それはラストेशन防衛隊の戦闘機「L-15B ブラックイーグル」だった。

ラストेशनside

「こちらBR01、コードネーム「ウルトラマンネクサス」のメタフィールド展開の阻止に成功しました」

「予定通りBR01〜03まではビーストネーム「バグバズン」を攻撃、BR04と05はウルトラマンネクサスを攻撃」

「了解、ミッションを遂行します」

ラストेशन防衛隊でもビーストそしてウルトラマンへの攻撃の為に編成されたチーム「ブラックレイダー（通称BR）」に僕は教会の指示を作戦司令室から出す。

「ケイ様これを見てください」

「どうしたんだい？・・・成る程、プラネテューヌからの情報通りビーストサーチャーにはネクサスは引つ掛からずメガミサーチャーには捉えられているね」

どうやらプラネテューヌのネクサスを味方と演出する情報ではなかったようだね、ラストイションで全てのサーチシステムも点検及び改修済で疑う余地はない、幸先の良い出だしと言つて良い。

「周辺地域の避難は？」

「完了していません、ただ近くのダンジョンに数名確認していますが・・・」

「問題ない、いざとなればゲームキャラもプラネテューヌの女神候補生もいる」

僕がそう答えるとオペレーターはコンソールに向き直す。

ウルトラマンネクサス：・・・ないとは思うけどBRを攻撃しないでほしいな、そうじゃないと君を味方として宣伝出来なくなるからね。

ネプギア side

「あれはブラックイーグル!!、ラストイションの防衛隊は何をやっているのよ!!」

「明らかにネクサスの邪魔をしたです!!」

「こらー!! やめろー!!、ネクサスは私たちの味方だよー!!」

みんなが空を飛んでいる戦闘機に怒っていて私も同じ気持ちだった、ネクサスは私たちの味方でさつきも日本一さんを助けてくれたのに!

「ギャオオオオン!」

「ツー、セエヤア!」

ネクサスは上空を飛ぶ戦闘機を見つめるけど何もしないで起き上がったビーストを向き構えを取って走りビーストの大きな爪の先制攻撃を避けて背中にハイキックを叩き込む。

次にネクサスは尻尾を捕まえようとし恐らく投げようとしたけど何故か途中で止める。

その隙を見逃さずビーストは振り向き様にヘットバットを繰り返すけどネクサスは腰を落として避けた直後大きく腰を上げてアッパーを浴びせてつかさず腹部に蹴りを浴びせビーストは大きく仰け反る。

「なんでネクサスは途中で動きを止めたの?」

「恐らく上空の戦闘機に当たる事を避けたんですよ」

「・・・構わずに投げちゃえば良かったのに」

「RED!」

REDさんの眩きに日本一さんが叱りますがアイエフさんやコンパさんが俯き私も目線を下に落とした。

叱るのは当然だけどREDさんと同じ意見が私の心の片隅にある・・・気がしました。その時ネクサスは握り拳を作ってビーストにパンチを繰り出そうと迫りますが。

『バシユーン！バシユーン！』

「っ!?!、イエアア!?!」

2機の戦闘機のレーザービームを何発も受け悶えて思わず膝を着く。

その間にビーストの突進を受けてネクサスは大きく後退し息をつく暇もなくビーストは大きな爪を振り下ろしネクサスは掴みとりまたも力比べになる。

『バシユーン！バシユーン！』

その時5機の戦闘機はネクサス諸共ビーストをレーザーで攻撃する。

「ギャオオオオン!?!」

「ウワツ!?!」

ネクサスとビーストは思わず離れビーストは戦闘機に火球を放ち戦闘機は慌てて回避しそれを見たネクサスは咄嗟にビーストに組み付いてビーストの頭に肘打ちを浴びせ更に少し距離を空けて回し蹴りを浴びせる。

ビーストもこれには一回転してフラフラしネクサスは追撃しようとしませんが・・・

『バシューン！バシューン！』

そんな時に限って戦闘機の攻撃が邪魔をして更にネクサスはダメージを受けてしま
いビーストの方にもレーザで攻撃しますがさっきよりも距離を空けていたのであまり
命中していなかった。

「なんで・・・ネクサスにはあんなに接近して撃っている癖にビーストにはそんな所から
撃っているのよ!？」

「ビーストが怖いというのは分かりますけど・・・」

「くっ・・・!!」

アイエフさんが叫びコンパさんが落ち着かせようと宥めますが日本一さんがやり切
れない様子で握り拳を作ってREDさんに至ってはお教えできない程に野次を飛ばし
ていました。

ラストイションside

「ネクサスのバトルアビリティは……すごいな、前回のペドレオンの戦闘より100%以上も上がっているとは……」

「BRの方は……芳しくないです、ネクサスには効いていますですがバグバズンには初めての攻撃という事もあってあまり効いていないようです」

オペレーターはそう言うが……その理由はモニターを見ていればすぐに分かる。

「マトモに当たれば話だけだね」

「どういう事ですか？」

「この戦闘……どう見てもネクサスへの攻撃回数が多い……それに見てみて、ピーストからは背後それに攻撃を恐れてかなり距離を空けてから攻撃している、それに比べてネクサスは……ほらね」

僕はオペレーターに説明していると丁度モニターでBRがバグバズンを攻撃しバグバズンは応戦しようと火球を放とうとするけどネクサスが慌てて組み付き疎かになった胸部に爪の一撃を受けて後退しその後BRがネクサスを攻撃するという光景が映っていた。

「……確かにバグバズンへの命中率が低いです」

「その差は半分か……誰だつて死を恐れるBRだつて例外じゃない、けどもし相手にこちらを攻撃する意志がなかったら……」

「……………」

オペレーターは答えなかったがオペレーターもBRももう気付いているって事になる、ビーストは僕らを脅かす「脅威」でネクサスはそれと戦う僕らの「味方」という事を。

「っ!?!、ケイ様!、戦闘エリアにユニ様いえブラックシスター様が侵入しました!」

「なんだって?」

モニターを見るとそこには紛れもない女神化したユニの姿があり真っ直ぐビーストとネクサスの元に向かっていた。

ユニside

「ビーストとネクサスは……見えた!」

アタシは女神化し空を飛んでビーストとネクサスが戦っているエリアが来てやっと2匹を見つけた!

ケイはアタシに教えなかったけど滅多に入らないはずの司令室にいて聞いて覗いていたらビーストとその直後にウルトラマンネクサスまで現れていたなんて・・・なんでアタシに教えなかったのよ！

「ブラックシスター様!?!、何故このような場所に?」

「勿論あの2匹を倒す為よ、あなたたちはビーストを集中攻撃してアタシはネクサスを攻撃するわ、ケイの指示は無視して女神権限よ!」

「りよつ了解!」

BRの隊長はどもりながら答えネクサスに照準を合わせる。

トリガーを引こうとした時、何故か一瞬躊躇ってしまうけどトリガーを引きネクサスにX・M・Bエクスマルチブラスターの一撃が命中する。

ネクサスは命中した右肩を押さえアタシに振り返ると驚いた様子で私を見て隙だらけのネクサスの左胸部にもう一発浴びせネクサスは大きく仰け反り膝を着く。

アタシはもう一発撃とうとすると。

「ユニちゃん?・・・ユニちゃん何をしているの!?!」

「ネプギア・・・」

近くのダンジョンにいたネプギアがアタシに気付き呼び掛ける、アタシもその声で初めてネプギアたちに気付くけどビーストとネクサスに接近する。

どうせ「ネクサスを攻撃しないで！」って言うはず、所詮ネクサスもビーストに過ぎないのに味方と信じるネプギアの気持ち信じられなかった。

あの2匹を倒して女神が女神候補生があんな奴らより強い事・・・アタシがアイツ等よりも強い事を証明してみせる！

そのブラックイーグルが背後からビーストを攻撃しようとするけどビーストは尻尾を突き出し尻尾の口から火球を放つ！

「なにっ!?!」

「BR04回避するんだ!」

近くを飛んでいた1機のブラックイーグルに当たりそうになるけど謎の光刃が火球を相殺した。

その光刃を放ったのは・・・ウルトラマンネクサスだった。

「まさか・・・助けてくれたのか?」

「騙されないで!、奴は獲物を横取りされないようにしただけよ!」

何の気の迷いか知れないけどBRの隊員の発言はアタシは答える、絶対にそれしか理由はないんだから!

「せエヤ!、ハアアアアア・・・デエヤア!!」

「ギャオオオオン!?!」

その直後ネクサスはジャンプしてビーストの背後に着地すると尻尾の方の口の牙を持ち上げへし折りビーストは悶え苦しみネクサスは背中に蹴りを浴びせてビーストを吹き飛ばした。

立ち上がるうとするビーストにネクサスはジャンプし恐らく飛び蹴りを浴びせようとするけどこんな絶好のチャンス逃さないわ！

「Xエクスマルチプラスター M B !!」

「ッ!?、イエア!?!」

ジャンプして無防備になるネクサスに私は必殺の一撃を浴びせネクサスは大きく態勢を崩し海に叩き付けられる。

「ギャオオオオン!」

「ッ!?、ウワアアア!!」

その直後ビーストは倒れているネクサスの左足に大きな爪を突き刺し引き抜くとまるで血飛沫のような光の粒子が飛び散る。

「・・・もうネクサスはいつでも倒せるわ、アタシもビーストを攻撃して一気に倒すわよ!」

「了解・・・」

その時アタシは何故か心が痛くなり気にせず指示を出すけどその返答は何処か覇気

がなかった。

「ユニちゃん止めて!!、なんでネクサスを攻撃するの!?!、ネクサスは戦闘機の人を助けたのに!!」

「ネプギア：：アンタは黙ってて!ネクサスも所詮ビーストと同じアタシたちの敵よ!、敵は排除するしかないわ!!」

「なんであの姿を見て敵だっと思うの!?!、人を守ってユニちゃんや戦闘機の攻撃を受けて傷を負っても攻撃する素振りすら見せないのに!!」

「いいから退きなさい!!」

アタシは攻撃を止めようとする女神化して飛んできたネプギアを突き飛ばしビーストに後ろに回り込んで攻撃すると同時にBRも攻撃する。

「ギャオオオオン!!」

ビーストは怒ったような鳴き声を上げ振り返りアタシを見つけると徐々に迫ってくる。

「上等よ!、食らいなさい!!」

アタシはX・M・Bをビーストに向けて撃ちビーストは多少仰け反るけど歩みを止めずにアタシに迫ってくる。

「っ!!、ふんっ!やるわね．．．でもこれで終わりよ!」

アタシはX・M・Bに全エネルギーを溜めこの一撃でビーストを倒す!

「はあああああ!!、エクスマルチブラスタァァァ!!」

「ギャオオオオン!?!」

アタシの全身全霊の一撃がビーストに命中しビーストは悲鳴を挙げながら倒れた!、これで確実に倒したはず・・・

「ギャオオオオン!」

「うっうそ・・・」

だけどビーストはすぐに立ち上がりアタシに迫る。

「っ!?、ブラックシスター様!!」

「ダメだ!!、ここから攻撃したらブラックシスター様にも当たりかねない!!」

「うっうそよ・・・こんなの絶対にみとめな・・・」

「ギャオオオオン!!」

飛行するのがやつとのアタシはすぐに逃げる事が出来ずに呆然と眩くとビーストは勝ち誇ったように叫び大きな爪を振り上げそしてアタシに向けて振り下ろす!

「ブラックシスター様!!」

「ユニちゃん!!」

アタシは思わず目を瞑り両手で頭を抑えた!

アタシは死んだ……と思ったけど全然そんな感じがせず両手を開いて目を開けた時。
「ハアアアア!!」

なんとネクススが爪を掴み取ってピーストを押しえ込みアタシから遠ざける。

「ユニちゃん大丈夫!?!」

「ええ……」

ネプギアがアタシに肩を貸しアタシは驚きのあまりずっとネクススを見ているとピーストを押しえ込んでいたネクススはアタシを見つめ「君を絶対に守る!」と言っているように思えこれまで敵だと思っていたアタシの心が揺れ動いていた。

ネクスス side

僕は途中ユニの介入で驚きバグバズンに左足を負傷させられるけどなんとかユニのピンチを救いフラフラしていたユニは女神化したネプギアが助け逃げていく。

僕は後退させたバグバズンを離し爪の一撃をバク転で躲すと戦闘機が援護するよう

に攻撃する。

「ウルトラマンネクサス・・・」

僕は隊長と思われる人の呟きを聞きその人を見て頷くとその人も意味を理解してくれたように頷く。

「全機回避！」

「了解！」

戦闘機は回避して空を開けてくれた、これで準備は整った！

僕は突っ込んでくるバグバズンにタツクルを決めて怯んでいる隙にバグバズンを持ち上げて真上に投げ付ける。

「ハアアアアア・・・デエヤアアアア!!」

その直後僕もジャンプして空を舞い咄嗟に翼を広げて逃げようとするバグバズンを飛び越えバク宙を決めて痛むけど左足にエネルギーを溜めて飛び蹴りをバグバズンの顔面に叩き込む！

それだけじゃなく顔面に浴びせたと同時に高速回転を加えて放つ必殺のキック「スピニングクラッシュキック」はバグバズンの顔にめり込んでいき・・・

「ギャオオオオ!!」

バグバズンの悲鳴と共に身体を貫通し僕は海に着地するとバグバズンは巨大な爆発

と共に粒子となつて完全に消滅した！

「ラストイェン side

「バグバズンの消滅を確認……」

「粒子一つも残っていない……」

「空中であの技をやったのは……地上の被害……高波を出さない為……でしようか？」

「そうだろうね」

それ以外にネクサスがわざわざあんな回りくどい方法を取るはずがない、最初はメタフィールドを展開しようとした程だからね、今回は止めさせてもらつたけど。

「ネクサスは沈黙していますけどどうしますか？」

「今の戦力で勝てるかも？」

「……不可能です」

「なら君たちに取れる行動は1つだね」

「了解、全機戦闘態勢解除、これより帰投する」

「了解」

B Rが撤収するとネクサスは負傷した左足を抑えるけど両腕のエルボーカッターをクロスさせてからガッツポーズを取るとネクサスは光の渦の中に消えて反応も消滅した。

これで宣伝する為の映像が撮れたけどユニがネクサスを攻撃したのは誤算だった、あまりシエアの方は期待出来なくなるけどマジエコン普及率が下がれば相対的に女神のシエアが増えるのはプラネテューヌが既に実証済みだからそちらを急務した方が良い。

そう思う僕だけどすぐに僕は後悔する事になる、まさかネクサスの「正体」が「彼」だとは気付かずに・・・そして後々にユニの心もより深々と抉り取るように・・・

Episode 16 衝突—リグレット—

ネプギア side

私は支えていたユニちゃんと共に地上に降りるとユニちゃんを女神化の変身を解きへ垂れ込んでしまった。

「大丈夫ですか？」

「ええ……」

心配するコンパさんにユニちゃんは戸惑いながらも答えた。

「私はコウヤさんを探してきます！」

「頼んだわよネプギア」

「おうい！、みんな」

私は海に落ちたコウヤさんを探しに行こうとすると私たちの後ろから聞き覚えのある声が聞こえる。

「コウヤ!?、あなたどうやって!？」

「なんとかよじ登ってね、いや、苦勞した」

「でも10mはあつたはず……」

「だからこそ苦労したんだよ」

「一体どうしたの？」

「さつきまでコウヤは海に落ちていたんだよ、なんとか自力で来たみたいだけど」

その時の事を知らないユニちゃんは日本一さんから事情を聞いて驚いていた。

「そうだったの!？」

「まあこうやって無事でいるんだからもう良いじゃない、それよりも僕たちにはやるこ
とがあるだろう?」

いつものコウヤさんに私は一安心しコウヤさんの言う通り私はラステイションのゲ
イムキャラに向き直す。

「もう一度お願いします!、私たちと一緒にお姉ちゃんを女神さんたちを助ける為に付
いて来てください!!」

私はもう一度ゲイムキャラさんに頼み込みゲイムキャラさんは少し沈黙すると・・・
「やはり私は古の女神との約束は破れぬ」

「もう頭が固いなあ」

「今はゲイムギョウ界全体があんな感じなのに自分の住む所だけ守れば・・・!」

「だが・・・この地を離れずとも其方たちに私の力一部を貸すことは出来る」

ゲイムキャラさんはそう言うと一枚の黒色のディスク「ブラックディスク」を作り出

した。

「これが私に出来る精一杯、希望の光と共に女神とゲームギョウ界を頼む」

「ありがとうございます、ウルトラマンネクサスと一緒に両方助けてみせます！」

「ウルトラマンネクサスか・・・、ラストイシヨンの女神候補生、1つ言わせてもらおう」
ゲームキャラさんは急にユニちゃんに話を振り予想外な事にユニちゃんも戸惑ってしまう。

「はっはい、何でしょう?」

「力を持ちし者は常に何と戦わなくてはいけないか見極める必要がある、それは女神も希望の光・・・ウルトラマンネクサスも変わらない」

「っ!?、まさかあなたまでネクサスを・・・!」

「私情に駆られるはまだまだお主が未熟な証、もっと視野を広くし己の力量をちゃんと測る事だ、必ずしも「助け」がある訳じゃないぞ」

ユニちゃんは反論しようとするけど畳み掛けるように言うゲームキャラさんに心当たりがあるような素振りを見せる。

「ユニ、君のやった事は間違いない、そんなに深く考える必要はないよ」

コウヤさんが励ますように言うけれど余計に追い込んでしまったのかユニちゃんは走り去ってしまった。

「何はともあれこれでゲームキャラの協力を得られたわね！」

「でも女神候補生の協力は得られていないわね・・・」

「女神候補生が2人もいればかなり心強いですけど」

「ダメならダメで仕方ないよ、その国の事情もあるから、最後に教会に報告してくるよ」

「コウヤ私たちも行くわ、少しあの教祖に文句を言いたくなつたし」

話が纏まると私たちはラストেশヨンの教会に向かった。

でもその時は私はコウヤさんが左足を庇いながら歩いているように見えたけど少し疑問に思っただけで口にはしなかった。

#####

Kooya's side

その後、僕たちはラストイションの教会を訪れ既にケイが待つていた。

「やあ、お疲れ様、またピーストとウルトラマンネクサスに出会すとはね、それにしても驚いたよ、まさかあの頑固者の協力を得られたとはね」

「一応報告に来たんだから、先に言うのをやめてくれないかしら」

アイエフは何処か怒っているようで日本一やREDも少々ご立腹に見えた。

「名残惜しいですが僕達、これからルウイーに行かないといけません」

「その前に、もう一度だけユニちゃんに会えませんか？」

「ユニならあなた方が来た時に慌ててその扉から出て行つたけれど」

「ちよつ!?!、なんでばらすのよ!」

ケイが右斜め後ろの視線を向けると半開きになっていた扉からユニが出てきた、相変わらずツンデレだね。

「ユニちゃん良かった!、慌てて帰ったから怪我でもしているんじゃないかもって心配したんだよ!」

「ネ・・・ネプギア・・・」

自分よりもユニの心配をしていたネプギアにユニも毒気を抜かれていた。

「もう一度だけ聞くよ、ユニちゃん．．．私たちと一緒に来てくれないかな？」
「今は．．．ダメ！」

ユニはネプギアの誘いをキツパリと断つてしまふ、その表情からはまだ自分は役不足だと言っているように思えた。

「．．．そつか、せつかく友達になれたのにケンカばかりで結局．．．仲直りも出来な
いままで．．．」

「べつ別にケンカしているから仲間にならないんじゃない？」

「ほんとっ!?、じゃあまた会ってくれるの!？」

「まあその内に．．．気が向いたら．．．」

「本当の本当に?、約束だよユニちゃん！」

「あーもう!、気が向いたらって言ったでしょう!、ほんとしようがないわね!」

言い合っているネプギアとユニは本当に仲の良い友達同士だった、こんな光景が当たり前にもっと僕が頑張らないといけない!

「あなたも大した人だね、ユニのそんな顔が拝める日が来るなんて」

「なんでニヤニヤしながら見ているのよ!？」

「．．．ここを出発する前に、一つ聞いていいかしら?」

「ネクサスの事かい?」

アイエフが切り出すとケイは言い当ててよりアイエフの表情が険しくなる。

「ブラックイーグル部隊それに彼女にネクサスを攻撃指示をあなたなの?」

「そっ・・・それは!」

「ああ、ユニとBRに攻撃指示を出したのは僕だよ」

ケイはユニの言葉を遮るように言いその後ユニは俯いてしまう。

「なんでなの!」、ネクサスは私と同じヒーローなのよ!、あなたたちは知らないかもしれないけどネクサスは私の命を救ってくれたのよ!」

「勿論知っているさ、ピーストが現れてからネクサスが消えるまでの一部始終は保存していたからね」

「じゃあなんであんなにネクサスを撃ちまくったんだ!、ピーストには怖がって全然当てられなかったくせに!」

「全然ではないけど比較すると二分の一度度しか当たっていなかったのは確かだね」

「3人とも、ここで怒りをぶつけても仕方ないよ、早くルウィーに向かおう?」

何かと思えばネクサスに攻撃した事への抗議で国の姿勢として当然な事をしたままでのなんなんでごんなに怒っているんだらう?、どっちかって言うとならぬテクニクの方が色々とおかしいはずなんだけど・・・

「別に僕はネクサスが憎くて指示を出してないとは言っておこう、ウルトラマンネクサ

スを味方と認識されるにはそれなりに証拠が必要だね、今回の戦闘で大体は揃ったよ」「じゃあケイさんはネクサスが味方だって信じていたのですか？」

「・・・何はともあれ、長い時間拘束してしまつてすまない、あなた方の旅の安全を願つているよ」

「さっきの数秒の間は一体何？」

まだ責めるように言うアイエフにケイはヤレヤレと言わんばかりに溜め息をつく、流石にこの状況は悪すぎるから早く話を進めようか。

「ありがとうございます、そちらもお元気で」

「ああ、最もルウイーの女神候補生達にはユニ以上に苦労・・・いや君がいるからあまり手は焼きそうないかな？」

「女神候補生・・・達？」

「確かに婿がいれば寒いルウイーでも暖かそうだもんね！」

ネプギアが疑問に思う中、REDは胸を張つて答える、それ普通に公然の場で言われるとこつちが恥ずかしいなあ・・・

「婿？」

何故か息びつたりで尋ねるユニとケイに僕は女性にしか発せられない何とも言い難い怖さを感じる。

「REDが勝手に僕の事をそう呼んでいるだけなんで気にしないでください」

「あく流石にその発言は傷つくなあ」

「本気で誤解されちゃったらマズイでしょ？」

「ふんっ！、いいもん!!、2人とまた会うまでに攻略しちゃうから!」

攻略つてギャルゲーじゃないし、それに僕なんて攻略しても前途多難なルートしかないと思う。

「2人ともバカやってないでさっさと行くわよ」

「ああ今行く!、すいません最後の最後でご迷惑を掛けてしまつて、これで失礼します」

「じゃあねえ〜．．．つて、今度ネクサスに攻撃させたら許さないよ!」

「ああ気にしていないよ、君の方は次会った時にでも返事を聞かせてもらえると助かるよ」

ケイの柔らかな笑顔に僕は頷き2人を背にして教会を後にした。

「婿、返事つてもしかして!」

「仕事のお誘いだよ、ケイは根からの仕事人間だからね」

「．．．君の僕に対する評価が良く分かったよ．．．」

その時僕とREDのやり取りにケイは少し落ち込んでいるようでユニはとても気まぐすそうに僕たちを見送っていた。

それから僕たちはルウイーに向かおうと準備をしていた。

「あつー、ちよつと忘れ物したからすぐに取り入ってくるー」

「忘れ物？、大きい物なら手伝うわ」

「そんな大きな物じゃないから大丈夫、一人で行ってくるよ」

僕はみんなに断りを入れてある物を取りにトランクルーム（現代のコインロッカーのような物）に向かった。

みんなと別れてから数分でトランクルームに到着して荷物を預ける際に設定するパスワードを入力する。

すると目の前のシャッターが開いて僕が預けていた荷物が自動で出て来た、本当にゲイムギョウ界はハイテクだなあ

「みんな・・・喜んでくれる良いけど・・・ウツ!？」

僕は中身を確認してそう願うけど急に左足が痛み咄嗟に周りの人に見られていない

か見渡し人通りが少ない路地に移動して膝を着く。

「バグバズンにやられた時の・・・光の力で傷は治せても痛覚は消えないのか」

みんなと合流する直前に治癒能力で左足のケガは治したけどそう上手くは行かないって事だよな。

「でも日本一いやみんなの方がもつと怖い思いをしているんだ、僕がこんなケガで痛がつて言い訳がない！」

それにみんなはバグバズンを目の前にしても毅然とした態度で立ち向かっていた、こんなケガで痛がる僕なんかより余程立派だ、僕もみんなを見習われなければいけない！

僕はそう自分を戒めながらみんなの待つ場所に向かった、その一部始終を捉えていた監視カメラがあるとは気付かずに・・・

「みんな、お待ちせ」

「そんなに待っていないです」

僕はみんなの元に戻りみんなは僕が持っていた紙袋を不思議そうに見ていた。

「ネプギア、これを……」

「これって……もしかして!?!」

僕はまずネプギアにラストイシヨンに来て直ぐに見入っていたパーツを刀のように持つネプテューヌのキーホルダーを渡した。

「アクセサリーショップの人に少し手を加えてもらったんだ、結構様になっているでしょ?」

「でも頂いても良いんですか!?!」

「いつも頑張っているネプギアに何かご褒美をあげたくなってね、まあ僕の勝手な自己満足だから気にしないで」

「そんな……コウヤさんだって……でもありがとうございます、大事にしますね……」
少し照れた様子でキーホルダーを見つめるネプギアに僕はゆつくりと頷く。

「ギアちゃん良かったですね」

「勿論コンパにも用意しているんだよ?」

自分の事のようにネプギアに笑顔を向けるコンパにも僕はポーチと……

「あとこれも、前に今のカチューシャがボロボロになったらこれを使ってみたいって言うっていたから……」

いつの日かコンパとアイエフとウインドウショッピングをしていた時に言っていた「CとNのマーク」が入ったカチューシャを渡す。

「良いんですか!?!、コウちゃん!?!」

「ああ・・・卒業祝いもあの時バタバタしていて出来なかったからその時のも合わせているけど」

「もっ・・・もう気にしなくて良いですけど、でもありがとうございますコウちゃん・・・」

コンパは涙目になりながら礼を言うけど僕はコンパは必死にナースを目指して勉強していたのを知っている、友達として僕は何か彼女にしてあげたかった。

「・・・当然私の分もあるんですよ?」

「それは勿論!、アイエフのはこれと・・・これ」

悪戯っ子みたいな笑みを浮かべながら尋ねるアイエフに僕は厨二心をくすぐりそうなキャラクターのキーホルダーとある箱を渡しアイエフは驚いていた。

「これって!?!、どうやって手に入れたの!?!」

「まあ中身を確かめてみてよ」

アイエフは途端に目を輝かせて箱を開けると中には紫色のケータイが入っていた。

「それって・・・アイちゃんが欲しがっていたケータイですか?」

「うん、プラネテューヌじゃ売り切れていたけどラストেশションのショップだとまだ

売っていたよ」

そのケータイはアイエフ曰くかなり高機能でシンブルなデザインがウケた人気の高いケータイらしくラステイションでも結構ショップを巡ったのは確かだった。

「ありがとう〜コウヤ〜!!」

余程嬉しかったのかアイエフは思わず僕に抱きつき僕はどうしたら良いのか戸惑ってしまふ。

「アツアイエフ!?!、一体どうしたんだ!?!」

「っ!?!、いつ今のは冗談よ!?!、REDに抱き着かれて鼻の下伸ばしていたからからかっただけだから!?!」

「あつああ、それはちゃんと分かっているからそんなに必死にならなくても良いから」

アイエフの必死の弁明に僕はそう答えるとアイエフは顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

「良いなあ〜REDちゃんには何かないの?」

「まだ知り合ったばかりなのにあるわけ・・・」

「あるよ?、ご所望の物かどうかは分からないけどね」

僕はREDにはREDが巻き付いている金色の龍に似た絵が書かれたベイゴマを日本一には良く分からないけど何となく似合うと思ったカッコイイグローブを渡した。

「ベイゴマだあく！、この絵は私の龍と合わせてくれたんだ！」

「へえく・・・中々分かっていないじゃない・・・」

2人ともお気に召したようで目を輝かせるREDとまじまじと見つめ実際にはめて感触を確かめていた。

「でもこんなに用意して大丈夫なの？」

「それなりに蓄えはあるから問題ないよ、それじゃあるウイーに向かおうか！」

アイエフは僕の懐事情を心配するけど僕はそう答えみんなは一斉に頷き僕たちはルウイーに向かった。

第3章 白の女神候補生たちとのデイフェンス

Episode 17 白の大地——ルウイー——

僕たちはラステイションでやるべき事を終え一度イストワールに一報を入れ現在守護女神ホワイトハートが治めるルウイーに来ていた。

「ルウイーにとおちやーく！」

「ここがルウイーね……」

「うわぁ寒い……でも綺麗な街ですね」

「雪化粧もここまで似合うのはすごいなあ……」

近代的なラステイションと真逆なファンタジーの街のような風景に感動していた。

「ルウイーは一年中、雪に覆われた国です、上着を買っておいた方が良いかもです」

「時間があつたらね、まずは情報収集を始めないと」

「どうする？、ギルドから行く？」

「いや、教会に行きましょう、ここの教祖は悪い噂は聞かないし多分大丈夫よ」

ルウイーの教祖は温厚な（怒らせると怖い）西沢ミナでここの守護女神のお母さん的な人でもあつたはず。

確かこの後は原作通りだと・・・

「教会に行くには確かこの道を真っ直ぐで・・・」

「うん、その次の分かれ道を右に行けばあとは道なりだよ」

「ねーねーむこお、向こうの方がなんか騒がしいよ?」

「喧嘩かしら?」

「喧嘩!?、早く止めに行かないと!!」

「日本一さん!?、ちょっと待っていきださーい!」

少し早とちりをした日本一が駆け出してしまい僕たちも後を追う。

だがそこで行われていたのは喧嘩ではなく・・・

「みんな寄つといでー!、楽しい犯罪組織マジエコンヌだよー!」

「マジエコンヌに入信すればどんなゲームもタダで遊べちゃう!、ゲームし放題だよー!」

!」

リンダがピラ配りをやっていたがリンダからはあまりやる気を感じなかった。

「・・・ったく、なんでみじめなピラ配りなんてやらなきゃいけないんだ・・・」

「これもアイツ等がジャマばっかしてくるから！」

「あいつらつて私たちの事ですか？」

「まあそうでしょうね、でもビラ配りもれっきとした仕事だから別にみじめじゃないと思っけど」

「そうそういつつもすました感じでベラベラ言う二枚目野郎とトロそうなボケ女と・・・っ!？」

リンダはようやく俺たちに気付いたようで明らかに焦っていた、まあこっちもパーティー増えたしこの人数に対峙したらね・・・

「コウヤはすましてはいないぞ!、ちよつと能天気なところはあるけど・・・」

「ちよつとどころか結構だけどね」

「ひどっ!?!、これでも真面目にやっているだけど!?!」

「でも婿が二枚目なのは本当だよ、下っ端も分かつてる♪」

「下っ端言うな!」

なんかリンダのお決まりの台詞になりつつあったけどREDも毎回抱き着かれるのは色々と嬉しいけど最近鋭い視線が増えたような気がしてならない。

「へえ〜布教活動ね〜・・・あまり見過ごせないわね・・・」

「悪い事をしているのもそうだけどなあんか妙にイライラしているしいつも以上に懲ら

しめてやるんだから!!」

「おめえ正義の味方としてそれは良いのかよ!」

「私はなんて言われるのだったのかな?、取り敢えず下っ端さん覚悟です!」

本当みんなマイペースだな・・・それも良い味出しているからね、確かこの直後にあの子が・・・

「クソツ流石に分が悪いか・・・こうなったら!、おいそこのガキ!」

「ふえ?」

苦し紛れの悪役さながら近くにいた水色と白い服と帽子を被った小学生ぐらいの少女を捕まえ人質に取る。

「手が出せるもんなら出してみろ!、その時はこのガキの首をポキツといっちゃまうぜ!」
「相変わらず小悪党じみた真似ね」

「離せ!、その子は関係ないでしょう!!」

「へっ!、犯罪組織が汚ねえのは当たり前だろうが!、あばよ!」

「ふええ・・・助けて・・・」

原作通りならこのままあるダンジョンまで追いかけてホワイトシスターとご対面なだけで・・・

俺は懐からエボルトラスターを取り出して突き出して・・・

「トラスターフラッシュュ！」

眩い光で相手を怯ませる技「トラスターフラッシュュ」を繰り出す！

「まぶしっ!?!」

思惑通りリンダ以下みんなも怯んでいたがその隙にマツハムーブで一気に飛び込んで少女を抱えてまたマツハムーブで一気にその場から離れる。

「しやらくせえ真似を!、つてあのガキは!?!」

「残念だけど人質はもう助けたよ」

僕は少女を背にブラストショットを突き付けてみんなも臨戦態勢になっていた。

「さっすがコウヤ!、さあ下っ端覚悟しなさい」

「人質を取るなんてやり方は許せません!」

「クツソオ・・・覚えてろおお!」

リンダも退却し俺もブラストショットを納めて屈んで少女を見る。

「大丈夫?、怪我はない?」

「うん・・・だいじょうぶ・・・」

【ドクン・・・】

特に少女に怪我はなく僕は笑顔で頷くと少女はあわあわしていた時エボルトラスターが女神の反応を示す、もう一人も来たか・・・

「ロムちゃん？、どうしたのそのおにいちゃんは？」

「ラムちゃん・・・そのおにいさんが、悪い人から助けてくれたの」

少女と似たピンクと白の服と帽子を被った少女ラムが駆け寄ってきてロムが説明していた。

「あのお・・・私もいたんですけど？」

「ん？、この人たち誰？」

「たぶんおにいさんの・・・ともだち？」

「うん、そうだよ、僕は緋剣光矢、コウヤで良いよ」

「コウヤ・・・おにいさん？」

「おにいちゃん、ロムちゃんを助けてくれてありがとう！、また会おうね」

「あっおにいさん・・・ありがとう（ぺこり）、ラムちゃんまってえ」

なんだか風のように去っていたラムとロムだけどまさか2人がルウィーの女神候補生だとは今のネプギアたちは思いもしないだろうね。

「まだ私たちの自己紹介をやってないです・・・」

「大丈夫、またすぐに会おうと思うよ」

「なんでそう思うの？」

「うーん・・・なんとなく」

僕から答えを教える訳にもいかず茶を濁した言い方をして協会に向かった。

「力と力は惹かれ合う、少しお前を試してみるか」

その時物影から僕たちを見る影に全く僕は気付いていなかった。

「ここがルウイーの教会ですね・・・失礼します」

「ようこそ、ルウイーの教会へ、あら？あなたはもしかしてプラネテューヌの・・・」

「はい、プラネテューヌの女神候補生のネプギアです、今日はどうしてもお願いした事があります・・・」

ルウイーの教会に到着し早速教祖のミナが出迎えてくれた。

「候補生とはいえ女神自ら足をお運びなるとは、余程の案件なのでしょう・・・あれあなたは？」

「自分はプラネテューヌの諜報部員の緋剣光矢です、今はネプギアたちの旅に同行しています」

「やっぱりこのパーティーで男性は珍しいのか自己紹介をするけどミナはまじまじと見ていた。」

「（この人って2人が言っていた）・・・申し遅れました、私はこの国の教祖西沢ミナと言

います、お話を伺ってもらいます」

ネプギアたちが話を始めて数分後・・・

「なるほど、それでこの国のゲームキャラを・・・事情は分かりました」

「それじゃ・・・」

「申し訳ありませんがご期待には応えられません」

まあいきなり来て国を守る大事な力を貸してって言われても国としても2つ返事は出来ないよなあ・・・それに。

「どうしてですか？」

「この国のゲームキャラは重要な使命を担ってもらっています、この国を離れられてしまうと大げさではなくルウィーは未曾有の危機に陥ります」

確かあるダンジョンに封印されている殺戮兵器キラーマシンだったな、しかも今回はアンノウンハンドが何か仕掛けてくるかもしれない・・・

「その使命がなんなのか教えてもらえないかしら？」

「そんな軽々しく口にできる物じゃないし、聞くのは野暮ってもんでしよう？」

「でも悪い奴もゲームキャラの事を狙っているんだよ！」

「確かにね、だから護衛する為にも自分たちの足でゲームキャラを探す、それでよろしいですか？」

「はい、お止めはしません、皆さんなら無理矢理連れて行く事はないと信じています」
ミナは僕たちを信じてくれたようで僕たちは教会を出ようとします。

「せっかくお訪ね頂けたのにこれで追い返してしまうのはあまりにも失礼ですね」

「皆さんはこの国に伝わる犯罪神マジエコンヌの伝承についてご存知ですか？」

「犯罪神の伝承ですか？」

「はい、プラネテューヌに光の勇者の伝承が残っていたように、ルウィーには犯罪神の伝承が残っています、なにセルウィーは犯罪神が生まれたとされる国ですから・・・」

僕自身はゲームでその説明を周回ごとに聞いて知っているけど僕たちの存在のせいで内容が変わっているかもしれないから聞く事にした。

「そもそも犯罪神がどういふ存在かと言うと・・・」

「ミナちゃん、おなかすいた〜」

「おやつ・・・」

なんとこのタイミングでロムとラムが割って入ってきてネプギアたちは明らかに驚いていた。

「たまにコウヤが予知能力者じゃないか思う時があるわ・・・」

予知能力と言うより今後の大まかな展開を知っているだけなんだけどね・・・既に僕も知らない状況になりつつあるというかそうしている節もあるから。

「こら、はしたないですよ、お客さんが来ているんですから少しはガマンしてください」
「お客さん？、あー！さっきのおにいちゃんだ！、やつほくおにいちゃん♪」

「おにいさん、やつほく・・・（てれてれ）」

「やつほく、西沢さんロムちゃんとラムちゃんを少しの間僕が相手をしてしましようか？、これでも結構手馴れている方なんですよ」

「えっ？、ですが・・・お客さんにそのような事を・・・」

「おにいちゃんが遊んでくれるの？、やったー！あつちで遊ぼー！」

「遊ぼ・・・（くいくい）」

やはりミナは困っていたけどお腹が減っていたはずのラムは僕を手を引つ張りロムは僕が着ている上着の端をつまんでいた。

「・・・分かりました、手が掛かるかと思いますがお願いします」

「任せて下さい、あつ台所も少しお借りしても良いですか？」

「はい、後で私の方が言っておきます」

「えっ!?!おにいちゃん作れるの?」

「うん、簡単な物しか作れないけどね」

「おにいちゃん、こつち・・・（わくわく）」

ミナの了承を得ると2人に連れられ僕はその場を後にした。

N×N小話！

コウヤ出会ってからロムとラムが教会に帰った時の事・・・

「こらっ、勝手に遊びに行っちゃダメでしょ！、もし怖い人に襲われたらどうするんですかー！」

「ミナちゃんもこわい・・・(ぶるぶる)」

「大丈夫だよ！、私とロムちゃんは女神だし！、それにかっこいいおにいちゃんが助けてくれたよー！」

「って襲われたんですか!?!、・・・それでその「おにいちゃん」とはどんな人なんですか？」

「うーん・・・なんとなく「おねえちゃん」みたいだったかな？」

「無口じゃないおねえちゃんみたい・・・(うんうん)」

「ブラン様みたいな人・・・もしかしてキレキャラ!?!」

「コウヤに変なイメージが付いてしまったミナはコウヤに会った際に抱いていたイメー

ジとの違いに困惑していたのはまた別のお話】

Episode 18 伝承—口ア—

ネプギア side

コウヤさんが街で会った2人の少女に連れて行かれていき教祖のミナさんは考え込んでいた。

「もしかしてさっきの少女って・・・」

「えっ?、まだご存知無かったのですね、あの子達はルウイーの女神候補生、青い服の方が双子の姉のロム、ピンクの服の方が妹のラムです」

「まさか私の嫁だったなんて!?!」

「確かに私たちだけじゃ彼女より苦労しそうですね・・・」

まさかあの子達が女神候補生だったなんて・・・確かにケイさんの言う通り私たちだけじゃかなり手を焼いてしまうのは目に見えています。

「先ほどのお話の続きですが・・・そもそも犯罪神という存在は」

それから犯罪神というものがなんなのか、何故犯罪組織は犯罪神を復活させようとしているのか聞いた。

犯罪神は元々全てを破壊し全ての命を葬る闇の塊のような存在で伝承では犯罪神が

誕生した際にはゲームギョウ界が滅びかけた事、犯罪組織は旗頭として掲げているだけで組みしている多くの人はその伝承を知らずに活動しているかもしれない事。

「ですが滅びかけたという話は実は今の犯罪神、つまり犯罪組織が復活させようとしているのは2代目と言われています」

「2代目？、じゃあ初代は誰が倒したの？」

「・・・まさか!？」

「はい、初代を倒したのはプラネテューヌの伝承に残っている光の勇者「ウルトラマンネクス」です」

私も含めてアイエフさんたちも驚いていました、まさかここでプラネテューヌの伝承と繋がるなんて!？」

「その当時の古代の女神たちは国同士の戦争で疲弊しきりやつと互いに手を取り合い互いの国の復興に力を注ぎ込んでいた時に戦争によつて齎された凄まじい憎悪と怨念により犯罪神が生まれたとされています」

「その当時の古代の女神たちには力を復興の為に使い果たして真面に太刀打ちする事が出来ずもう後は自らの命を賭して封印するしかと思つたその時に絶望の闇の切り裂くように強く暖かい光と共に現れたそうです」

「ウルトラマンネクスは犯罪神と激しい戦いを繰り広げた後に犯罪神を倒し、互いに

手に取り死力を尽くした女神たちを後押しするように4つの国の復興に協力しかつての活気が戻った後、ウルトラマンネクサスは何処へと姿を消したと言われています」

「ネクサスはヒーローじゃなくて伝説のヒーローだったなんて・・・」

「でも何故ネクサスは2代目の時は助けに来てくれなかったのですか?」

確かに私も思いました、犯罪神を1人で倒せるのに2代目が現れた時には助けに来てくれなかったの?」

「それには諸説ありますが一番有力なのは「ウルトラマンネクサスの力を受け継ぐ者がいなかったから」とされています」

「力を受け継ぐ者?、じゃあ今の婿は・・・」

「恐らく伝承で言われているウルトラマンネクサスとは姿は同じですがその中身は違うでしょう」

「それが本当ならウルトラマンネクサスって・・・」

「私たちやお姉ちゃんたちみたいに誰かが変身した姿って事ですか!」

「確証がある訳ではありません、ですが今回現れたウルトラマンネクサスを見てもその可能性は高いと思われれます」

ネクサスが誰かが変身した姿なんて考えもしなかったけどもしそれが本当なら誰なんだろう?」

#####

コウヤ side

その後僕は教会所属のメイドさんに事情を説明し台所をホットケーキを作り盛り付けは2人と一緒に行つて2人が食べている姿を眺めていた。

「おにいちゃん、あ〜ん」

「僕? あ〜ん・・・」

「ただどラムのようなタイプは決まって・・・」

「やつぱやくめた、ぱくつ!」

「あ〜ラムちゃんのホットケーキ食べてみたかったな〜」

「やくだよ〜」

フェイントを掛けられてしまい僕は少し大きさにリアクションを取る。

「おにいさん、あつ．．．あゝん．．．」

「えっ？良いの？」

「．．．（くり）」

ロムがわざわざ一口大に切り分けて僕の口に運ぼうとし僕は一応口を開ける。するとロムは少し恥ずかしながらも僕の口にホットケーキを運ぶ。

「おいしっ？」

「もぐもぐ．．．うん、美味しいよ」

「良かった．．．（てれはずかしい）」

うゝん．．．嬉しいは嬉しいけどミナやブランそれにあのロリコンやルウィーの国民の皆さんやありとあらゆる「紳士・淑女」の方々にこの事を知られたら絶対に血祭りに上げられる．．．多分。

「むっ．．．おにいちゃん、口開けてー！」

「えっ、どうして？」

「はやくうー!!」

駄々っ子のように言うラムに僕は取り敢えず口を開ける。

すると適当に切ったホットケーキを勢い良く僕の口に放り込み危うくフォークが口の中に刺さりそうになる。

「どう?、おいしい?」

「・・・うん、美味しいよ」

「ロムちゃんのみより美味しかったよね?」

「そうなのおにいさん?・・・(なみだめ)」

「まずいなあ・・・こういう質問は答えにくいし「両方」って言うにはそれなりに理由が必要だしね・・・」

「うん・・・どつちのものも2人の気持ち詰まっていたとしても美味しかったよ!」

「・・・なくんだ、つままない」

「がっかり・・・」

「がっかりされたけどこれがベストな回答だと信じよう。」

時には最悪な回答だけどね・・・

その後は2人と一緒に後片付けをしてポシエモン(某大人気ゲームではない)で対戦や交換をして遊び(最新のGPS機能が搭載されていて一応レベル上げの長期休暇の際に色んなダンジョンに向かっていて結構レアなご当地ポシエモンは手に入れていた)今は2人がお絵かきをしているのをスケッチしながら書いていた。

「出来たー!」「出来た・・・(どきどき)」

「僕も出来たよ」

「おにいちゃんのを見せてー」

「おにいさん、みたい・・・(わくわく)」

「良いよ、僕が書いたのは・・・これだ！」

僕はちよつと大げさに披露して見せると・・・

「わくあたしとロムちゃんだ!?!」

「絵の中に私とラムちゃんはいるみたい(びつくり)」

そんなに上手く書けたかな?、施設にいた頃に子供達とこうやって遊んでいた時には多少慣れている程度でそんな上手くはなかったけど・・・まあ2人がお気に召した様子だし良いか。

「2人はどんな絵を書いたの?、見せてくれない?」

「いいよー!、ロムちゃんと一緒に書いたんだよー!」

「おにいさん、驚かないでね・・・(わくわく)」

結構な力作な様子、さっきの驚きようだと僕を書いたのか?、まあそんな無粋な詮索はなしにして空っぽの頭で見ますか!

「じゃじゃーん!」「じゃじゃーん・・・(てれてれ)」

2人の書いた絵はある意味衝撃的だった、内容的な意味で・・・

「おにいちゃんとウルトラマンネクサス!」

「どう?、おにいさん?」

「うん、とつても上手に書けているよ!」

僕はなんとか動揺を隠して答え2人はハイタッチをしていた、でも何故僕とネクススを?、両方とも僕ではあるけど・・・

「でもなんで僕とウルトラマンネクスなの?」

「だつておにいちゃんは悪い人からラムちゃんを助けてくれたヒーローだもん、ウルトラマンネクスも悪いモンスターと戦うヒーローだよ!」

「ヒーローつながり(びしっ)、でもミナちゃんはウルトラマンネクスはもしかしたら悪い人かもしれないから会つても近付いちゃダメだよって言っていたの・・・(しゅん)」
「おにいちゃんはどう?、ウルトラマンネクスはヒーローだよね!」

ここにははつきりと言うべきなんだろうけど・・・流石に2人のような子供にネプギアたちのように言う事は出来ず・・・

「そうであつてほしいね、いつまでも・・・みんなの希望の光に・・・」

「そんなの当たり前でしょ!、ねえ、ロムちゃん?」

「うん!(にっこにっこ)」

2人の笑顔を見て僕は取り敢えず頷きせめて子供達の期待だけは守ろうと固く決意した。

その後、ミナとの話が終わった事をメイドさんが伝えに来たので僕はみんなと合流した。

少々話が長いと思ったけどどうやら世間話をしていたようでそれで長くなったようだった。

「おにいちゃん、帰るの?」

「もつと遊びたい・・・(なみだめ)」

「ごめんね、でも僕にはどうしてもやらなくちゃいけない事があるから」

「そうね・・・でもゲームキャラを協力を仰げたらまた立ち寄るつもりよ」

「ほんとう?」

「ほんとうです!」

「その時には2人にも協力してもらいたいけど・・・」

「・・・この子達の保護者としては素直に頷くことは出来ません、最も本人たちが女神として望むのなら別ですが」

「それはまたここに立ち寄った時に答えを聞かせてもらいます」

「コウヤさん？」

ネプギアたちは話を終わらせようとする僕に疑問を持つているようだった。

「まあでも婿が言うならそれで良いんじゃない？」

「そうね、それよりも早くゲームキャラを探すのが先決ね！」

「すいません、お力になれず・・・最後に1つだけ、最近になつてこの国で大事件が起きると噂されていてそれに生じてかもしれませんがこの国の治安が悪くなつています、くれぐれも気を付けてください」

「分かりました、これで失礼します」

大事件か・・・恐らくキラーマシンの封印が解かれる事を意味しているんだろうけど、もしビーストが現れる可能性も含んでいると考えると良いかもしれない。

この状況だとなんのきっかけでビーストが現れるか分からないからね。

「おにいちゃん、また遊ぼうね！」

「おにいさん、またね・・・(にこにこ)」

「うん、またね！」

僕は2人に手を振って答えルウィーの教会を一旦後にした。

#

ミナSide

ネプギアさんたちの一行が帰った後、私は気になった事を2人に聞いた。

「2人ともコウヤさんはどうだった？」

緋剣光矢さん、あの人を見た時確かに2人やブラン様と非常に近いものを感じた、あの人は明らかに他の人とは違う。

現にラム様はともかく人見知りのロム様まで初対面である彼に既に心を開いているように見えた。

「とつても面白くて優しい人だったよ！」

「いっぱい遊んでくれるおねえちゃんみたい・・・(きらきら)」

「そうですか・・・それなら良かったです」

彼自身は2人に自分たちの旅に同行するように説得した様子ではなくむしろ彼は躊躇しているように見えた。

「でも・・・」

「でもっ？」

「ウルトラマンネクサスの事を聞いた時のおにいさんは、なんだか辛そう・・・だった？」

(うーん)」

辛そうだった？、もしウルトラマンネクサスの正体が私の推察通りならもしかして彼が？

N×N小話！

コウヤがロムとラムと遊んでいた時の事・・・

「緋剣様、すいません教祖ミナがお呼びです」

「分かりました、じゃあお片づけしようか」

メイドさんが呼びに来たので僕は2人に呼びかけるもやはり嫌そうにしていた。

「えくもつと遊びたい！」

「もう帰るの・・・(うわめづかい)」

「うん、でもまた必ず遊びに来るから」

2人をなんとか宥めて片付けを始めたけど僕はある事に気付く。

「2人が書いていたのって・・・」

「あそこの段ボールに入っていた本に書いたんだよ、いっぱい同じ本が大丈夫！」
「前にお姉ちゃんが書いていた本、なんでこんな一杯あるんだろう？」

うそっ?!、気づかなかった僕も僕だけどこれはブラン帰ってきたら確実にキレるなあ……

「ダメだよ!、お姉ちゃんに聞くまでもうこの本に書きちゃダメだからね!」

「はーい!」

本当に分かっているかな?、少し本の内容が気になった僕は本を手にとってサラッと読んでいく。

「うわ……邪気眼」とか「呪われた右腕」とかすごく厨二臭いな」

「お兄ちゃん、厨二ってなに?」

「うんうん……(はてな)」

「うくん……まだ2人にはちよつと早いかな?……」

【ロムとラムに尋ねられて返答に困る光矢だったが、少なからず光矢の厨二心をくすぐっていたのはまた別の話である】